美津島町文化財保護協会調査報告書　第１集

水崎（仮宿）遺跡

みずさき　かりやど　いせき

長崎県緊急雇用対策事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００１

長崎県美津島町文化財保護協会

瑪瑙製石帯（表）

（裏）

装飾品？

東南アジア産陶磁器

発刊にあたって

このたび，平成12年度長崎県緊急雇用対策事業の一環として発掘調査を実施した，水崎遺跡調査報告書（美津島町大字尾崎字仮宿）を発刊することとなりました。

同遺跡は過去二度に渡り美津島町教育委員会が調査主体となり，長崎県教育委員会の協力を得て調査した結果，約50m²の調査面積にも関わらず朝鮮半島系陶磁器・中国系陶磁器・東南アジア系の陶磁器を中心に豊富な舶載陶磁器が出土しました。

そして今回，長崎県緊急雇用対策事業の一環として，水崎遺跡発掘調査事業を美津島町より委託を受けまして実施したものですが，その結果中世（15世紀前後）の朝鮮半島系陶磁器・中国系陶磁器・国産瓦質土器・東南アジア系陶磁器を多量に検出しました。その他にも鉄釘・青銅品・古銭・鯨骨等の貴重な遺物を確認し，往時の繁栄を偲ばせる掘立柱建物跡の柱穴も検出しました。

今回の調査結果から数多くの成果を上げることができ，水崎遺跡（尾崎仮宿）が倭寇の本拠地であったことを裏付ける資料が多量に確認されました。

最後になりましたが，今回の調査に際しましては，ご理解・ご協力を頂いた地元関係者の皆様，ご指導を賜りました長崎県文化課，美津島町には多大なるご協力を頂いた事についまして深く感謝申し上げます。

平成13年３月30日

美津島町文化財保護協会会長　犬　束　　甫

例　　言

1．本書は，長崎県下県郡美津島町大字尾崎字仮宿の所在する水崎（仮宿）遺跡の調査報告書である。

2．調査主体は美津島町文化財保護協会が，調査は美津島町文化財保護協会が主体となり，長崎県文化課の協力を得て実施した。

3．調査は，平成12年11月６日～12年20日まで実施した。

4．調査関係者は次のとおりである。

美津島町文化財保護協会会長　犬束　甫
事務局長　松村　利光
事務局員　福井　順一
〃　小田恵美子
〃　田中　淳也　（調査担当）

長崎県文化課　文化財保護主事　福田　一志　（調査指導）

5．本書の遺物写真については，長崎県文化課の本田，竹中の協力を得て，福田が担当した。

6．本書の執筆については，田中，福田が分担執筆した。なお，国産の遺物については長崎県文化課の川口洋平が，また銭貨については下関市立大学の櫻木晋一教授・「中世の尾崎地域と早田氏」と題して九州大学助教授佐伯弘次氏より玉稿を頂いた。

7．調査期間中，福岡県教育委員会森本朝子氏，九州大学文学部助教授佐伯弘次氏にご教示いただいた。記して謝辞としたい。

8．本書の編集は田中・福田による。

本　文　目　次

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境……1
・地理的環境……1
・歴史的環境……1

第Ⅱ章　調査に至る経緯……4
1．調査に至る経緯……4
2．土　　層……5
3．遺　　構……7

第Ⅲ章　遺　　物……14
1．中国産陶磁器……14
2．朝鮮王朝陶磁……18
3．ベトナム・タイ産磁器……26
4．国産の遺物……28
5．その他の遺物……30

第Ⅳ章　附　　篇……38

第Ⅴ章　ま　と　め……49

挿　図　目　次

第1図　水崎（仮宿）遺跡位置図……1
第2図　美津島町の主な遺跡……2
第3図　遺跡周辺図……4
第4図　調査区配置図……5
第5図　土層図……6
第6図　Ⅱa層上面確認の配石遺構……8
第7図　検出ピット群……9
第8図　ピット番号図……10
第9図　龍泉窯系青磁……15
第10図　龍泉窯系青磁……16

第11図　白磁……16
第12図　明青花・天目・陶器……17
第13図　朝鮮王朝陶磁……19
第14図　朝鮮王朝陶磁……21
第15図　朝鮮王朝陶磁……22
第16図　朝鮮王朝陶磁……23
第17図　朝鮮王朝陶磁……25
第18図　ベトナム・タイ産陶磁……27
第19図　国産陶磁……29
第20図　金属製品……31
第21図　石製品・装飾品……32
第22図　土錘……33
第23図　瓦……33
第24図　銭貨……34
第25図　銭貨……35

表　目　次

表１　ピット計測表……11
表２　ピット計測表……12
表３　ピット計測表……13
表４　銭貨一覧表……36
表５　銭貨一覧表……37

図　版　目　次

図１　遺跡近景・他
図２　遺物
図３　青磁
図４　青磁・明青花等
図５　白磁
図６　朝鮮王朝陶磁
図７　朝鮮王朝陶磁
図８　朝鮮王朝陶磁
図９　朝鮮王朝陶磁
図10　朝鮮王朝陶磁
図11　朝鮮王朝無釉陶器
図12　国産の陶磁器
図13　金属・石製品
図14　朝鮮王朝陶磁・龍泉窯系青磁・他

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

・地理的環境

美津島町は対馬の中央部，浅茅湾の内海の東部から南西部にかけての一帯に位置し，東西20km，南北27.8kmに広がる。北は浅茅湾を挟んで一部が豊玉町となり，南は厳原町に接する本町の海岸線は総延長275kmで日本一長い。また海岸まで山裾が伸び断崖となっているところが多く，リアス式海岸の特徴が顕著に現れている。本町は新生代第３期の水成岩とこれに貫入した石英斑岩系の地質からなり，土地は痩せており，耕地面積は157ha しかなく全体のおよそ1.3％程である。

本遺跡は美津島町の西部（尾崎）に位置し，外浅茅を臨み西は朝鮮海峡に面する半島部にあり，対岸は豊玉町（水崎）になる。中世は外洋通行の根拠地として発展したが，現在では対馬最大の倭寇の根拠地として栄えた面影は見られない。水崎遺跡は現在，そのほとんどが畑であるが，１年を通して北西風が止むことはなく作物はあまり育たない。付近には同時代と思われる中世の遺跡が存在する。

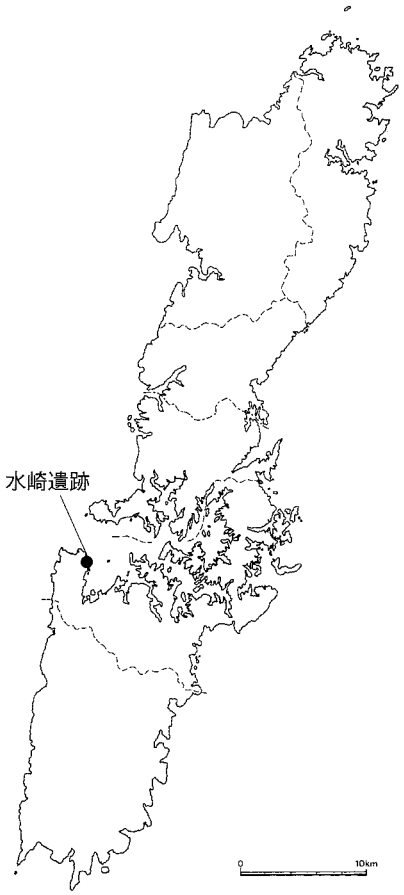
［引用・参考文献］
対馬支庁1999「つしま百科」　つしま百科編集委員会
美津島町役場1978「美津島町誌」　美津島町町誌編集委員会
福田一志・川口洋平・田中淳也　1999「水崎遺跡」美津島町文化財調査報告書第８集　美津島町教育委員会

・歴史的環境

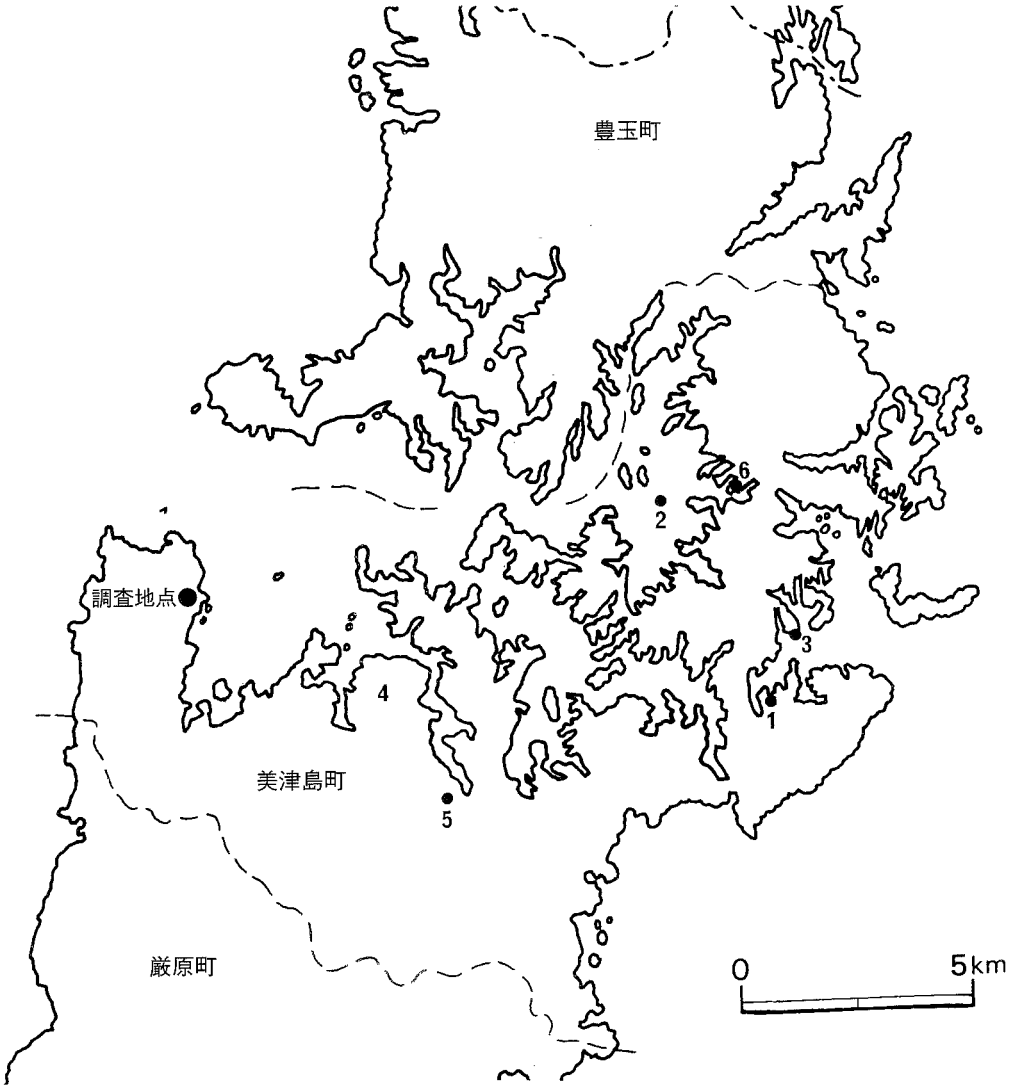
美津島町には周知の遺跡が113存在する。これは対馬全体の約１／３にあたる。多くは半島・岬の先端部に集中し，その所在は浅茅湾・三浦湾周辺に大半が集まる。遺跡の殆どが弥生時代，古墳時代の箱式石棺群である。

水崎遺跡は前回の調査で明らかとなったが，国産の陶器の割合が少なく１割にも満たなかった。今回の調査でも同様で貿易陶磁が大半を占める。これは尾崎一体を支配した早田氏の影響と考えられる。交易によって中国特に朝鮮半島と密接な関係を保ち，また，琉球を介して東南アジアの国々とも交流を深めたことは出土遺物からみても明らかである。

本遺跡周辺にも，幾つか中世の遺跡が点在する。大連河内遺跡，尾崎前原遺跡，亥ノ浜遺跡は，未調査ではあるが同様の倭寇の居住跡の可能性が高い。ここで幾つかの近年発掘調査された遺跡について紹介しておく。



第１図　水崎遺跡位置図



1	かがり松鼻遺跡	4	特別史跡　金田城跡
2	箕島遺跡	5	中道壇遺跡
3	池ノ浦墳墓	6	塚塔崎遺跡

第２図　美津島町内の主な遺跡

かがり松鼻遺跡

対馬を上島と下島に二分する万関橋の東，久須保浦に突き出た岬に位置する。昭和60年に県が実施した県下遺跡周知事業に伴う分布調査の折，既に破壊された箱式石棺と青銅器が確認された。強い北風と波浪の影響で破壊されと見られ，現状を維持するどころか消滅する恐れがあった。そのため県文化課と協議の結果，共同で発掘調査をするに至った。

破壊された一基の石棺の調査であったが，出土遺物として変形細形銅剣・把頭飾・ガラス玉の貴重な副葬品を発見した。平成２年11月16日にかがり松鼻遺跡出土品として県指定を受けた。

箕島遺跡

濃部浅茅湾の東南に位置し，枇把島・麦島等の複数の島に囲まれた小島。南には大山嶽を望み，麓

には大山の集落があり地理的環境を生かし養殖業が盛んな地区である。

平成３年度から４年度の２ヵ年に渡って調査を実施した結果，古墳時代～中世・近世に至る多数の墳墓群を確認した。付近の島々・半島部の岬部分には主に古墳時代の石棺墓群が存在する。

池ノ浦墳墓

美津島町の東部，三浦湾の西に位置する。この付近の地形も対馬特有のリアス式海岸が顕著に現れ多くの浦が存在する。平成７年３月美津島漁港修築のため岬を削平しようとしたところ礫が集中して確認された。分布調査の結果，古墳時代の遺跡であることが確認され，平成７年８月28日～９月22日の期間発掘調査を実施した。遺構は破壊され定かではなかったが，須恵器・陶質土器・青銅品等の遺物が出土している。

特別史跡金田城跡

昭和57年３月，国の特別史跡に指定された古代山城。対馬の中央部南西に景勝地浅茅湾があり，その南辺に突き出た半島は城山と呼ばれ，ここに金田城は位置する。平成５年度より整備のため発掘調査を開始して８年が経過した。調査期間中には多くの発見があった。その中でも，平成11年度の二ノ城戸調査において確認された城門跡は，築城当時の遺構として非常に遺りもよく検出された。今後も発掘調査・整備を継続していく。

その他には，昭和62年に道路拡幅工事のため，弥生時代から古墳時代にかけての石棺墓群が遺る中道壇遺跡を発掘調査し，数基の石棺墓と小形内行花文製鏡，石製紡錘車，陶質土器等が出土している。

塚塔崎遺跡は，美津島町小船越に位置する中世の墳墓群である。昭和52年７月に町史編纂事業の一環として発掘調査を実施しており，35基全ての墳墓（積石・石棺墓）が調査された。遺物としては副葬品としてオニアサリ・青磁椀等が確認された。

［引用・参考文献］

美津島町役場　1978「美津島町誌」　美津島町町誌編集委員会
福田一志・川口洋平・田中淳也編1999「水崎遺跡」美津島町文化財調査報告書第８集
美津島町教育委員会　1999
高野晋司編1988「かがり松鼻遺跡」美津島町文化財調査報告書第３集
本田秀樹編1973「箕島遺跡」美津島町文化財調査報告書６集
甲斐田彰・塩塚浩一編1996「池ノ浦墳墓」美津島町文化財調査報告書７集
古門雅高・本田秀樹・田中淳也2000「金田城跡」美津島町文化財調査報告書９集
藤田和裕編1988「中道壇遺跡」長崎県文化財調査報告書第90集
坂田邦洋編1978「塚塔崎遺跡」美津島町文化財調査報告書１集

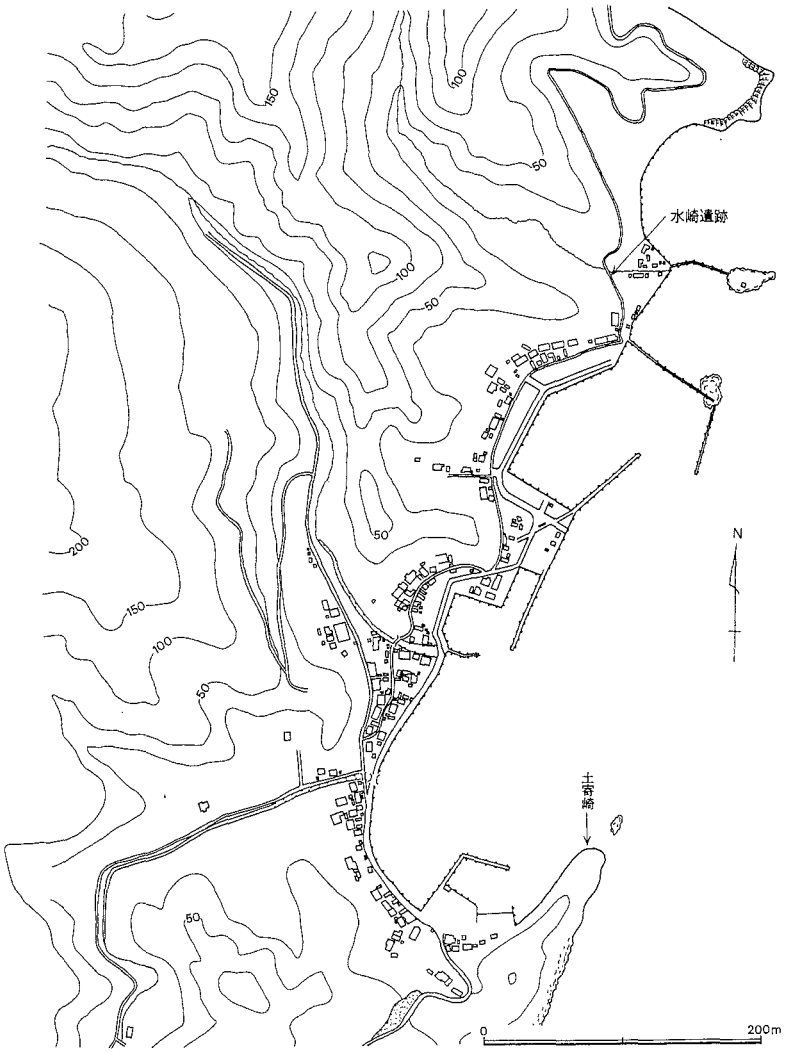
第Ⅱ章　調査に至る経緯

1．調査に至る経緯

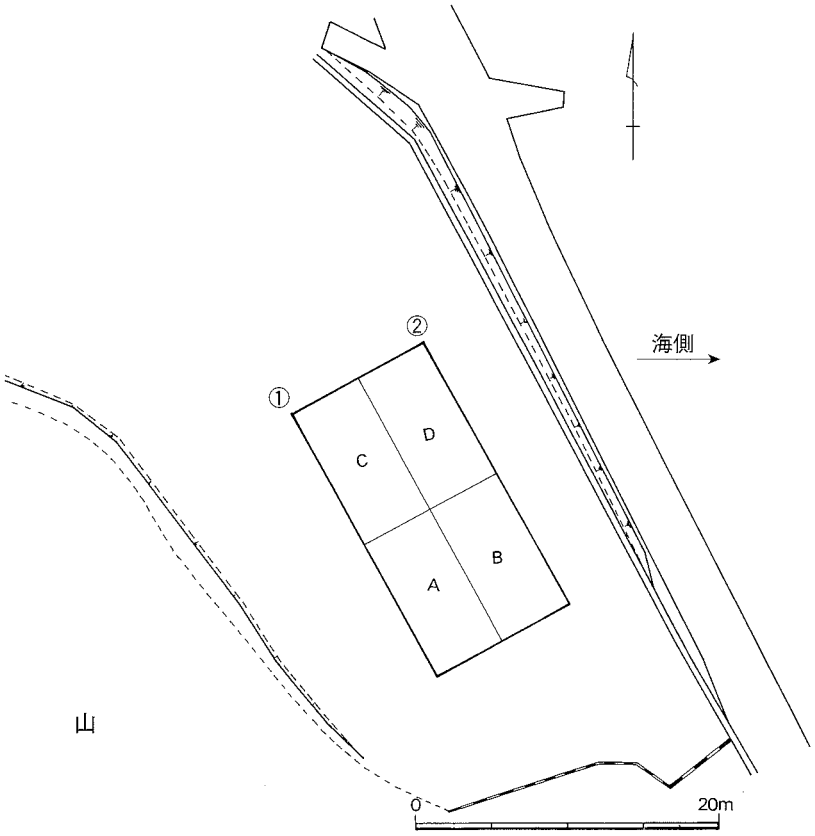
水崎遺跡は，浅茅湾の開口部に位置し古くは海上交通の要衝として栄えてきた。この地は『海東諸国記』(1471) によれば当時約700戸あったと記されており，中世の尾崎は対馬島の中でも人口過密地の一つであったとみられる。当地は古くから表面採取で白磁・青磁片，黒曜石剥片等を確認できることが知られていた。平成８年度から団体営農道整備工事が着工することとなり，美津島町教育委員会・長崎県教育委員会による範囲確認調査が実施された。その結果，本調査を実施する必要となり，平成９年度に前年度に引き続き共同で調査を実施した。狭い範囲にもかかわらず，貴重な遺物が出土し，報告書を刊行するに至っている。しかし，はっきりとした遺構は検出されず，狭小な範囲での調査であったため，今後更に広範囲に渡る調査が期待されていた。

今回の調査は，長崎県緊急雇用対策事業として美津島町文化財保護協会が，平成12年11月６日～平成12年12月21日までの期間，美津島町尾崎仮宿に200m²の調査区を設定し，発掘調査を実施したものである。

調査区の設定に際しては，前回調査した地区を含めた地域を考えたが，廃土等の置き場等を考慮し，道路に並行するように10m×20mの長方形のグリッドを設定した。座標は第４図調査区配置図の①X＝145611.452・Y＝24967.975，②X＝145616.223・Y＝－24959.236である。グリッドは遺物取り上げの際，さらに５×10mでA～D区に細分して各層位ごとに取り上げをおこなった。



第３図　周辺の地形



第４図　調査区配置図

２．土　　層

前回の調査では，大きく１～４層までに分類した。今回はある程度細分可能であったことから，前回との層位の比較をおこないながら説明をする。

Ⅰ層　　表土

Ⅱ層　　暗褐色土（弱粘質）
調査区全体に広がる。遺物は近世から中世までのものを含む。

Ⅱａ層　灰褐色硬質土（頁岩の小礫を主体とする）整地層と考えられ，Ａ・Ｂ地区を中心に確認される。遺物は近世から中世のものを含む。この上に小さな石を礎石とした配石群が確認される。

Ⅲ層　　硬質砂礫層　Ｃ・Ｄ地区から傾斜しＡ・Ｂ地区にまで一部延びる。中世から近世の建物遺構が検出される。本来Ⅳ～Ⅴ層より古い層で，北側からの流れ込みによって堆積したものである。傾斜しながら南側に堆積し，この層の上にⅣ・Ⅴ層が堆積する。また，Ⅲ層の下にⅥ・Ⅶ層が堆積する。

Ⅳ層　　赤黄褐色弱粘質土層　焼土・炭などが混入し，Ａ・Ｂ地区を中心に検出される。特にＡ地区では焼土としての堆積が顕著である。中世の堆積層と考えられ，Ⅴ層の直上に張り付く。Ｂ地区では黒色土が検出される。この面からピット検出。

Ⅴ層　　黄褐色粘土層　（整地層？）Ａ地区を中心に堆積するが，Ｂ地区でもまばらな堆積をみる。Ⅴ層の整地上での火災等によってⅣ層は堆積したものと判断される。この面からもピットを検出。Ｂ地区東側では黒色土層で多量の遺物や炭が検出される。その他動物の骨なども検出されることから，西側（Ａ区側）からの投げ込みではないかと判断される。

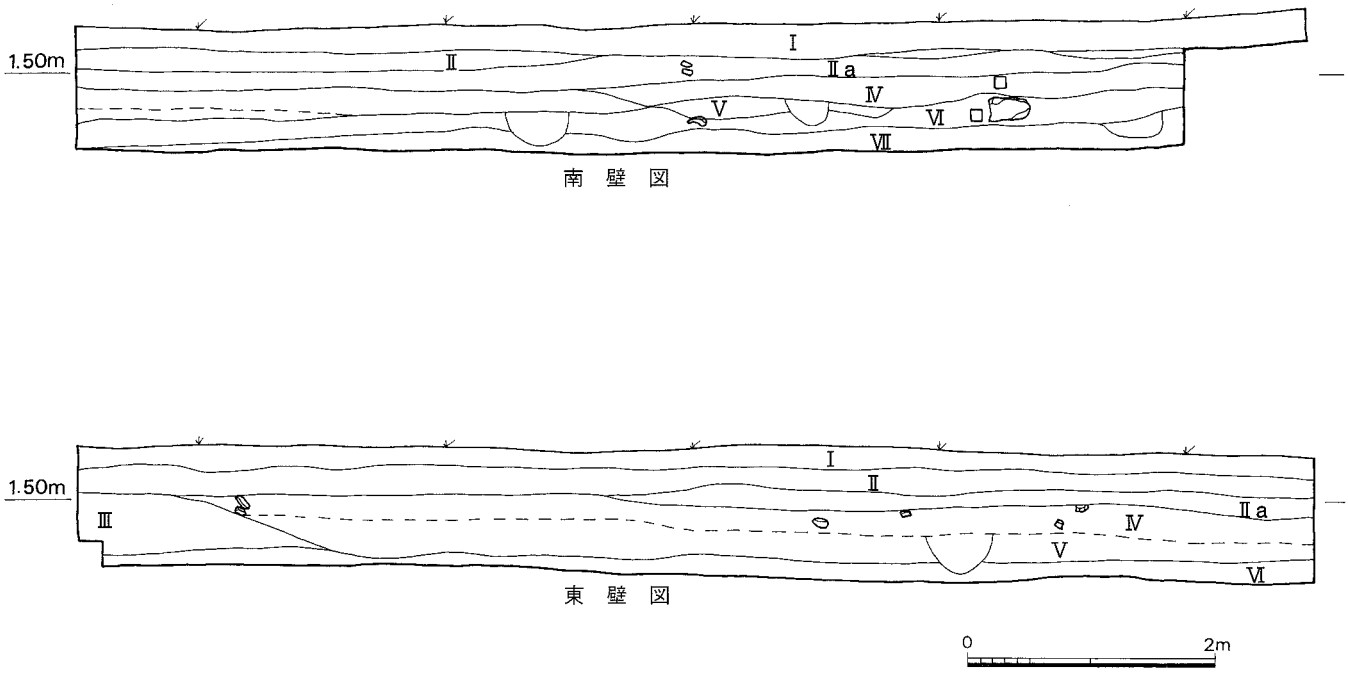
Ⅵ層　　灰青色砂礫層　遺物はⅣ・Ⅴ層に比べ少なくなる。ピットもこの面まで掘り下げられる。

Ⅶ層　　灰白色砂礫層　遺物の出土は見られなくなり，水分が多い。

前回調査時の３層からは多量の遺物が検出されたが，この層はＢ地区東側に堆積した黒色土で今回Ｂ地区Ⅳ層・Ⅴ層として扱った層である。炭化物・骨片と共に，多量の遺物が出土している。西側Ａ

地区からの流れ込みの可能性が高く，この黒色土が海側（東側）にむかって堆積しているものと考えられ，前回調査の３層として厚く堆積したものと判断する。

調査は北側のＣ・Ｄ区からおこない順次層位ごとに遺物を取り上げた。北側は表土・Ⅱ層・Ⅲ層と確認し，Ⅲ層上の頁岩の砂礫層にピット群を確認した。ピットはその遺物から考えれば15世紀から17世紀までのピット群が乱立していたと考えられる状況にあった。このⅢ層は南側のＡ・Ｂ区でやや傾斜しており，この傾斜面にⅥ層～Ⅱａ層が堆積した状況にあった。したがって，Ⅲ層はⅥ～Ⅱａ層よりも古い堆積層であり，Ⅲ層の傾斜面にⅥ層～Ⅱａ層が堆積したり，整地された形でのっている状況にある。Ⅱａ層は堅く締まった層で，Ｃ・Ｄ区では検出できず，配石を基礎とした大形建物遺構の整地層と考えられる層である。また，Ⅵ層からⅡａ層は本遺跡のＡ・Ｂ区の一部にしか確認できない層であることを明記しておく。Ⅳ層は焼土層であるが，Ａ区を中心として堆積した層である。このⅣ層は南側の土層図に一部のみ記載されているが，Ａ区中心部では明瞭に残存している。本来南側もこのⅣ層が堆積していたものが，後世の攪乱等の影響を受けた可能性がある。基本的にⅣ層以下が中世，特に15世紀代の包含層と考えられるが，一部新しい遺物を含むなど必ずしも良好な状態とはいえない。ただし，Ⅳ層とⅥ層出土の炭化物の放射線炭素年代は，13世紀～15世紀前半の年代が与えられており，基本的にはⅣ層～Ⅵ層は中世の包含層として差し支えないであろう。この結果をもとに，遺物については大きくⅣ～Ⅵ層とⅡａ層・Ⅱ層出土の遺物を分離して捉える必要があろう。(田中)



第５図　土層図

3．遺　　構

今回の調査区からは，多くのピット群が検出されたが，その他の遺構らしきものは検出することができなかった。また，検出面をいくつか捉えることはできたものの，ピットに含まれる遺物等からはピットの新旧関係を完全に把握するまでは至らなかった。ここではそのなかでも，Ⅱａ層確認ピットと４層以下確認ピットを分離し，遺構図として説明をくわえる。

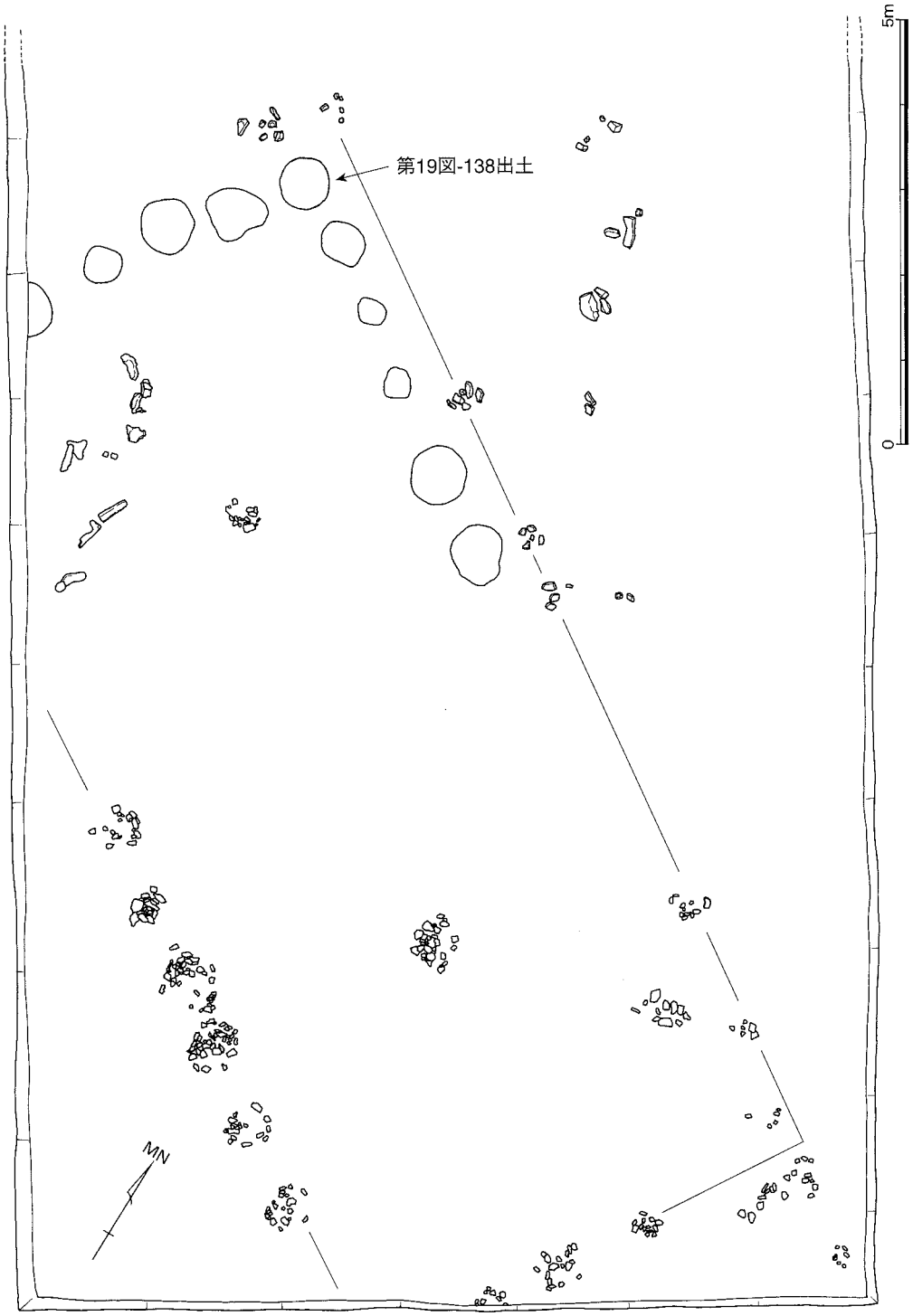
Ⅱａ層確認遺構

Ⅱａ層はＡ・Ｂ区において整地層として取り扱ったもので，Ⅱａ層上面に大型建物遺構の柱の基礎となる集石を検出した。集石は，４～５㎝大の小石を直径30～40㎝の範囲で固めて配置しており，主軸は北北東を取る。大型建物は長軸約10m程確認でき，短軸は５ｍほどの長方形をなす。それぞれの配石の間隔は約１ｍで，南から５ｍ，東西に３ｍのところに棟持ち柱様の集石が確認される。大型の建物にしては間に入る棟持ち柱が少ないことが大きな疑問点としてのこるが，Ⅱａ層から出土した多くの土錘などから考慮すれば，漁業に関する作業小屋的なものが考えられる。集石の周辺からは16世紀後半～17世紀前半の陶磁器が出土するなどこの時期の建物跡の可能性を考えている。

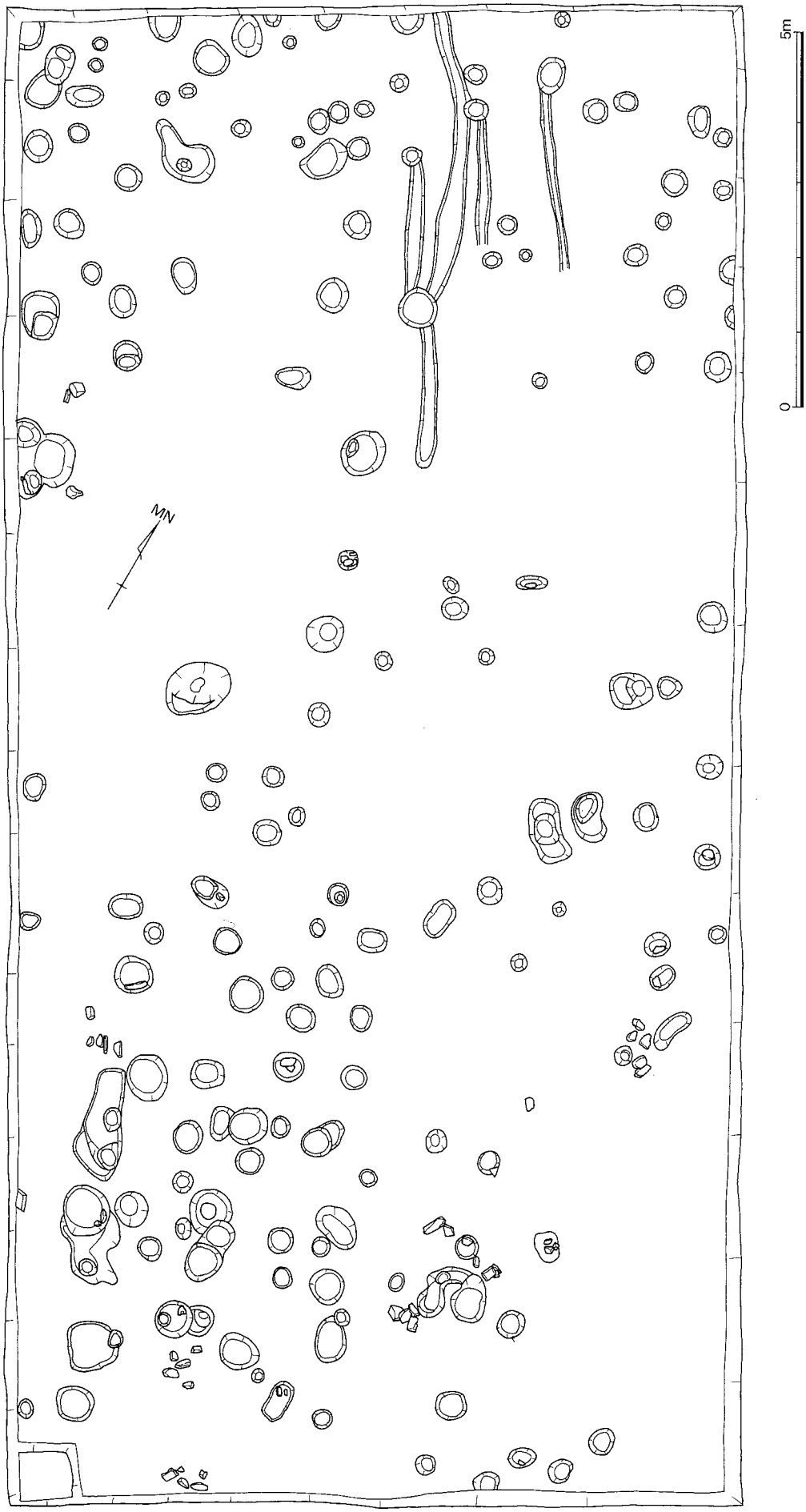
Ⅱａ層を切るかたちで検出されたのが，ＳＤ－１である。Ⅱａ層上にのる大形建物跡を切って粘土を充填したピット群が検出された。ピットは大きいもので直径50㎝を測り，長軸をほぼ北北東にとる。これは先の大型建物跡と同じ方向である。粘土を充填したピットは半裁したものの，柱痕などは確認できなかったことから，ピットに粘土を充填させた上に柱を乗せたものと考えられる。粘土はかなり堅く締まっていることから，粘土を基礎としたものであろう。このピットの中から18世紀後半の伊万里焼の小碗が出土したことから，この時代の構築物と判断した。ただし，粘土のピットは直角に検出されただけで，方形にはならない。またピット間の間隔が狭いなど，どのような上物があったのか定かでない。特筆されることは，ピット群の中央部にクジラ，あるいはイルカと思われる大型動物の骨が散乱していること，骨が焼けていること，骨に加工痕あるいは解体痕が認められるなど，大形海棲動物の解体に関わった遺構であろうとの予測は立てられるものと思われる。対馬の浅茅湾でも江戸時代に鯨組があり，この地区では尾崎地区にあったとされることから，この地区もその鯨組の関連施設が残っていたものと考える。

Ⅲ層以下確認のピット群

土層の項でも説明したとおり，Ｃ・Ｄ区ではⅢ層とした層にピット群が検出され，このⅢ層がＡ・Ｂ区まで緩く傾斜している状況を呈している。Ⅲ層確認ピットからは，粉青沙器・龍泉窯系青磁・朝鮮王朝白磁・陶器を出土し，時期的にはほとんどが混在するような遺物構成であった。Ａ・Ｂ地区では，Ⅱａ層とした硬質の層を除去すると焼土層（Ⅳ・Ⅴ層）が検出され，そこにピット群を検出したが，この焼土層はＡ地区を中心に確認され，堆積が散漫であるなどⅤ層（粘土層）との区別がつきにくい状況にあった。しかも，Ｂ地区Ⅶ層とした層にもピットが検出されたが，ピット内の遺物を検討した結果，16世紀後半以降のものが混在するなど，状況的に混乱を招いた。従って，検出面によって年代を確実におさえるところまでは至らなかったというのが実状である。また，遺構もピット以外に

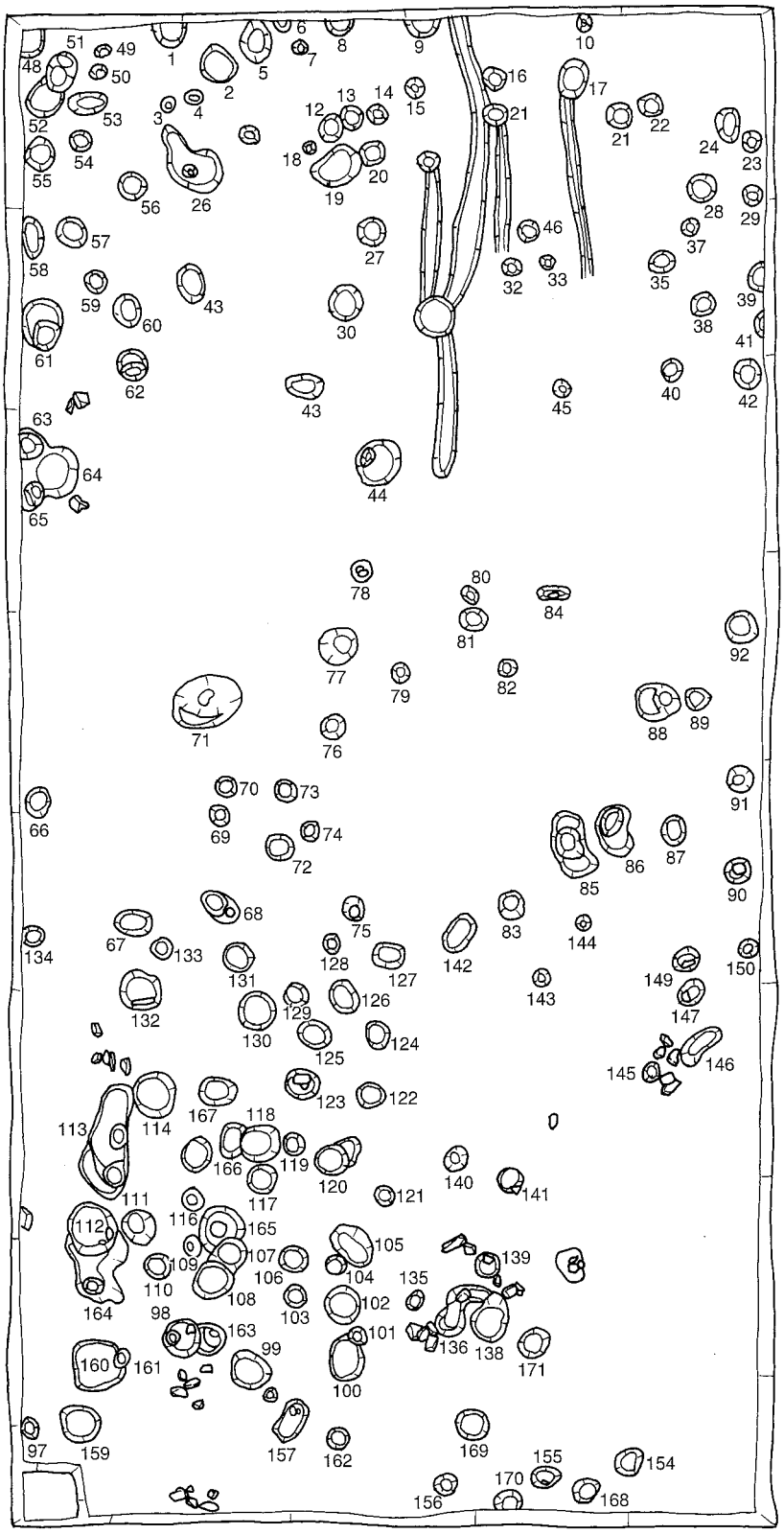


第６図　配石遺構



第7図　ピット群

は検出できず，目的とした遺構の確認には程遠いものがあった。対馬ならではの狭小な地に，何回もの時期を隔てて整地や建物の建て直しをおこなった結果と思われる。ただし，各層位面には基本的なピット群の構成が成されていることが考えられ，今後の検証の方法を考えなければならない。



第8図　ピット番号

Ⅲ層以下から検出したピット群は170を数え調査区全体から検出されている。また，D区からは細い溝も検出しており，この軸がある時期の建物の主軸と関連することが予想される。A・B地区では特にA地区にピットが目立ち，焼土層あるいは整地層としたⅣ・Ⅴ層を切ってピットが確認されている。あくまでもⅡa層の下位にあることから，16世紀の後半～17世紀代を予想したⅡa層以前という段階を予想しなければならない。Ⅳ層の焼土層から出土した遺物の多くが15世紀前後の陶磁器を主体とすることから，Ⅳ層を切るピット群はほぼこの時期に近似したピット群の可能性が強い。ただし，このピット群の中にも後世の遺物が混在するなど，ピットについては慎重な扱いが必要である。ピット出土の遺物については，表を参考にして頂きたい。

表1　水崎（仮宿）遺跡検出ピット

ピット番号	台帳	上場	下場	深さ	出　土　遺　物
1		220	206	14	備前1
2		222	205	17	
3		222	213	9	
4		221	210	11	
5		219	200	19	
6		218	195	23	
7		214	207	7	
8		218	208	10	陶器甕片1　王朝白磁1
9		218	201	17	
10		217	196	21	
11		222	195	27	
12		220	201	19	陶器甕片2
13		220	202	18	
14		214	197	17	
15		220	201	19	
16		218	197	21	
17		216	198	18	青磁1
18		217	204	13	
19		220	205	15	粉青3　陶器甕片3
20		220	199	21	
21		220	191	29	
21		218	187	31	陶器甕片1
22		217	191	26	粉青1　無釉1
23		221	194	27	粉青2
24		213	198	15	
25		222	206	16	
26		223	204	19	青磁1　ハケ粉1　陶器甕片1　粉青1
27		218	203	15	鉄2
28		219	198	21	
29		219	197	22	
30		217	202	15	粉青3　雑釉1
31		218	191	27	青磁1　明染1　粉青1　陶器甕片4　土錘1
32		217	194	23	
33		210	200	10	
34		欠番			
35		219	185	34	
36		欠番			
38		218	191	27	
39		218	188	30	
40		218	191	27	
41		218	198	20	
42		218	188	30	
43		219	196	23	
44		219	202	17	青磁1　粉青1　無釉1　土錘1
45		219	200	19	
46		217	201	16	
47		欠番			無釉1　粉青1　王朝陶器3（第15図－80・81）　瓦質1
48		217	201	26	無釉1　雑釉1
49		220			
50		220			
51		219	192	27	雑釉1　陶器甕片3
52		218	205	13	白磁（朝鮮）1　陶器甕片1　土錘2
53		221	205	16	
54		219	204	15	
55		218	201	17	粉青1　陶器甕片1　鉄1　土錘1
56		220	189	29	粉青1　陶器甕片1
57		216	199	17	無釉1　ハケ粉青
58		217	198	19	
59		214	195	19	
60		214	199	15	
61		215	187	28	無釉1　青磁1

表２　水崎（仮宿）遺跡検出ピット

ピット番号	台帳	上場	下場	深さ	出　土　遺　物
62		215	197	18	
63		214	198	16	
64		214	202	12	
65		211	191	20	
66		195	174	21	陶器甕片１　鉄１
67		191	149	42	青磁１　雑釉１
68		191	153	38	無釉１　粉青１　雑釉１　陶器甕片２　王朝陶器２　堅手３　銭１
69		191	183	8	青磁１
70		190	172	18	粉青１ 陶器甕片２(第17図－111) 王朝陶器１ 王朝白磁１(第15図－90) 備前１(第19図－129)
71		191	160	31	鉄１
72		190	170	20	
73		190	169	21	青磁１
74		190	174	16	
75		188	159	29	
76		190	165	25	陶器甕片１
77		189	158	31	無釉２
78		189	179	10	
79		189	164	25	白磁１　粉青１　陶器甕片２
80		187	176	11	
81		186	157	29	
82		185	171	14	
83		180	160	20	
84		184	178	6	
85		178			青磁１　ベト？２　雑釉１
86		181	163	18	粉青１
87		166	153	13	
88		166	124	42	粉青２
89		165	147	18	
90		167	142	25	
91		166	145	21	
92		166	151	15	
93		175	153	22	
94		186	177	9	
95		188	172	16	青磁１
96		187	170	17	粉青１　雑釉１
97	1	175	158	17	瓦質１
98	2	175	163	12	無釉２　粉青１（第13図－56）　ベト？１　雑釉１
99	3	172	156	16	青磁１　雑釉１　鉄２
100	4	171	167	4	
101	5	173	159	14	青磁１
102	6	173	162	11	青磁１　陶器甕片２
103	7	174	155	19	鉄２（釘１）
104	8	176	157	19	白磁１（第11図－30）　粉青１　土錘１
105	9	177	158	19	雑釉２　王朝白磁１　王朝陶器１
106	10	175	160	15	無釉１　土錘１
107	11	175	168	7	無釉２　陶器甕片２　青磁１　鉄１　土錘１
108	12	175	152	23	
109	13	176	159	17	
110	14	177	163	6	青磁１　無釉１
111	15	180	158	22	青磁？１　無釉１　粉青１　王朝陶器１
112	16	182	151	31	無釉７　粉青３　王朝陶器３　鉄２
113	17	182	149	33	無釉３　陶器甕片１
114	18	185	164	21	青磁１(第9図－16) 無釉10 粉青２ 雑釉４ 堅手？２ 瓦質１ 鉄１ 土錘２
115	19	179	164	15	王朝白磁１　鉄１
116	20	177	166	11	
117	21	178	165	13	
118	22	179	163	16	無釉１　粉青１
119	23	178	162	16	青磁１　雑釉１　陶器甕片１
120	24	177	162	15	ベト１　粉青１　陶器甕片１
121	25	177	162	15	陶器甕片１
122	26	177	160	17	無釉１　粉青１
123	27	181	166	15	

表3　水崎（仮宿）遺跡検出ピット

ピット番号	台帳	上場	下場	深さ	出土遺物
124	28	179	165	14	無釉1　粉青1　土錘1
125	29	182	166	16	
126	30	182	167	15	
127	31	181	158	26	
128	32	182	159	23	粉青1　陶器甕片2
129	33	183	168	15	
130	34	183	161	22	青磁1　粉青1　陶器甕片2　銅1　黒曜石1
131	35	183	172	11	粉青1
132	36	186	161	25	無釉1　粉青1　陶器甕片2　鉄2
133	37	186	173	13	
134	38	189	177	12	
135	39	173	146	27	
136	40	164	146	18	青磁10　無釉9　ベト1　粉青10　雑釉5　陶器甕片5 王朝陶器1　瓦質1　土師1　鉄1　土錘1
137	41	164	130	34	銭1（紹聖元寳）第25図－53
138	42	164	143	21	無釉1　粉青1（報告）
139	43	166	147	19	無釉1　粉青1　雑釉1　陶器甕片1　王朝白磁1
140	44	170	141	29	
141	45	169	139	30	
142	46	180	170	10	
143	47	175	153	22	土錘1
144	48	174	153	21	
145	49	170	143	27	粉青1　王朝陶器1
146	50	168	149	19	王朝陶器1　陶器甕片1　土錘1
147	51	172	150	22	無釉2　粉青1　鉄1
148	52	172	147	25	
149	53	171	160	11	
150	54	160	139	21	
151	55	163	142	21	青磁1（瓶）　粉青1　雑釉2　王朝白磁2
152	56	165	143	22	
153	57	160	145	15	青磁1　無釉1　土錘1
154	1	148	127	21	青磁1
155	2	149	126	23	青磁1（第9図－14）　白磁1（碁笥底）　瓦質1
156	3	151	124	27	青磁1（第9図－9）　無釉1　雑釉1　環状銅製品（第20図－13）
157	4	155	128	27	青磁1　鉄1
158	5	155	136	19	
159	6	161	153	8	無釉1　粉青1　雑釉2
160	7	164	157	7	
161	8	161	147	14	
162	9	149	142	7	
163	10	159	128	31	
164	11	160	130	30	青磁3　ベト1　無釉5　粉青2　陶器甕片1　土錘1
165	12	163	130	33	青磁2　無釉2　雑釉1　陶器甕片2　瓦質1
166	13	164	151	13	青磁2　陶器甕片1　王朝白磁1　王朝陶器1　東南アジア陶器1 鉄1
167	14	171	160	11	
168	15	138	120	18	無釉2　粉青1　雑釉1　王朝白磁1　王朝白磁1（第15図－93）
169	16	140	127	13	
170	17	142	126	16	雑釉1　陶器甕片1　瓦質1
171	18	144	130	14	雑釉甕1（第17図－113）

無釉……無釉陶器。朝鮮王朝陶磁の中でも古い段階のものと思われる一群。
雑釉……色調が不鮮明であるが，釉薬が掛かるもの。
陶器甕片……船徳利などの器壁が薄い一群。16世紀以降のものと思われる。
王朝白磁……朝鮮王朝時代の磁器質の碗。16世紀以降のものと思われる。
王朝陶器……朝鮮王朝時代の胎土がザックリした碗類。16世紀代以降のものと考えられるもの。
ハケ粉……ハケで白化粧したもので16世紀後半～17初頭と考えられるもの。
粉青……粉青沙器。（象嵌青磁）
青磁……龍泉窯系青磁。
ベト……ベトナム産磁器。
東南アジア陶器……16世紀代の厚みのある陶器甕

第Ⅲ章　遺　　物

出土遺物は，陶磁器については前回の遺物内容とほぼ同じで朝鮮王朝陶磁を主体とし，龍泉窯系青磁・白磁，ベトナム・タイの磁器，その他国産では東播系・備前の擂鉢・在地系の擂鉢等が出土している。今回は国産のものが前回よりも出土しており，特に前回出土がなかった土師皿の出土は１点ではあったが出土した意義は大きい。また，金属製品・銭貨の出土については前回の調査ではほとんど見られなかったもので，今回の調査における一つの大きな成果であった。

１．中国産陶磁器

中国産陶磁器では，前回と同様龍泉窯系青磁Ⅳ類を主体とし，白磁では森田編年の白磁Ｄ群，新しいところでは小野編年の染付皿Ｂ２群・Ｃ群が主体となる。このことから，中国産の陶磁器からは，本遺跡の画期は14世紀後半～15世紀を主体としながらも16世紀の後半～17世紀の前半にも画期があるとみてよいであろう。

龍泉窯系青磁（第９～11図）

青磁については森田分類（森田1978），青磁碗Ⅲ類（１点），同安窯系青磁Ⅰ類（１点）などが出土していることから，この時期にもこの地域に何らかの生活が営まれていたことを窺わせる。ただし点数的にも少数であることなどから，ここでは割愛する。遺跡出土の主体は山本編年青磁碗Ⅳ類（山本1995），上田碗Ｄ・Ｅ類（上田1982）などに相当する青磁碗である。上田編年では14世紀後半～15世紀前半に充てている。

1は濁った緑青色の釉薬を全体に厚く掛け，見込中央部と高台内を露胎とする。畳付けは釉をふき取る。貫入が全体に入り，胎土は灰濁色でザックリした感がある。

2は小坏で，胎土は生焼け状態で黄褐色の胎土に微細な黒い鉱物が入る。

3はオリーブ色の釉を全体に分厚く掛けた小坏で，口径に対し器高が低いことと口唇部を丸く納めるのが特徴である。高台中心のみが露胎となる。

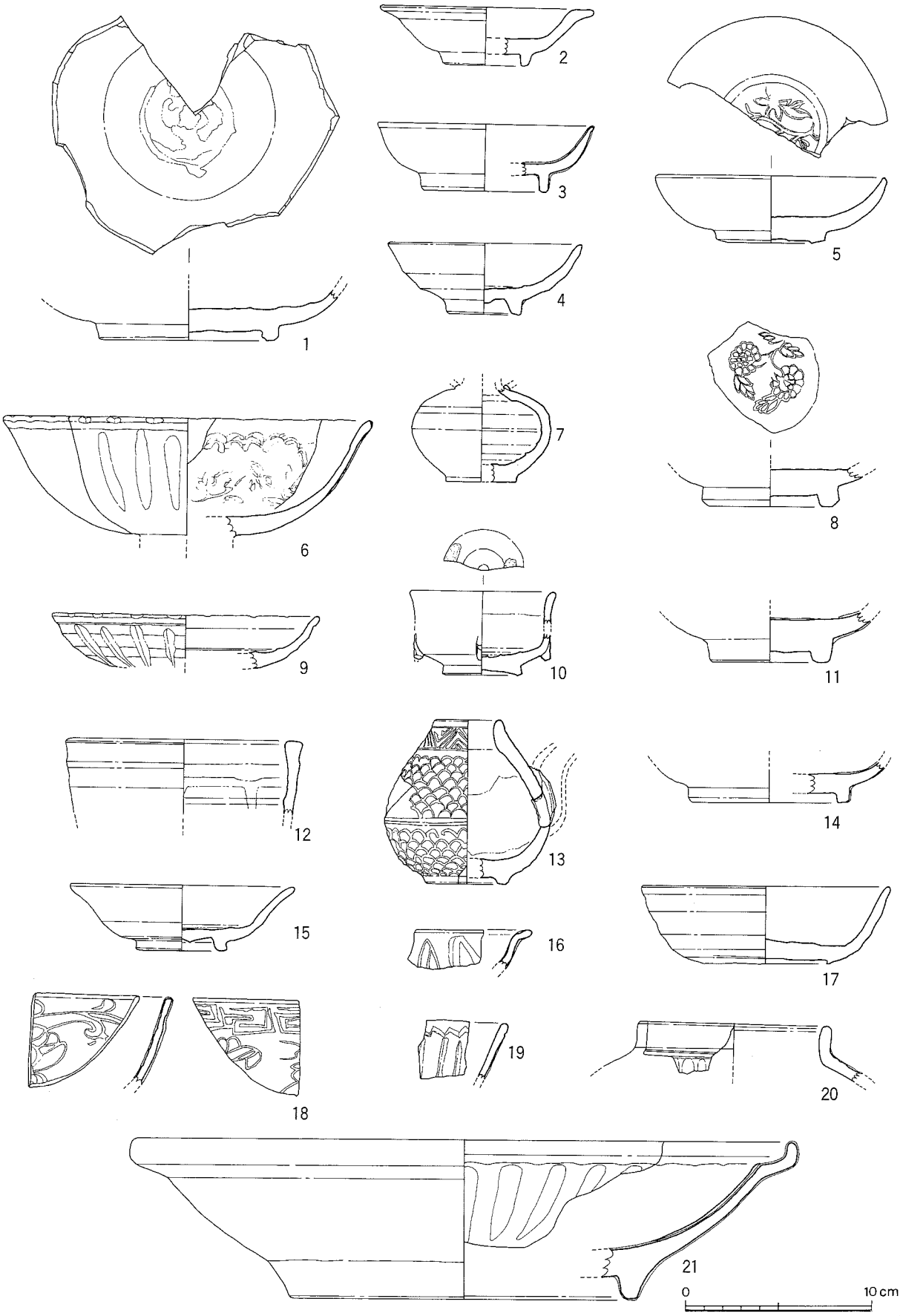
4は明緑灰色の釉を高台際まで施釉し，見込中央部を布状のもので拭き取って露胎とした小碗である。高台は外側に踏ん張り高台中央部が兜巾状になる。

5は高台が低く体部を丸く作る坏で，見込に草花紋をスタンプする。高台は露胎。

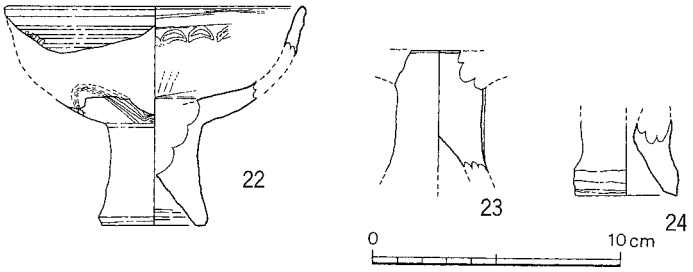
6は推定金光寺跡出土の内面に浮文からなる印花文を有する青磁とされるもので，森田により大宰府史跡ＳＸ1200出土品との比較により14世紀の中頃前後に比定されたものと同一のものであろう（森田1981）。口唇部を小さな輪花状に切り込み，外面は雑に縦に削り蓮弁を想起させる。内面は浮文で草花紋を全体に施す。口縁部付近は釉だれが観察される。

7は青磁瓶で肩に把手が付く，**55**は青磁香炉で腰部に飾り脚をもち，同一個体と思われる破片から口縁部がやや外反。釉はオリーブ色を呈し口縁部の内側まで施釉。胎土は灰青色で堅緻である。

13は瓜型の水注で，全体に波紋を浮文であらわす。釉薬が，砧青磁に類似し，上田碗Ｄ・Ｅ類に類似することから，この時期のものと予想される。



第９図　龍泉窯系青磁（1/3）



第10図　龍泉窯系青磁（1/3）

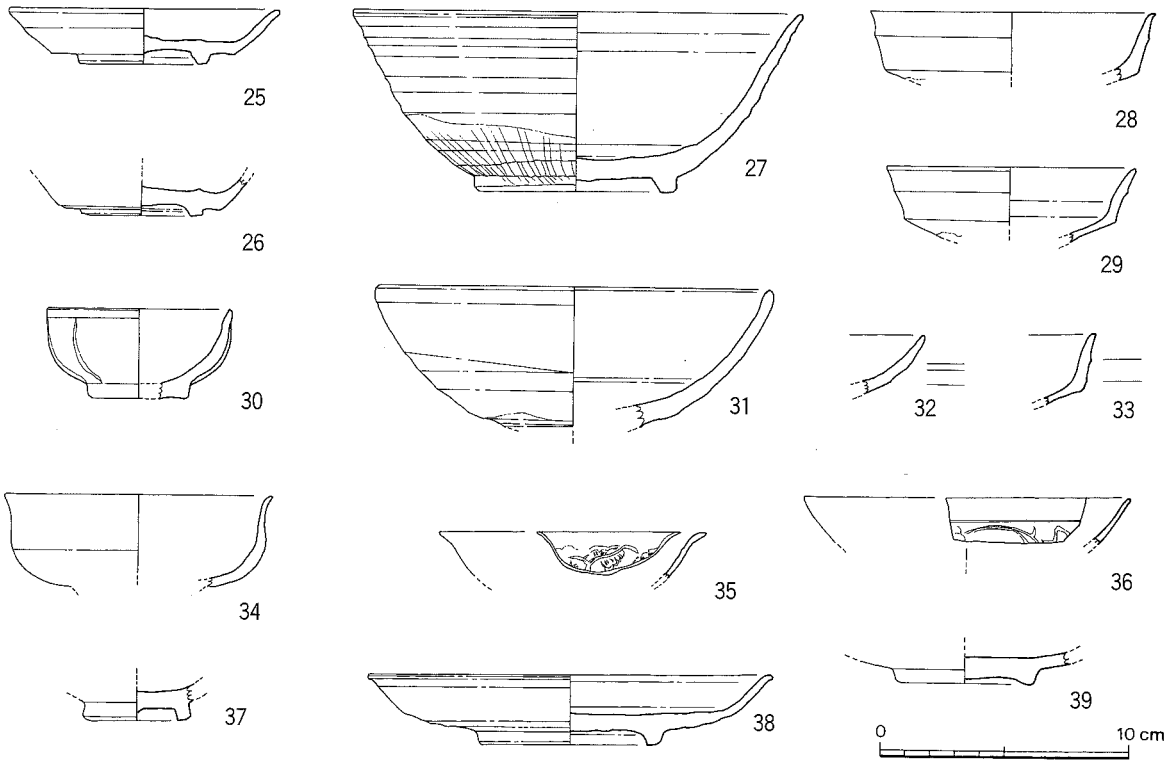
18は口縁部に雷文帯をもつもので，本遺跡では１点のみの出土である。雷文帯青磁碗については15世紀の前半としての捉え方が通常である。

21は盤で内側に型押しで蓮弁状の溝を作る。釉薬は全体に厚めに施釉し，大きな貫入がはいる。高台内は釉を掻き取って露胎とする。

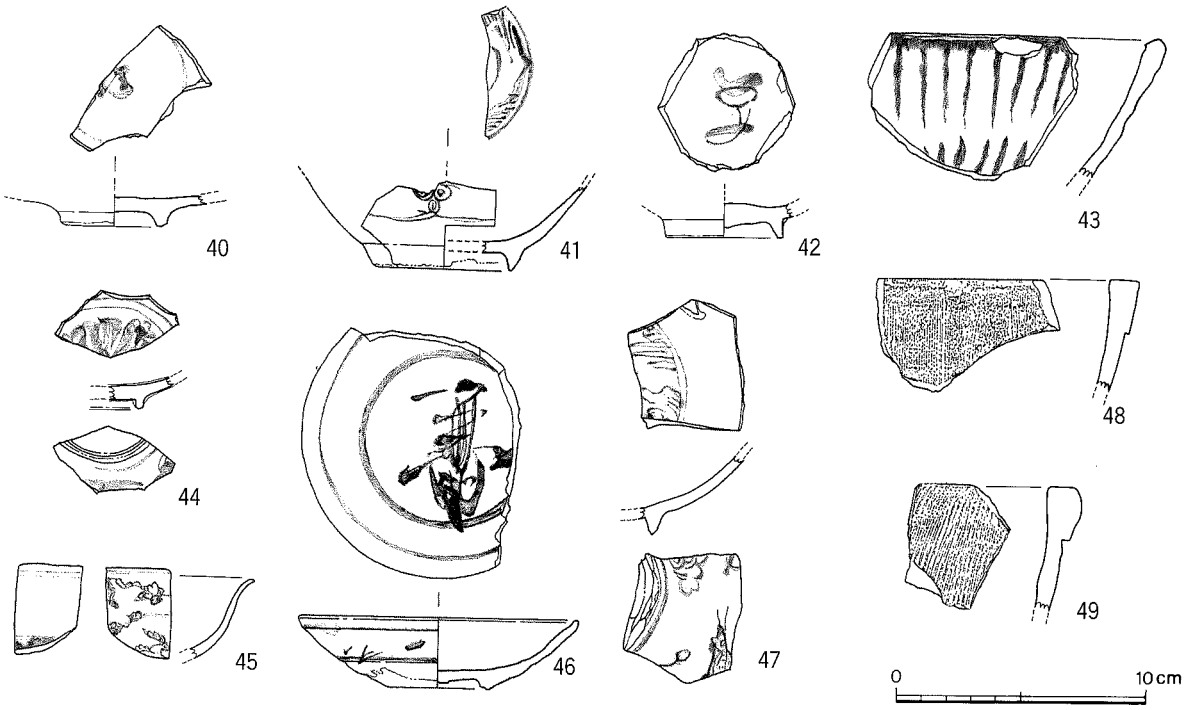
20は壺で，口縁部を直口させ，胴部に高台に直交する細い沈線を入れる。東南アジア産の可能性もある。

17は碁笥底の坏で暗緑灰色の釉を高台内を除き施釉する。見込の中心部が厚くなるよう削りだす。この手の青磁については例を知らない。

22～24は馬上坏である。22は高台に厚みがあり，釉薬も厚く施釉する。台の中は円錐状に削り，畳付けと内部は露胎である。上部の体部に沈線によって交差状の文様を描く。口縁部は推定ではあるが，沈線で文様をつけ，内部は波形の円弧を浮文で表す。23・24についても上部の器形は同じと見られが，胎土が粗く釉も雑である。首里城跡「京の内」跡から馬上坏が出土しているが（渡名編1998）台の形や，高さに幾分相違を見せる。



第11図　白　　磁（1/3）



第12図　明青花・天目摺鉢（1/3）

白　　磁（第11図25～39）

白磁碗・皿を主体とする。森田編年の白磁D群で占められるが，白磁皿Ⅸ類が１点，森田編年の白磁皿A類なども出土しており，青磁の出土状況と同じ様に古い一群も少数含む。

25・26は森本が博多において五期とした15世紀前半代のものか(森本1990)。口径に対し，器高が低く，高台際から高台内と見込を露胎とする。高台際から急激に屈曲し，やや内弯しながら口縁部へ続く。見込部中央は螺旋状に整形することにより，中心部が兜巾状になる。高台中心も同様である。釉薬の色調や釉薬の発色は**38**と全く同じであることから大小の皿のセット関係にあるものと思われる。**27**・**31**は，深い碗で**27**は見込が蛇ノ目剥ぎ，体部途中まで釉を掛ける。高台際のカンナ目が特徴的である。

30は体部に細長い垂下する突起を型造りした小碗。白黄色の釉を高台際まで施釉する。高台はやや上げ底気味で，砂目が付く。博多遺跡群第42次の424号遺構より染付碗・皿C群・李朝陶器などと一緒に出土しており（大庭1991)，16世紀代のものと考えられる。

28・**29**・**32**・**33**は森田編年の白磁D群，**36**については一時期古い白磁B群の型押しによる陽刻のものと思われる。**37**は白磁D群の高台である。白磁D群の高台は，８点出土しており前回の調査でも白磁の主体となったものである。**34**は口縁がやや外反し体部が丸いことから後出のものか。また，80は90と同様内面型押しのものであるが，端反りでかなり薄身のものである。先の**36**と年代的に同じか後出のものかについては定かでない。以上，森田の白磁D群と，青磁碗の主体となる山本の青磁碗Ⅳ類からこの遺跡が15世紀前後に主体があったことの根拠としている。

明 青 花（第12図－40～42，44～47）

小野編年染付碗B群，染付皿C群を主体とする。

40は染付碗Ｂ群の範疇に入るものと思われる。高台際から高台内にかけて露胎である。Ｂ群の中でも15世紀に遡るものであろう。41・47は高台が内傾するタイプで畳付が露胎，高台内は施釉。42・44・45・46は16世紀代まで下る一群である。特に42・46は16世紀後半から17世紀初頭まで章州窯の一群で，朝鮮王朝陶器でも後続する一群とに対応するものである。この他に破片が出土しているが全体から見れば少数である。

天 目 類（第12図－43）

天目類は数的には少ない。茶窯などのものが含まれるが図化したのは第12図－43のみである。

この天目は碗形態をしており，内面に茶色の釉薬を縦に垂下させ，途中で途切れさせてさらに内定に垂下させている。表面は口唇部にのみ茶色の釉が施釉され，胴部は光沢のある黒色の釉で覆われる。

陶　　器（第12図－48・49）

擂鉢が数点出土している。48・49は口縁部を折り返すタイプのもので，内面の擂り目がはっきりとした一群である。

森田　　勉　1978「太宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集４』

森田　　勉　1981「鎌倉出土の中国陶磁器に関して」『貿易陶磁研究ＮＯ１』日本貿易陶磁研究会

上田　秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究ＮＯ２』日本貿易陶磁研究会

森本　朝子　1990「〈各論〉輸入陶磁－第三期の推移を中心に－」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』－付編　80年代の研究成果と今後の展望－

山本　信夫　1995「中世前期の貿易陶磁」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

大庭康時編　1991『博多17』－博多遺跡群第42次発掘調査概報－　福岡市埋蔵文化財調査報告書第245集　福岡市教育委員会

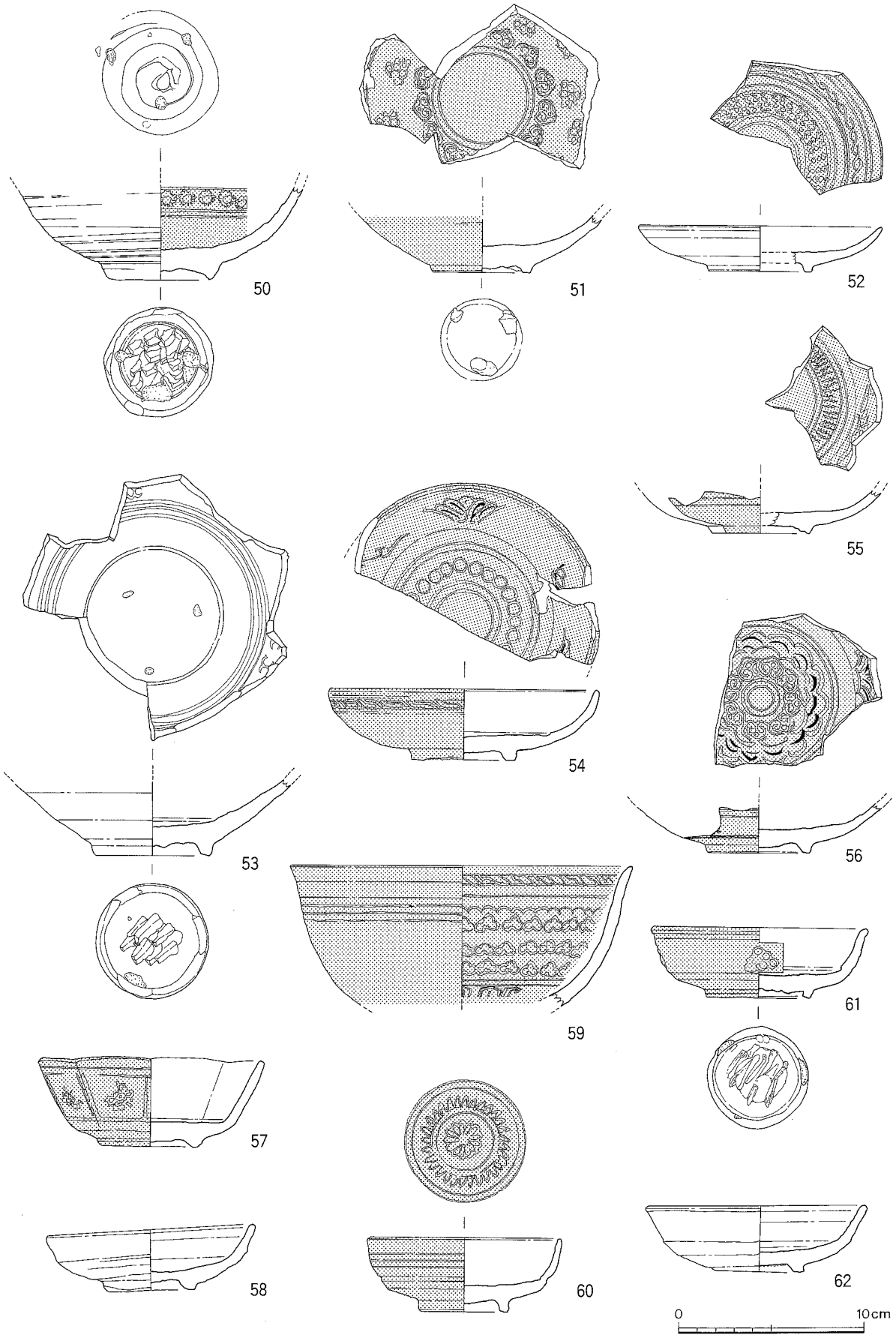
２．朝鮮王朝陶磁

いわゆる粉青沙器・白磁・陶器と，甕類を主体とした無釉・雑釉陶器がある。器種としては碗・皿・盤・鉢・瓶・甕等が出土し多彩である。

粉青沙器（第13図－50～62，第14図－63～79）

本遺跡の龍泉窯系青磁・白磁からみると15世紀前後の遺物が主体となるが，この時期，朝鮮半島では1392年に高麗が滅び朝鮮王朝が成立する大きな転換期を迎える。陶磁器においても伝統的な高麗青磁から朝鮮王朝独自の陶磁器へと変換していく過渡期にあたる。一般的には粉青沙器と呼ばれる朝鮮王朝の陶磁器は，特に15世紀前後のものについて森本・片山が「過渡期の型式を青磁と粉青という概念に明文してしまうことには問題が多い」とするように（森本・片山2000），多くの問題をはらんでいる。粉青沙器という言葉の概念そのものが不透明な部分があり，用語そのものを再検討する時期にきている。ただし，ここで名称にまで言及することはできないことから，粉青沙器の用語をそのまま使用する。

50・51・53・59は碗である。50・53は象嵌が退化傾向にあり，見込の一部にのみ圏線などの象嵌を施し，外面は無文。50は体部を丸くし，横方向のロクロ整形痕が顕著に残り見込にも渦巻き状の調整痕が顕著である。見込と高台内に３個の胎土目が観察され，見込内の棒状のものでの押さえ痕が特徴



第13図　朝鮮王朝陶磁①（1/3）

的である。**53**は見込に鏡面をもち，体部は直線上に延びる。**50**と同様高台内に押さえ痕が見られる。**50**はⅥ層から出土となっているが，内面の渦巻き状の文様と体部の調整痕，小さな胎土目は後出する碗類の特徴に近似することから，混入と見られる。

51は見込に二重圏線を中心に如意頭紋・五曜紋・圏線の順に口縁部へと続く。胎土は灰茶褐色を呈し釉は暗緑色で光沢がある。高台内に胎土目跡が３個付く。

59は光沢のある緑青色の釉を施釉し，見込に剣先紋・圏線・如意頭紋・雷文？を，体部に三重の圏線を象嵌する。釉の発色は良好で胎土も堅緻であり，先の**50**・**53**・**51**より精緻である。

52・**54**・**55**・**56**は**皿類**である。全て見込みに圏線を中心に象嵌により文様を配置し，外面にも圏線あるいは雷文？を入れる。**54**と**56**は黒象嵌を一部入れるが釉薬の発色等は**52**・**55**が良好である。目跡が残るのは**55**のみである。**54**は畳付に砂が付着。第14図－**64**・**66**・**67**も皿類である。

57・**58**・**60**・**62**・**63**は鉢類である。**57**は八角鉢で体部中央に花紋を象嵌する。高台内に砂を付着。この資料の他に無文の八角鉢も出土している。

58・**62**はⅣ層焼土内の出土で，全体被熱しており釉薬も溶け出してる。高台の作りが雑で高台内に黒・白色の砂粒が付着する。２点共に外面の中央部で屈曲させることを特徴とする。

65は大形の**盤**で見込中央部に菊？を配置し，二重圏線･如意頭紋と上部の二重圏線の間に魚波紋を象嵌する。波と魚の鰭などに黒象嵌を使用。外側には大きな剣先紋に黒白象嵌を使用する。釉は暗緑色を呈し全体に施釉し，胎土は堅緻。高台畳付けに砂が付着。釉薬の発色が緑に近く比較的高麗期の様相を留めている。森本･片山編年では，第Ⅳ期，Ⅴ－①類に相当し，14世紀中葉から後葉に位置づけられるものであろう。

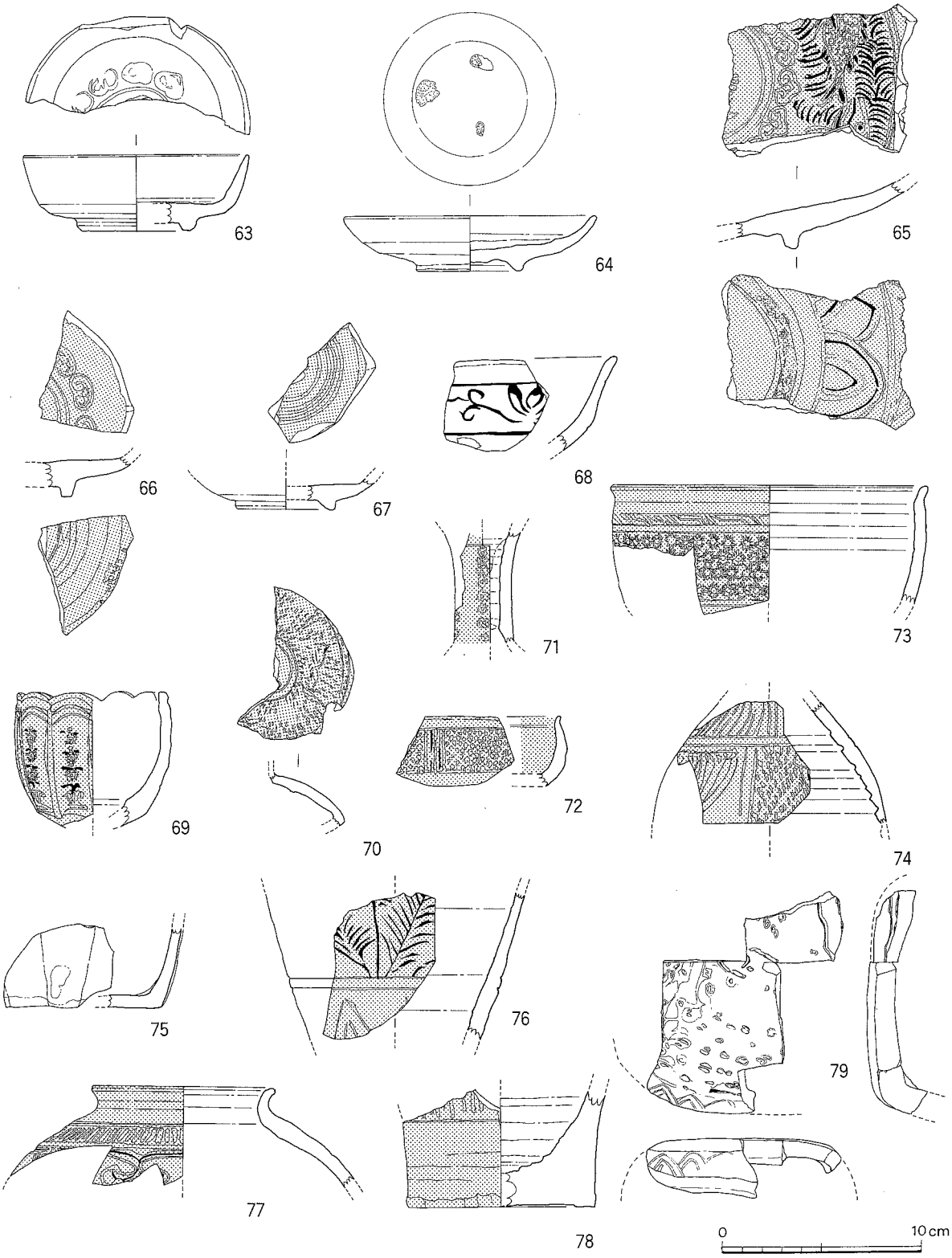
68は**鉄絵碗**で，二重の圏線の間に唐草紋を黒で象嵌する。体部はやや厚みをもつ小型の碗で，灰青色の釉を全体に施釉する。鉄絵碗は京畿道広州郡退村面牛山里四号・九号窯跡から出土したものから見れば15世紀前半に位置づけられよう。(鄭・香本1980)

69は上部に11枚の輪花を形どり，それに併せて体部も面取りしている。上部に２本の象嵌と，上から下へ３つの輪花を象嵌で配置し，その間を黒象嵌で区画する。托盞状のものと思われ，下には台が付くと考えられる。釉調は明緑灰色を呈し，全体に施釉するが一部掛け損じの部分もある。釉調や造りの丁寧さは他に見られないことから，他のものに比べると，一時期古い段階のものか。

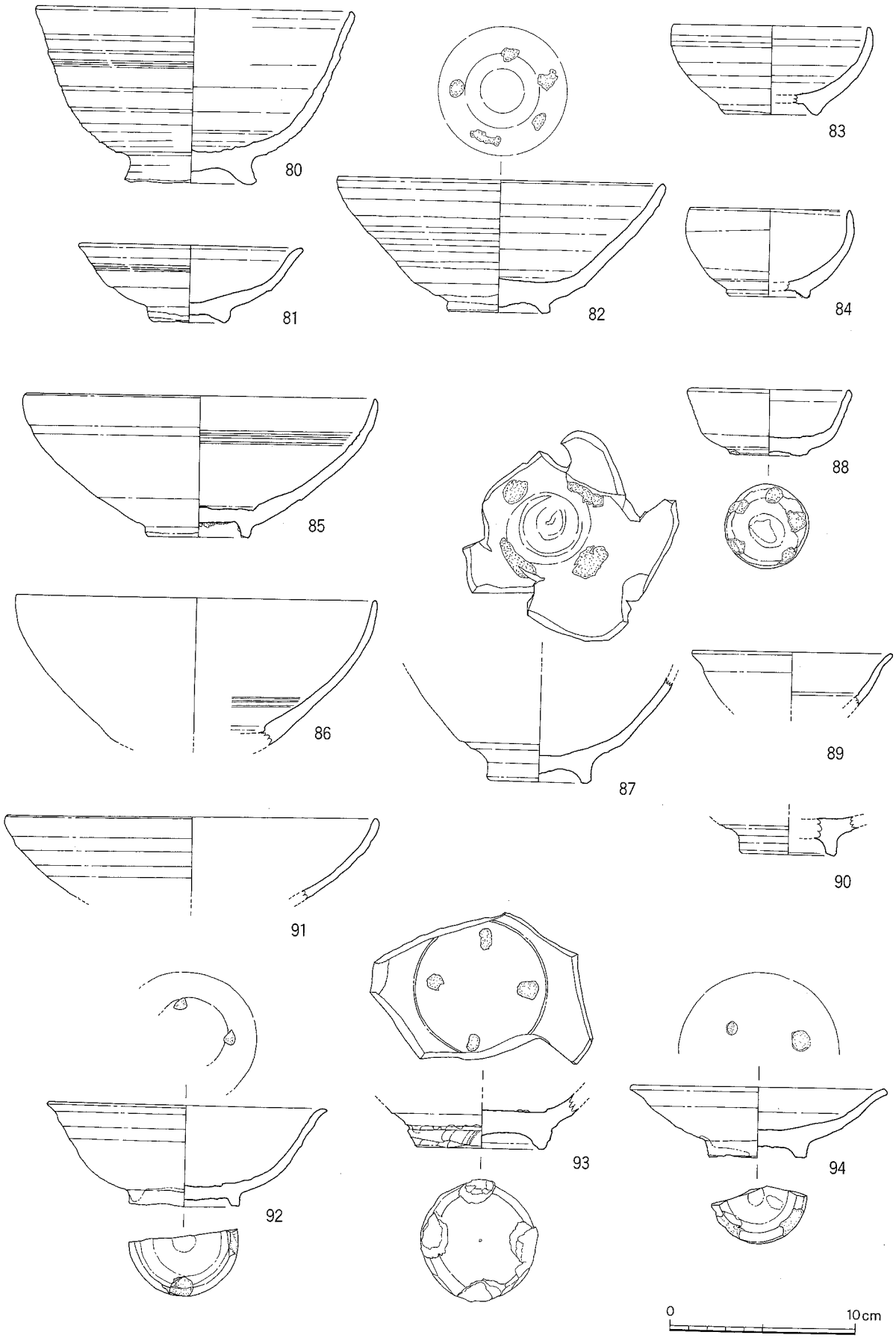
73は**深鉢**で，体部をやや丸く，口縁部を外反気味にする。体部に連続の菊花紋と雷紋？を配置するもので，本遺跡ではこの手の深鉢は少数である。。

70は小型の壺で胴部中央部で急に屈曲し独楽型を呈するものと思われる。細かな雲を全面に象嵌し，鶴を黒・白象嵌で四方に配置する。雲鶴紋象嵌は高麗期からよく使われる構図であるが，このような細かな象嵌で雲鶴を表すのは15世紀前葉までであろう。

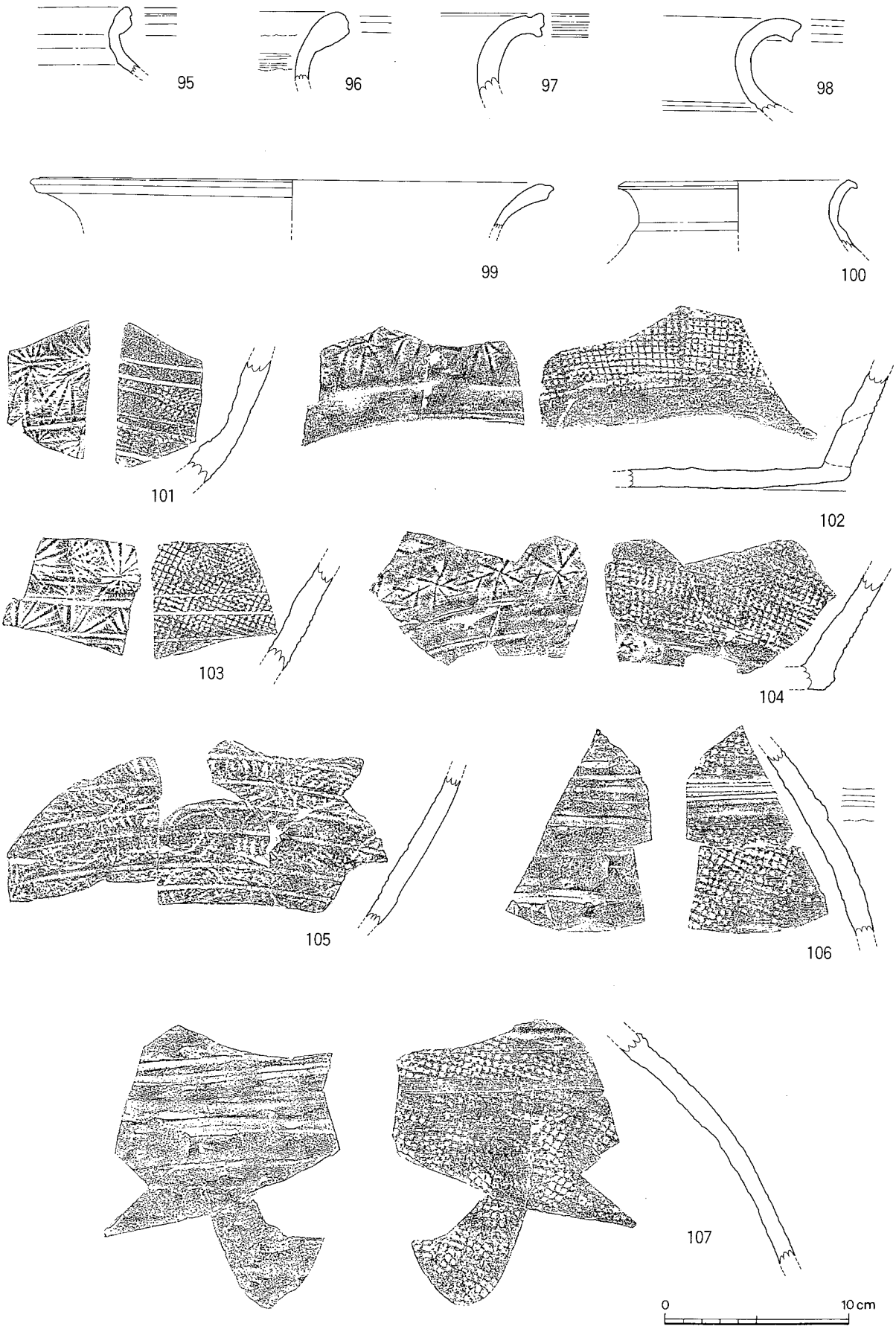
76・**78**は大形**瓶**（梅瓶）の胴部と高台部である。**76**は内部が無釉で丁寧なロクロ整形が行われ，胎土も不純物がない淡灰青色を呈している。表面に上部に黒，下部は白象嵌で文様を描く。**78**は明緑色の釉薬をかけるが下部にはむらがある。高台際ははみ出た粘土をナデて肥厚させる。上部に圏線とそ



第14図　朝鮮王朝陶磁②（1/3）



第15図　朝鮮王朝陶磁③（1/3）



第16図　朝鮮王朝陶磁④（1/3）

の上に縦に線状の象嵌が観察できるが全体像は掴めない。内部は成形による段が顕著である。

57は**偏壺**と思われる。全体に被熱し釉薬が溶けだしているが，表面には草花紋を白と黒の象嵌，側面に剣先紋を象嵌にて表現する。全体的に厚みがある。偏壺の出土は本遺跡においてはこの１点のみである。この他同一個体と思われる底部片や胴部片が出土しているが接合はならなかった。

72は**小鉢**で体部は丸く，口唇部をやや外反させる。外側に圏線とその間に縦の線で区画した中に雨滴紋を象嵌する。区画する縦線に黒象嵌を充填している。

朝鮮王朝陶器碗（第15図－80～85・87・88）

16世紀代から17世紀代と考えられる一群である。胎土がザックリした感があり，重量感があるものが多い。特に高台に重量感があるものがあり，茶陶との関連からくるものであろう。

80と**81**はピット47より出土したもので，**80**は黄灰色の釉を全体に施釉し，外面に線状の轆轤整形痕があり，見込にも螺旋状の整形痕が観察される。かなり深い碗で，高台を厚くつくり外傾させており，いわゆる呉器といわれる茶陶を意識したものである。**81**は全体に白釉を掻けたもので，口径に対し器高が低い。見込中央部を一段低く丸く削る。胎土は**80**・**81**ともに灰黄白色を呈しており，同じ胎土と思われる。

82はピット16から出土したもので，口径に対し高台の比率が小さい深い碗である。見込に砂と胎土を併せた目跡が観察される。釉は青灰緑色の釉を全体に施釉する。畳付けに砂が付着する。

83と**84**は半磁器的なもので，特に**35**は磁器に近い。全体丸まった形をするのが特徴で文様は一切施さない。全体に施釉し高台内にやや粗い砂が付着する。

88は小型の鉢で，青灰色の釉を全体に施釉するが，所々にむらがあり茶褐色の地が見える部分もある。胎土は灰白色で白と黒の微細な鉱物が入る。高台に目跡５個。

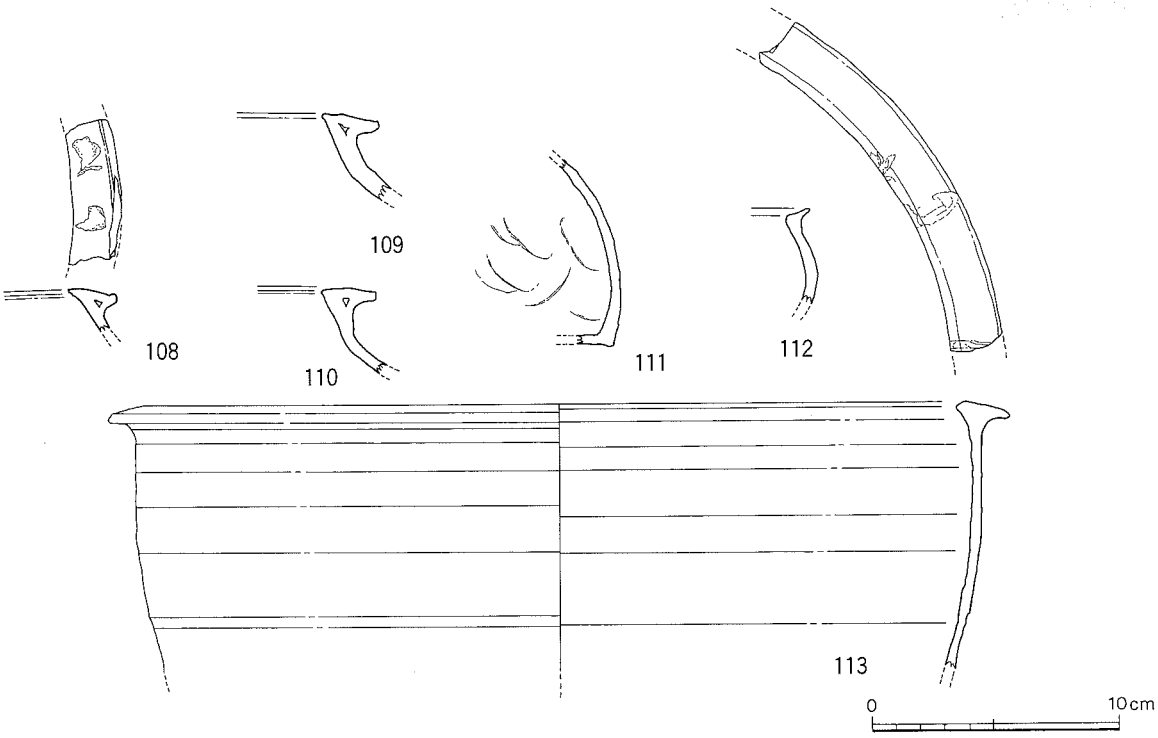
85は見込に小さな鏡面をもち一段大きな段をもって緩やかに内弯する大形の碗である。口縁部直下の内面側に３本の沈線を入れる以外に文様はない。高台内に粗い砂が付着する。この内弯碗は白磁とした**86**・**91**と器形的に共通するとともに，先行する蓮唐草蓮弁文碗（鉢）などの器形を踏襲するものと思われ，段階的な変化を捉えられる一群の可能性がある。

朝鮮王朝白磁碗・皿（第15図－86・89～94）

象嵌手法を用いない一群で，朝鮮王朝白磁・堅手と総称されるものを取り上げた。今回の調査では先の調査以上に朝鮮王朝白磁が出土したことから，この遺跡の主体が15世紀前後のみではなく，16～17世紀にも画期があるものとする根拠となった。器種としては碗が多数を占めている。

86・**91**は灰色で光沢がある。体部を内弯させることから，鉢とした。

92は端反碗で見込に２段の削りを入れて鏡面としている。全体薄身で灰白色の釉を高台付近を残し施釉する。胎土は灰白色で微細な黒い粒子が入る。見込と高台に胎土目の打ち欠き痕が残る。**93**は竹節高台の碗で高台内を丸く削り出す。見込底部に鏡面を造り段をつける。白青色のゆうを高台際まで施釉する。畳付けは内傾し，胎土目の打ち欠き痕が顕著である。桟原城出土のものに近似しており，16後半～17世紀初頭に位置付けられよう（福田1995）。



第17図　朝鮮王朝陶磁⑤（1/3）

94は灰濁色の釉を高台を除く部分に施釉し，見込に削りを入れて鏡面を作る。畳付けの部分は内傾させ，底の部分は肉厚である。見込と高台に胎土目の打ち欠き痕が残る。

朝鮮王朝無釉陶器・雑釉陶器（第16・17図）

陶器の中でも壺・瓶類について取り上げた。高麗期の無釉陶器については赤司善彦が特に朝鮮製無釉陶器という名称で分析をおこなっている（赤司1991）。16～17世紀には朝鮮製の雑釉陶器が出土し特に船徳利等が出土することは知られるが，この高麗期の無釉陶器と雑釉陶器つなぐ陶器類についての編年は空白となっている。本遺跡でも多くの無釉・雑釉陶器が出土しており，本遺跡の主体となる14・15世紀の陶器に位置づけ可能な一群があることは確実と思われる。

95～**100**は無釉陶器・褐釉陶器の口縁部である。**95**は灰青色の極めて須恵質のもので，器壁が薄いやや小振りのもので口縁部に一条の溝がある。口縁部は折り返して肥厚させ，口縁部直下から外反して胴部へと続く。**96**は口縁部の肥厚が極端で口唇部に２条の沈線を入れる。胎土は**105**と同様で青灰色を呈し，白い鉱物が混入するタイプで粗い。**97**は**96**よりも精緻で頸部も厚みがある。口唇部の沈線が特徴的でかなり深い沈線を入れる。**98**は光沢のある緑茶褐色の釉を施釉するもので，胎土は灰茶褐色を呈する。口唇部に一条の沈線，頸部の内部側に沈線が２条入る。表面の頸部下に格子目の叩き痕が観察されるが，その後の整形によって痕跡を留めるのみである。口縁部が丸く屈曲するのが特徴である。**99**は**97**と同様に２本の沈線を入れるが，**97**ほど特徴的ではない。全体が他のものに比べ屈曲度が弱く，頸部に厚みがない。**100**は無釉で口縁部がやや立ち上がった小振りの壺か。以上，無釉・施釉の口縁部を扱ったが，多種多様で一つの傾向を掴むところまでに至っていない。

101は無釉陶器甕の胴部で胎土が赤褐色を呈し，内側に放射状の叩き痕，表面に格子目の叩き痕が

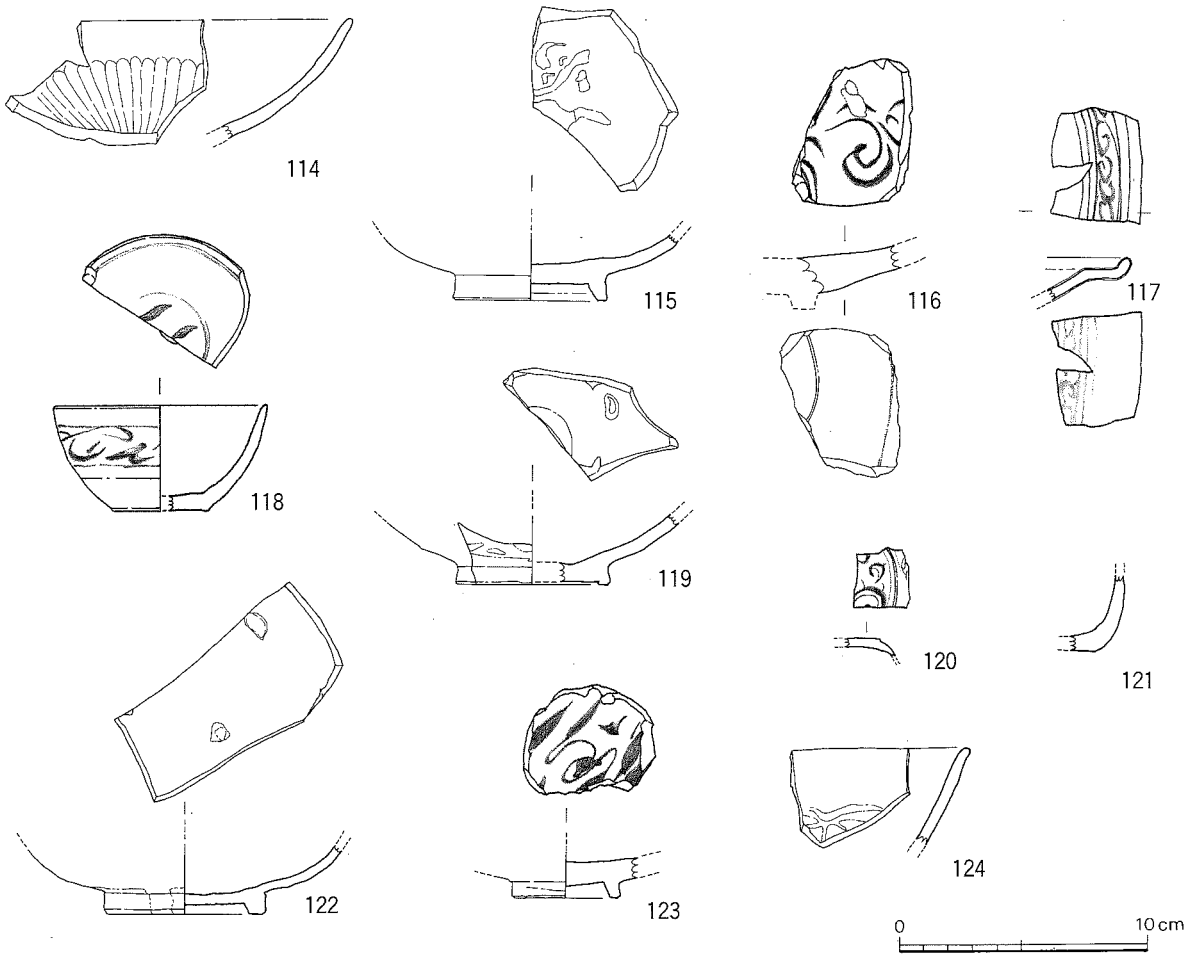
見られる。表面は格子目の整形具で叩き締めたあと，ナデ整形をおこない沈線を数条入れる。103と同一個体とみられ，無釉陶器の中でも堅緻で整形も丁寧である。101・103は同一個体と見られる。102は104も同一個体と見られる無釉陶器の底部である。底部の厚みよりも胴部の厚みが厚く，内部に放射状の叩き痕が明瞭に残る。表面は格子目の叩きで，後にナデている。101・103とは叩き整形は類似するが，胎土において明らかに相違する。内面の放射状叩きについても101・103がやや大きめの整形具重なるように使用しているのに対し，102・104はやや間隔をおいて叩いている。底部の輪積み痕から2～3㎝の粘土帯を輪積しながら製作したものであろう。104の底部外側に細かな砂粒が付着しており，目跡の可能性もある。105は胎土の白色粒の鉱物を含む青灰色のもので，器壁は薄く内面に青海波の叩き整形をおこなった後，沈線を細かな間隔で胴部全体に入れる。106・107は胎土は赤褐色を呈し少量白色鉱物が入り，外面に格子目の叩き整形をおこなった後，ナデ整形をおこなう。数条の1㎝幅のササラ状の工具でのナデも観察される。上部に突帯を貼り付ける。内面の調整は，叩き痕がないくらいに板状のもので横ナデをおこない，その後に盛り上がった部分を指で上方向にナデている。

無釉陶器のなかでも整形方法・胎土などから大きく3つに分類でき，これらの分類が時間的な差からくるものか，産地の違いからくるものなのか定かではないが，いわゆる朝鮮製無釉陶器の流れを汲むことは想像に難くない。また，前回の調査では，緑褐釉や黒釉の器壁の薄いものも出土しておりこれらのものと，今回提示した無釉陶器の一群がどのような関係にあるのかは大きな課題といえよう。108～113は，16世紀後半から17世紀にまで下る一群と考えられる雑釉陶器である。口唇部に貝目を残したり，口縁部が外側に突出するもので，小振りの甕類が多い。111は船徳利の胴部。112は小型の壺でいずれもいわゆる雑釉陶器とされるものである。113はピット18から出土している。

鄭良謨・香本不苦治1980「李朝陶磁の窯跡と出土品」『世界陶磁全集19』－李朝－　小学館
明石善彦1991「朝鮮製無釉陶器の流入」－高麗期を中心として－『九州歴史資料館研究論集16』
福田一志1995『桟原城跡調査報告書』厳原町文化財調査報告　第4集　厳原町教育委員会
森本朝子・片山まび2000「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案－生産地編年を視座として－」『博多研究会誌』第8号　博多研究会

3．ベトナム・タイ産磁器

ベトナム産としては，白磁碗・青磁碗・染付碗，合子などが出土している。正確な数ではないが，破片数からすると白磁43片，染付6片，青磁12片，鉄絵5片，褐釉15片の計81点が出土している（註1）。114は見込に細長い蓮弁を印刻した青磁碗で，器壁が薄く灰緑色の釉を施す。細かな貫入とさらに細かいごま塩状の気泡が全体に入る。115は見込に草花紋状のものを押型により陽刻した白磁碗で，淡白緑色の釉を高台際まで施釉する。高台際は直立し，高台側はやや外傾する。高台内に鉄銹を塗り，高台内は高台際より浅めに削りだしている。120は合子の蓋。上部を平坦にして唐草を藍色の呉須で描き，周辺に唐草紋を配置する。内部は露胎である。118は見込上部に二重圏線，と見込に草を描きその周りに圏線を，体部に唐草紋を鉄釉により描く。全体被熱しており本来に釉色は掴めないが，淡白灰色を呈す。高台は平底で，鉄銹を塗る。119は円盤状の高台を貼り付けた褐釉の碗。見込から体



第18図　ベトナム・タイ産磁器（1/3）

部下まで施釉する。胎土は灰褐色を呈し黒い鉱物の細粒が入る。高台内は平面に削り，低い高台を付ける。見込に胎土目の跡が残る。**122**は白緑色の光沢のある釉を高台際まで施釉する。器壁は薄いが高台は厚く造る。見込内に胎土目が残る。**116**は見込に藍色の釉で唐草紋を施釉したもので，盤と思われる。高台は剥落し，見込に胎土目痕がある。**123**は見込中央に鉄絵で草花紋を描く碗。高台際から高台内まで露胎。

タイ産磁器

117をはじめ，鉄絵の盤の破片が16片出土している（磁州窯のものが混入する可能性あり）。シーサッチャナライ産と考えられ，胎土灰黒褐色地に黒い粒子が入り，ザックリした感がある。ベトナム産の磁器の出土よりも数が少なく，出土した破片数も一個体のものの破片と考えられる。

註１　破片では特定できないものもあり，点数的には確定が難しい。

尾崎直人編1992『ベトナムの陶磁』福岡市美術館

東南アジア産陶器甕

16世紀後半～17世紀初頭の東南アジア産の大形壺の胴部と思われる破片が数点出土しており，この時期においても，対馬と東南アジアとの繋がりが示せる重要な遺物である。

4．国産の遺物

125は瓦質のすり鉢である。口縁部が屈曲して直立する。口縁部はヨコナデ，体部外面はケズリによる調整がなされている。内面のすり目は放射状に連続して施される。器肉は灰褐色の瓦質であるが，器表は黄褐色で土師質に近い。同タイプは，壱岐の覩城跡でまとまって出土しているが，本土部では豊後地方に出土例がある。口縁部の屈曲は備前の影響とも考えられるが，焼成的には古い様相がみられることから，年代的には検討を要する資料である。126は土師質のすり鉢である。体外面はハケメとユビオサエの痕がのこる。内面はハケメ調整の後，一単位六状のすり目が施される。年代の詳細は不明である。

127は東播系須恵器のすり鉢である。口縁部は黒灰色，体部は灰色で胎土に長石粒を含む。荻野繁春による時期区分のⅣ期（13世紀前葉～中葉）に相当するものであろう（荻野1990）。128も東播系須恵器のすり鉢の片口の部分である。

129～131は備前のすり鉢である。129は口縁部が屈曲，直立し屈曲部外周には凸帯が巡る。色調は赤褐色を帯びる。荻野氏の時期区分ではＸ期（16世紀前葉～中葉）に相当する。130も形態的には同様の特徴を示すが，口縁部は灰青色で体部は赤みをおびる。131は口縁部に数条のくびれがあるタイプで，焼成がやや甘く橙色を帯びる。荻野氏のＸＩ期（16世紀後葉～17世紀前葉）に位置づけられよう。

132・134は土師質のすり鉢である。共に，内面にはハケメが明確にのこるが，外面はハケメをナデ消し，ユビオサエものこる。口縁部にもハケメが認められる。

134・135は瓦質のすり鉢である。135は口縁部で外面にユビオサエ，内面と口縁部にハケメがのこる。内面は黒灰色，外面は灰褐色で，長石粒を多く含む。135は底部で外面にハケメとユビオサエ，内面にハケメがのこる。色調は内面が白灰色，外面は黒灰色を帯びる。すり目は一単位五状で間隔をおいて施される。

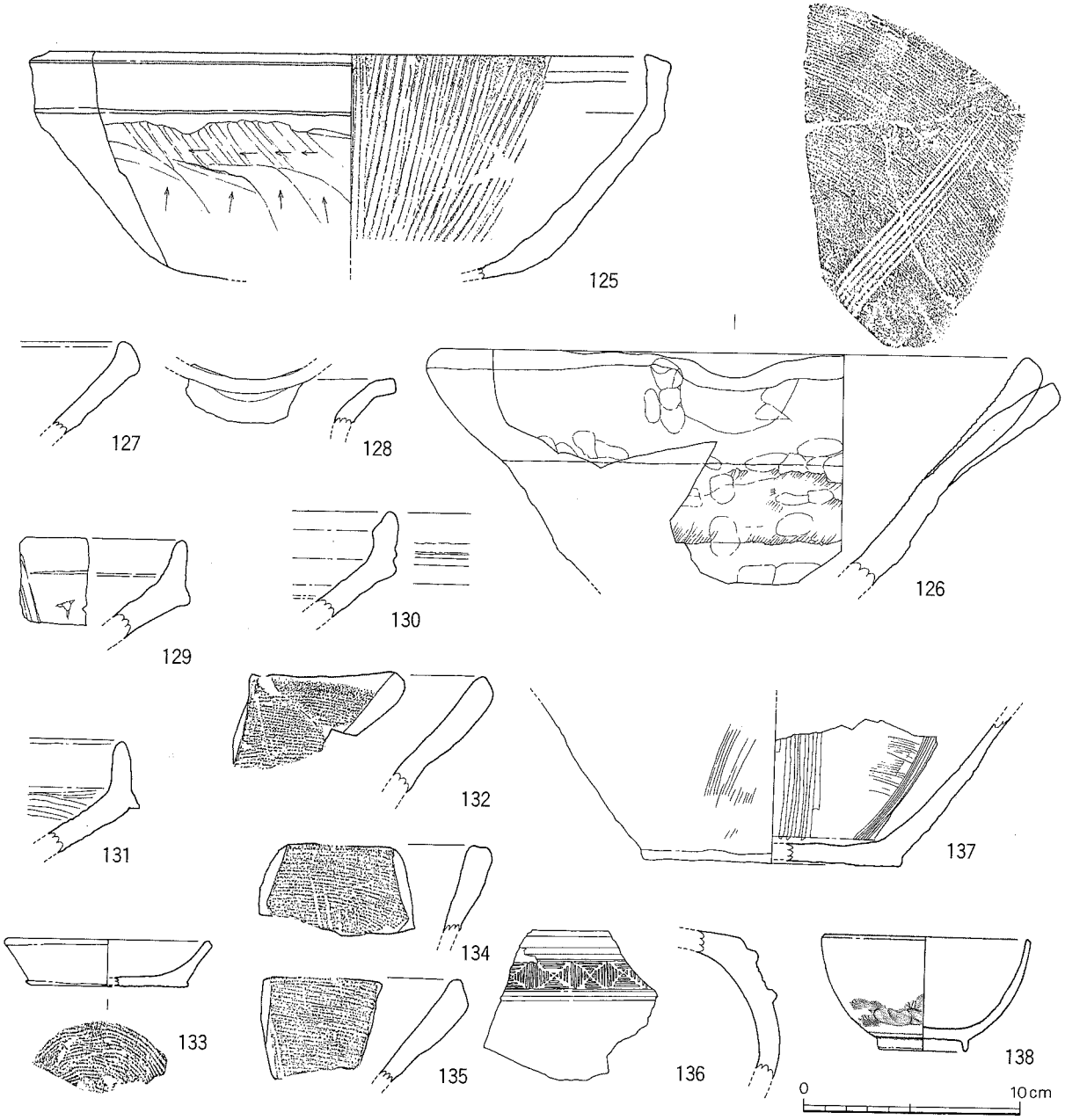
133は土師皿である。復原した法量は，口径9.4cm，底径7.1cm，器高2.1cmで，赤褐色を帯びる。底部には糸切り痕が見られる。

136は，瓦質の火鉢である。口縁部外面に二状の凸帯が巡り，その間に幾何学文が連続してスタンプされる。色調は外面が黒灰色，内面はやや赤みがかった白灰色である。胎土には大粒の石英粒が含まれる。

138は，肥前磁器である。18世紀代の染付碗で，外面に草樹文をかく。素地は白色で，呉須の発色もこの時期のものにしては良好である。釉には貫入が多くみられる。この資料はⅡａ層上で確認した粘土充填ピット内の出土であり，遺構の年代を18世紀代におく根拠とした遺物である。　（川口）

【引用・参考文献】

荻野繁春1990「財産目録に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集
徳永貞紹1990「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』
長崎県教育委員会編1997『覩城跡』原の辻遺跡調査事務所報告書第３集



第19図　国産陶磁（1/3）

5．その他の遺物

金属製品（第20図）

今回の調査ではかなりの鉄・銅製品が出土した。鉄はかなり銹が吹き出ており，判別可能なものを取り上げた。また鉄の出土が多いことから周辺に鍛冶の存在も考えられ，焼土層としたⅣ層などはこの鍛冶関連の焼土の可能性も否定できないところである。ただし，鍛冶遺構の検出はなく，焼土層との関連についても定かでないことから，ここでは製品について説明を加える。

1は銅を薄く引き延ばし，曲物状にしたもの。口縁部を折り返し，口縁直下に沈線が入る。2はやや厚い銅板を折り曲げ，一端を平坦にし隅丸方形状に造りだす。用途については不明。3は幅2㎜薄いものを環状にしており，指輪状のものである。4はヤス状のもので全体を断面菱形に研ぎ出す。5～9銅を棒状にしたもので，断面が丸いものと，六角形になるものとがあるが，用途等については不明。10はやや湾曲した板状のものに溝が付けられ，間に細かな細工が施されるが剥落しており全容を掴めない。装飾品と思われる。11・12は銅製の鈴である。博多においても同様な鈴の出土が知られているが，用途等については不明。13は銅製の環であるが用途は不明。

鉄製品は14～16の刀子，17の鎹，18・19の釘，21の不明棒状製品，20の釣針がある。刀子は他に数点出土しているがここでは割愛した。また19については釘としたが，この形で完結しており不明である。この他に22の鉛状のブロックが出土している。表面に削り痕が認められることから，削ったものを何らかの要に使用したのであろう。比重がかなりあり，600ｇを計る。近世の銅製品としては，23の沈子，24の錫杖あるいは輪宝の一部と思われるものも出土している。沈子については，投網に使用する錘であることは大分県の府内城出土の沈子の見解からも知られるところである（吉田1996）。外海にあってこの対馬でも近世において投網が使用されていたことを示す資料である。浅茅湾を対象とした漁撈活動の一旦を示すものであろう。

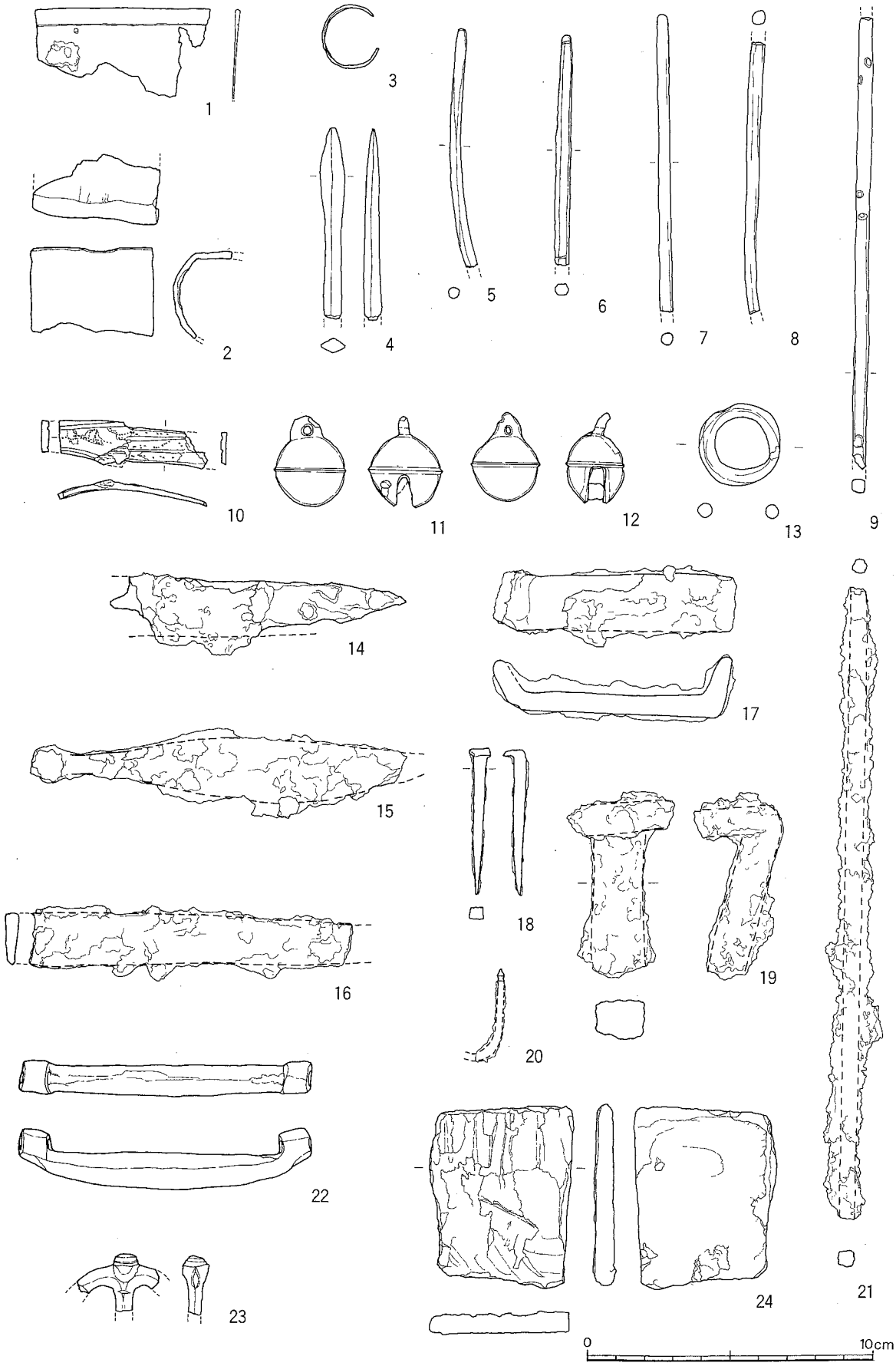
これらの金属製品についてはほとんどが包含層からの出土ではっきりした年代を与えることが出来ない。ただし，出土遺物は博多出土の中世のものとほぼ変わらないことから，おおよそ中世の金属製品として捉えることは可能かと思われる。

石 製 品（第21図）

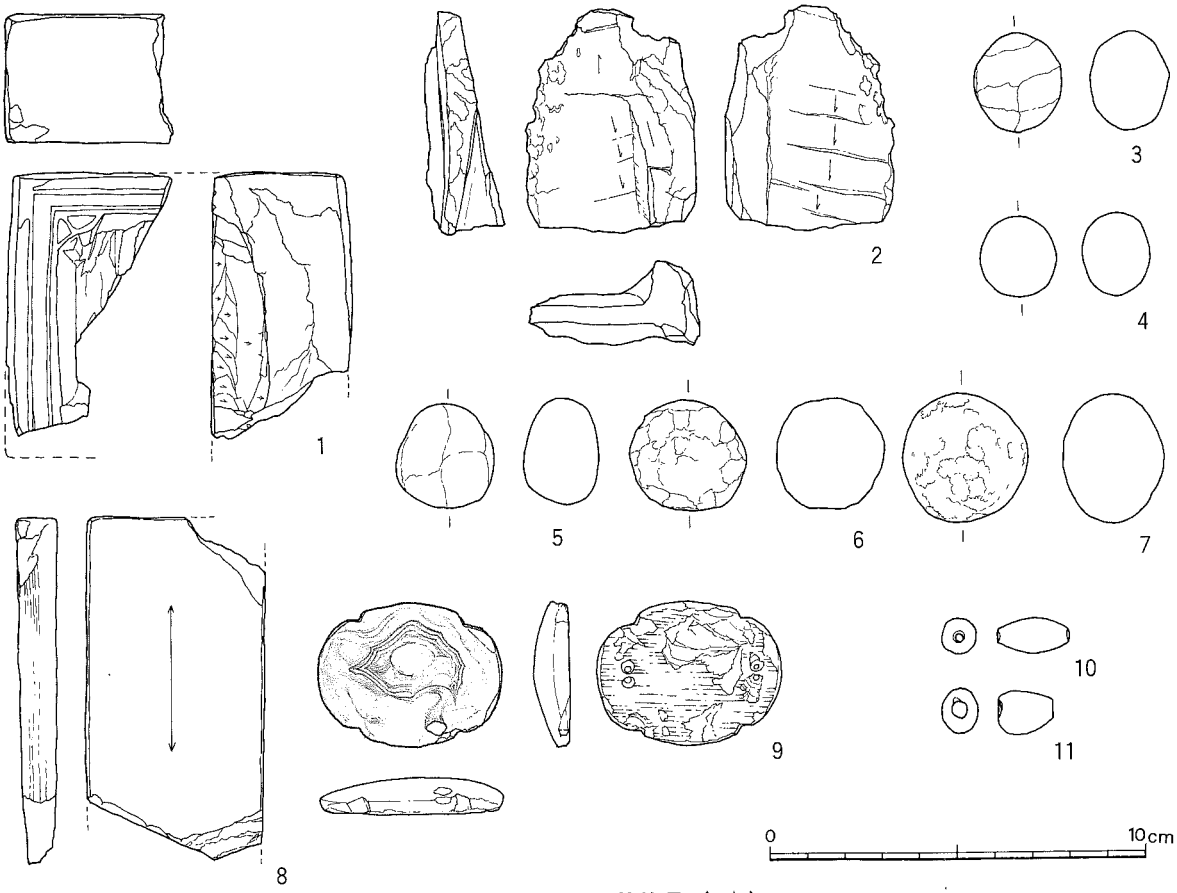
1・2は硯と思われる。1は赤褐色のやや軟質の石材で，内部にノミ痕が残る。2は玄武岩の粗い素材にノミ痕があり，表裏に硯面を造る。3～7は博多遺跡群で毬球玉あるいは玉として報告されるものと同じものと判断する（大庭1991）。全面を研磨，或いは敲打によって球体に整形している。本遺跡出土のものが毬球玉とすれば，ここ対馬でもその遊技がかなり浸透していたことを改めて認識させられる。また，そのルーツを探る上でも大きな問題を提起しているものと考えていいだろう。出土したものはほとんどが硬質の頁岩で，研磨しながら球形にしている。また砂岩製のものについては敲打整形をおこなっている。8は頁岩製の砥石で全面に研磨痕が残る。

装 飾 品（第21図）

9は瑪瑙製の石帯である。透明色の地に赤茶褐色の流理が入る。全体を丁寧に研磨し，楕円形状に



第20図　金属製品（1/2）24は1/3

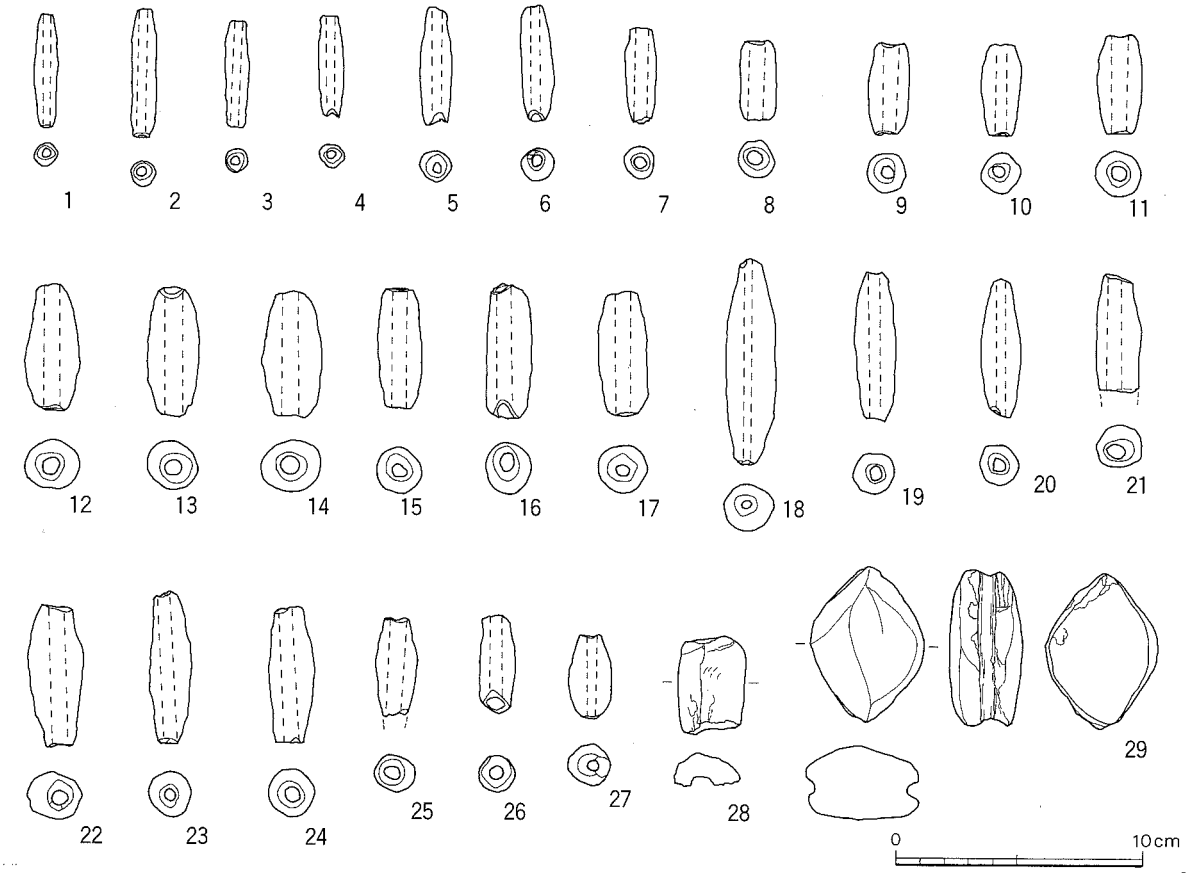


第21図　石製品・装飾品（1/2）

仕上げ，四隅に切り込みを入れる。裏面の加工は雑で，粗い研磨で仕上げており，２箇所の穿孔が施される。表面に虫食い状の孔が一部見られるものの，精巧な造りで材質的に上質の瑪瑙を使用するなど，かなりの高級官僚のものと考えられる。石帯は日本では古代律令制下における高級官僚の装束の中に見られるが，本遺跡では古代の遺物の出土はほとんどなく中世のものとして考えている。中世のものとした場合出土した陶磁器から15世紀前後のものと考えるのが妥当と考える。朝鮮王朝ではこの時期にも官僚の装束の一部として，石帯が使用されていることから，いまのところ朝鮮王朝からの招来品と考えたほうが無難と考えられる。ただし，琉球・東南アジアの装束についても考慮するところがあり，今後さらに追求する必要がある。

朝鮮王朝からの招来品と考えた場合，この地に残された理由として３つのことが考えられる。一つはこの時期に朝鮮王朝がとった倭寇懐柔策として受職人の制がある。倭寇に朝鮮王朝が官位を与え，その身分の保証をする方法で，早田氏も万戸の称号を授与されている。この際に装束の授与もあったと思われ，石帯もその時に授与された可能性がある。また，倭寇の侵攻に伴う略奪品の可能性。また交易における代替品などである。いずれも憶測にすぎないが，この石帯のもつ意義の大きさは計り知れないものがあることから，古代をも視野に入れて今後再検討する必要がある。

10は紡錘形をし，横に穿孔している。装飾品としての可能性があるが，今のところ例を知らない。石質は不明。**11**は，素材不明であるが，素焼きのものに濃緑青色の釉を施釉した感が強い。



第22図　土　　錘（1/3）

３点の装飾品については，日本の中世の遺物中には出土例がない。時代的なものを踏まえ，今後再検討する必要がある。

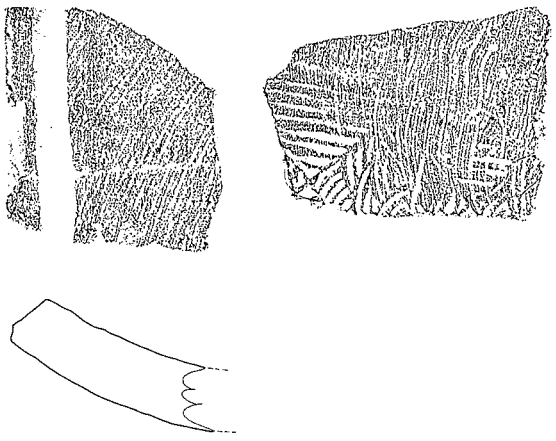
大庭康時編1991『博多17』－博多遺跡群第42次発掘調査概報－　福岡市埋蔵文化財調査報告書第245集

土　　錘（第22図）

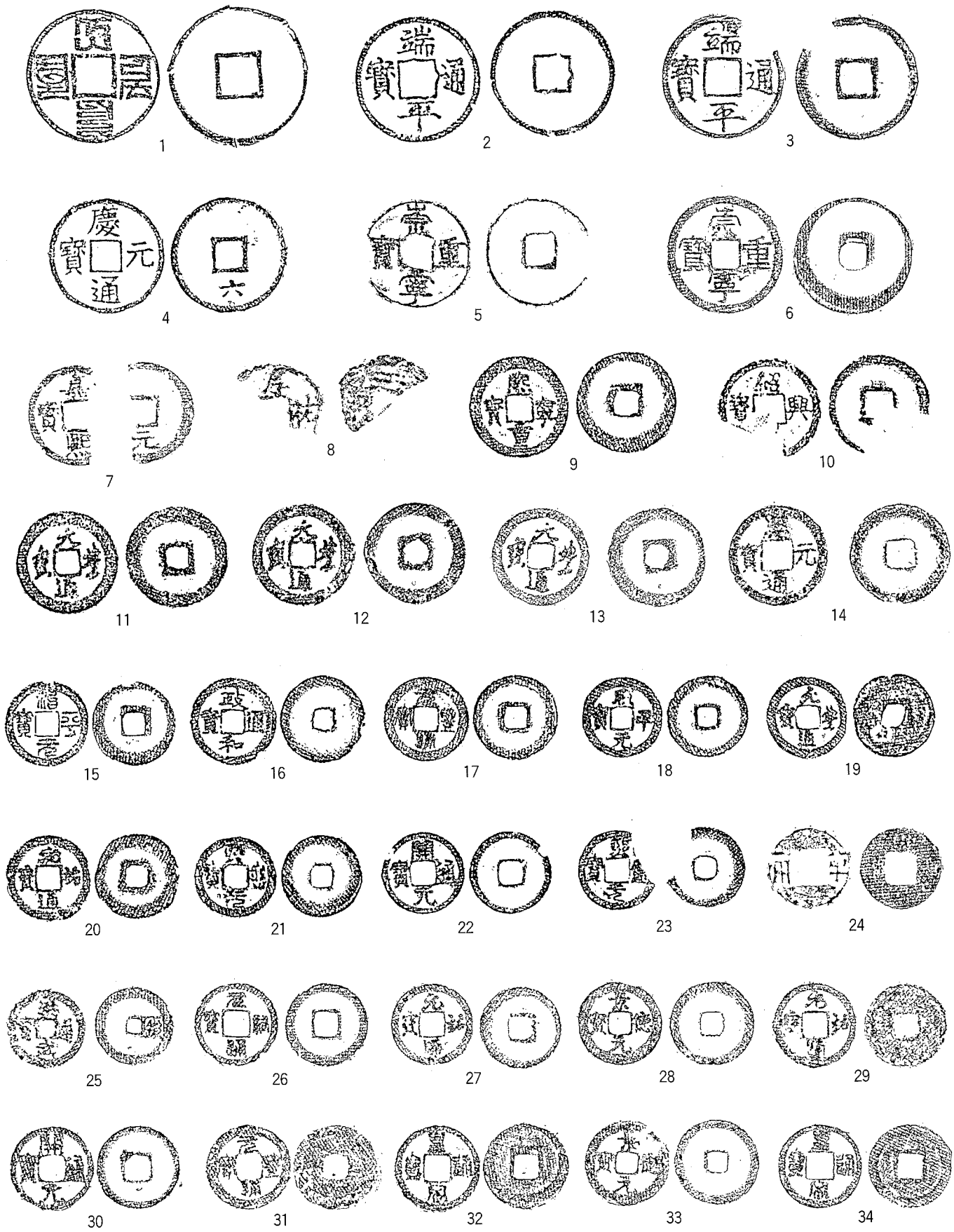
土錘が100点を超える量で出土している。図では大まかに２・２ａ層（１～17）と４層以下（18～29）の土錘として提示した。

瓦（第23図）

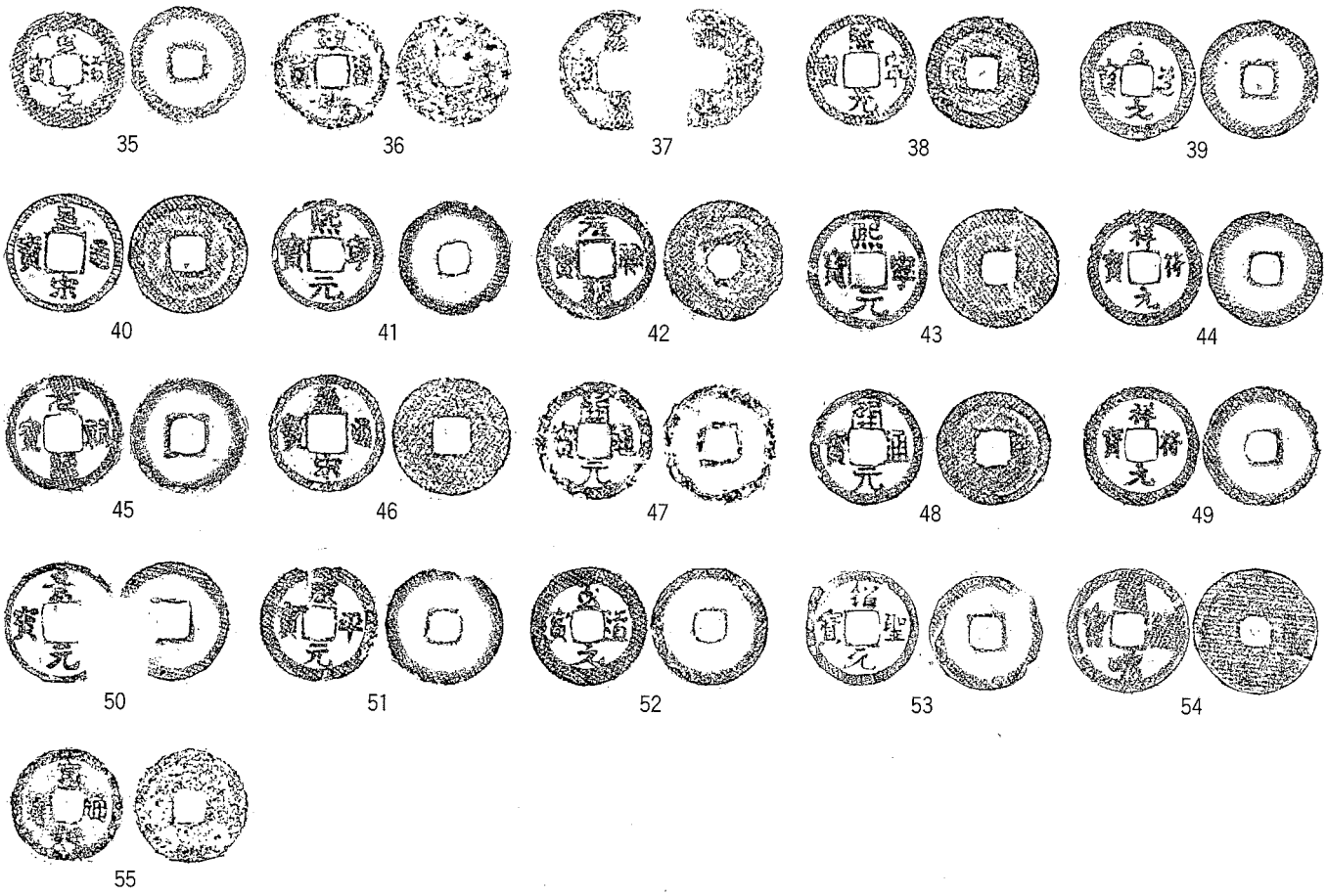
朝鮮王朝系の瓦片が１点出土している。この手の瓦は全国で出土例が増加してはいるものの，１遺跡での出土数は数点に止まっている。本遺跡でもこの１点のみで，実際に屋根瓦として使用されていたのか疑問の域をでない。本遺跡資料は平瓦の端部で，厚さ2.4cmを測る。布目の上からナデ整形し，継ぎ目が側縁に直交する。裏は幾何形文様の叩きを施し，その後にヘラ状のもので削る。胎土は灰白色で軟質である。



第23図　瓦（1/3）



第24図　銭　　貨（2/3）



第25図　銭　　貨（2/3）

銭貨について

下関市立大学教授　　櫻　木　晋　一

今回の調査で，55枚の銭貨が出土している。大型銭が14枚含まれており，出土銭貨に占める割合が高いという特色がある。大型銭が日本国内で流通していたのかどうかについてはまだ議論の余地が残されているが，この流通問題を考える上で本遺跡が重要な遺跡であることは間違いない。中国から日本に向かう途中で沈没した新安沖沈船からも大型銭は検出されており，博多遺跡群における出土例が多いことを併せ考えると，中国で流通していた大型銭が日本の入り口まではもたらされていた事実を確認できる。特筆すべき銭貨としては，パスパ文字の大元通寶がある。現在のところ，国内では博多遺跡群第35次調査と同第62次調査で１枚ずつ出土しているだけであり，管見の限り３例目である。

表4　銭貨一覧表

NO	出土区層位	銭　名	初鋳年代	そ　の　他
1	A区－Ⅳ層	大元通寶	1310年初鋳	当十　パスパ文字
2	B区－Ⅳ層	端平通寶	1234年初鋳	当三
3	B区－Ⅳ層	端平通寶	1234年初鋳	当三
4	Ⅱ　層	慶元通寶	1195年初鋳	当三　背「六」
5	A区－Ⅵ層	崇寧重寶	1102年初鋳	当十　磨輪
6	C区－Ⅲ層	崇寧重寶	1102年初鋳	当十
7	A区－Ⅴ層	嘉熙通寶	1237年初鋳	背元
8	B区－Ⅳ層	淳祐通寶	1241年初鋳	
9	A区－Ⅱa層	熙寧重寶	1071年初鋳	折二
10	D区－Ⅲ層	紹興□寶	1131年初鋳	折二　□は文字の配置から「元」である。
11	A区－Ⅳ層	元豊通寶	1078年初鋳	折二
12	A区－Ⅵ層	元豊通寶	1078年初鋳	折二　行書
13	B区－Ⅳ層	元豊通寶	1078年初鋳	折二　行書
14	B区－Ⅳ層	慶元通寶	1195年初鋳	折二
15	A区－Ⅱa層	治平元寶	1064年初鋳	
16	A区－Ⅳ層	政和通寶	1111年初鋳	
17	A区－Ⅳ層	元豊通寶	1078年初鋳	
18	A区－Ⅳ層	咸平元寶	998年初鋳	
19	A区－Ⅳ層	元豊通寶	1078年初鋳	
20	A区－Ⅳ層	元祐通寶	1086年初鋳	
21	A区－Ⅳ層	熙寧元寶	1068年初鋳	
22	A区－Ⅳ層	開元通寶	621年初鋳	
23	A区－Ⅳ層	熙寧元寶	1068年初鋳	
24	B区－Ⅳ層	半　両	B.C.175年初鋳	
25	B区－Ⅳ層	洪武通寶	1368年初鋳	背一銭
26	pit　－　1	元祐通寶	1086年初鋳	篆書
27	表　土	元祐通寶	1086年初鋳	行書
28	A区－Ⅱa層	景徳元寶	1004年初鋳	
29	C区－Ⅴ層	元祐通寶	1086年初鋳	行書
30	B区－Ⅵ層	開元通寶	621年初鋳	
31	B区－Ⅳ層	元豊通寶	1078年初鋳	篆書
32	A区－Ⅱa層	皇宋通寶	1037年初鋳	篆書

表5　銭貨一覧表

NO	出土区層位	銭　名	初鋳年代	そ　の　他
33	A区－V層	景徳元寶	1004年初鋳	
34	B区－Ⅳ層	皇宋通寶	1037年初鋳	篆書
35	B区－Ⅳ層	至道元寶	995年初鋳	行書
36	A区－V層	政和通寶	1111年初鋳	真書
37	B区－Ⅳ層	判読不明	?	真書
38	B区－Ⅳ層	熈寧元寶	1068年初鋳	草書
39	D区－Ⅲ層	至道元寶	995年初鋳	真書
40	B区－Ⅳ層	皇宋通寶	1037年初鋳	篆書
41	D区－Ⅲ層	熈寧元寶	1068年初鋳	真書
42	B区－Ⅱa層	元祐通寶	1086年初鋳	篆書
43	A区－Ⅳ層	熈寧元寶	1068年初鋳	真書
44	D区－Ⅲ層	祥符元寶	1009年初鋳	文字の特色から景祐元寶と判断できる。
45	A区－Ⅱa層	元祐通寶	1086年初鋳	行書
46	A区－Ⅳ層	皇宋通寶	1037年初鋳	
47	B区－Ⅳ層	開元通寶	621年初鋳	
48	B区－Ⅳ層	開元通寶	621年初鋳	
49	A区－Ⅳ層	祥符元寶	1009年初鋳	
50	C区－Ⅱ層	景□元寶	1034年初鋳	
51	C区－Ⅱ層	咸平元寶	998年初鋳	
52	A区－Ⅳ層	至道元寶	995年初鋳	
53	pit　－　41	紹聖元寶	1094年初鋳	
54	pit　－　68	判読不能		
55	表　　土	新寛永通寶	1697年初鋳	

第Ⅳ章　附　　篇

美津島町，水崎遺跡における放射性炭素年代測定　　株式会社　古環境研究所

1．資料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	第Ⅳ層	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
No.2	第Ⅴ層	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法

2．測定結果

試料名	^{14}C 年代（年 BP）	δ^{14}C（0／00）	補正^{14}C 年代（年 BP）	歴年代（西暦）	測定No.（Beta－）
No.1	690±40	－28.1	640±40	光点：Cal AD 1300 2δ：Cal AD 1280～1410 1δ：Cal AD 1290～1320, Cal AD 1340～1390	151561
No.2	640±40	－26.9	610±40	光点：Cal AD 1320, Cal AD 1350 Cal AD 1390 2δ：Cal AD 1290～1420 1δ：Cal AD 1300～1400	151562

1）^{14}C 年代の測定値

試料の^{14}C／^{14}C 比から単純に現在（ＡＤ1950年）から何年前かを計算した値。^{14}C の半減期は国際慣例に従って5568年を用いた。

2）δ^{14}C の測定値

試料の測定^{14}C／^{14}C 比を補正するための炭素安定同位体比（^{14}C／^{14}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの下分偏差（0／00）で表す。

3）補正^{14}C 年代値

δ^{14}C の測定値から試料の炭素の同位体分別を知り，^{14}C／^{14}C の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C 濃度の変動を校正することにより算出した年代。較正には年代既知の樹木年輪の^{14}C の詳細な測定値，およびサンゴの U－Th 年代と^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース（“INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998, Radiocarbon40(3)）により，約19,000年ＢＰまでの換算が可能となっている。ただし，10,000年ＢＰ以前のデータはまだ不完全であり，今後も改善される可能性がある。

歴年代の光点とは，補正^{14}C 年代値と歴年代較正曲線との光点の歴年代値を意味する。1δ（68％確率）および2δ（95％確率）は，補正^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した歴年代の幅を示す。したがって，複数の光点が表記される場合や，複数の1δ・2δ値が表記される場合もある。

美津島町，水崎遺跡における花粉分析

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

花粉分析は，一般に低湿地堆積植物を対象として比較的広域な植生や古環境の復元に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積植物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお，乾燥的な環境下の堆積物では，花粉などの植物遺体が分析されて残存しないこともある。

2．試　　料

試料は，水崎遺跡において検出された生活址（14世紀後半～15世紀前半）のⅣ層，Ⅵ層より採取された黒褐色土２点である。

3．方　　法

花粉の分離抽出は，基本的には中村(1973)を参考にして，試料に以下の物理化学処理を施して行った。

1）５％水酸化ナトリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2）水没した後,0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈殿法を用いて砂粒の除去を行う。

3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4）水洗した後，水酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

5）再び水酢酸を加えた後，水洗を行う。

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い，グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は，遠心分離（1500rpm，２分間）の後，上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして，所有の現生標体との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，？および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお，科，亜科や属の階級の分類群で一部が属や？に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

イネ属に関しては，中村（1974,1977）を参考にして，現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが，個体変化や類似種があることからイネ属型とする。

4．結　　果

(1) 分類群

出現した分類群は，樹木花粉１，草本花粉３，シダ植物胞子２形態の計６である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し，主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

［樹木花粉］

マツ属複維管束亜属

［草木花粉］

アカザ科－ヒユ科，タンポポ亜科，キク亜科

［シダ植物胞子］

単条溝胞子，三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

4層，6層より採取の黒褐色土は，花粉密度が極めて低く，花粉などの有機物遺体が分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったと推定される。花粉の検出量は少ないが，検出されたアカザ科－ヒユ科，タンポポ亜科，キク亜科の草本類は，乾燥地を好む耕地雑草および人果植物の生活をもつものばかりであることから，周囲に乾燥した人為環境が分布していたと推定される。また，樹木花粉で検出されたマツ属複維束亜属（ニヨウマツ類）は二次林要素であり，周囲の森林植生が人為干渉による二次林化を受けている可能性が示唆される。

〔参考文献〕

中村　純（1973）花粉分析，古今書院，p.82－110.

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代史料研究の方法，角川書店，p. 248－262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態，大阪市立自然学博物館収蔵目録第5集,60p.

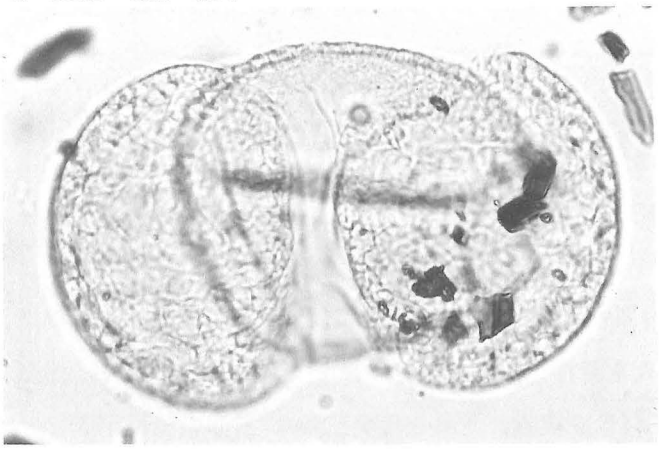
中村　純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（oryza sativa）を中心として，第四紀研究,13,P.187－193.

中村　純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，P.21－30.

表1　水崎遺跡における花粉分析結果

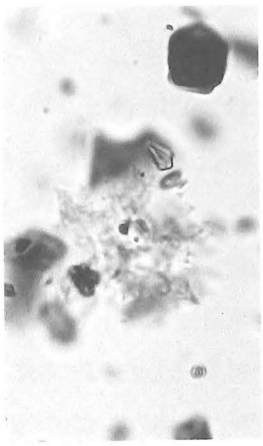
分析群		4層	6層
学名	和名	黒褐色土	黒褐色土
Arborcal pollen	樹木花粉		
pinus subgcn. diploxylon	マツ属複維管属亜属	2	1
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Chenopodiaceae-Ameranthaceae	アカザ科・ヒユ科	1	1
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	1
Asteroideae	キク亜科		1
Ferm spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	3	1
Trilate type spore	三条溝胞子	1	
Arbareal pollen	樹木花粉	2	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	2	3
Total pollen	花粉総数	4	4
Total pollen	試料1cc中の花粉密度	2.4 ×10	2.4 ×10
Unknown pollen	未同定花粉	0	0
Fem spore	シダ植物胞子	1	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(1)	(1)
	明らかな消化残渣	(1)	(1)

水崎遺跡の花粉・胞子

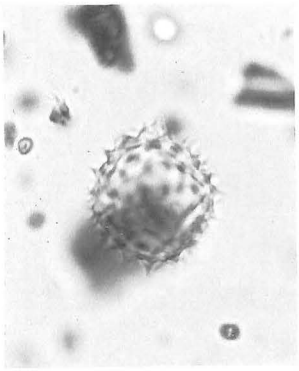


1　マツ属複維管束亜属

2　アカザ科－ヒユ科



3　タンポポ亜科



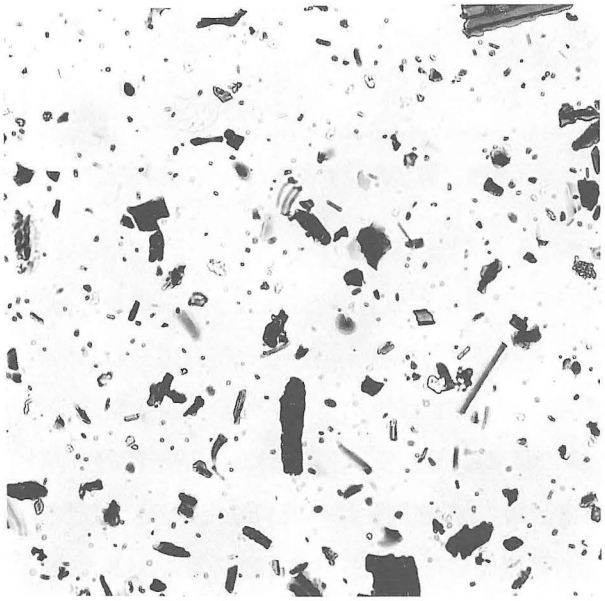
4　キク亜科

5　シダ植物単条溝胞子

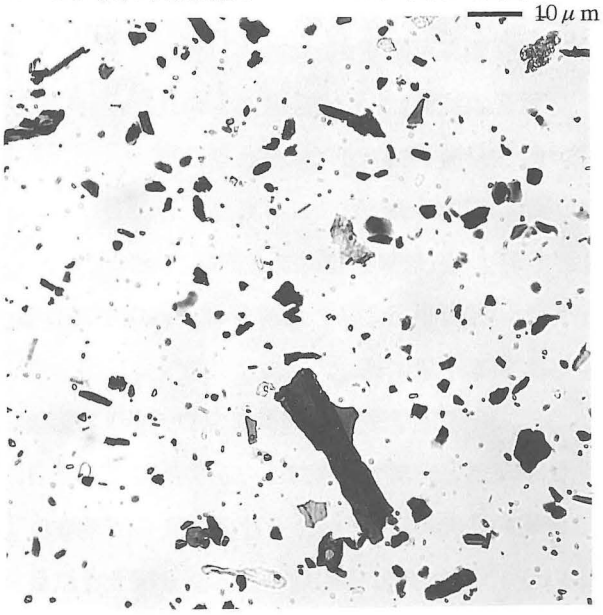
6　シダ植物単条溝胞子

7　シダ植物三条溝胞子

10μm



8　4層　弱拡大写真



9　6層　弱拡大写真

100μm

中世の尾崎地域と早田氏

九州大学文学部助教授　佐　伯　弘　次

はじめに

中世の尾崎地域は，応永26年（1419）年の応永の外寇の舞台として，また，一時期島主の勢力を凌ぐほどの豪族であった早田氏の本拠地として知られている。特に室町時代前期の早田左衛門太郎（左衛門大郎）の時代は，早田氏にとって全盛期であった。応永の外寇では，227艘・17285人の朝鮮軍はまず「豆知浦」（尾崎の土寄）に来泊した。朝鮮軍は，対馬の船129艘を奪い，使用できるもの20艘以外は焼却した。さらに民家1939戸を焼き，114人を斬首し，21人を捕虜にし，穀物を刈り取り，倭寇に捕えられていた中国人男女131名を保護した（『世宗実録』元年６月癸巳条）。前回の発掘調査で確認された室町時代の焼土層が想起される。

本稿では，まず『海東諸国紀』に出てくる尾崎地域の浦と人物について検討し，研究史で明らかになっている早田氏の動向や室町時代における尾崎地域と朝鮮および九州本土との関係についても見ていきたい。

１．『海東諸国紀』に見える尾崎地域

朝鮮の申叔舟が編纂した『海東諸国紀』（1471年成立）には，15世紀中葉の対馬の状況がよく記されている。その中で尾崎地域周辺については次のように記している。

可吾沙只浦有神堂

阿吾頭羅可知浦百余戸

可里也徒浦二百余戸

敏沙只浦二百余戸

頭知洞浦二百余戸

中枢平茂続

賊首早田之子，曽来侍朝，為中枢，今還本島，

護軍中尾吾郎

平茂続之子，中尾弾正立以為後，戊子年来受職，

まず浦名と戸数から見ていこう。「可吾沙只」は尾崎の北東に位置する「郷崎」に，「阿吾頭羅可知」は尾崎の「大連河内」に，「可里也徒」は尾崎の「仮宿」に，「頭知洞」は尾崎の「土寄」に比定されている（中村1965，田中1991）。いっぽう「敏沙只浦」は尾崎の「水崎」に比定する説（対馬教育会1928，中村1965）と豊玉町水崎（旧仁位郡水崎）に比定する説（田中1991）がある。『海東諸国紀』対馬州の「可吾沙只浦」（郷崎）から「老夫浦」（濃部）までは全て与良郡の浅茅湾周辺の浦が列記されており，「敏沙只浦」のみ対岸の仁位郡に比定するのは疑問が残る。また，『海東諸国紀』に収録さ

れている「対馬島之図」（図１）では，「敏沙只浦」は「豆知洞浦」と「加里也徒浦」の中間に記されている。これらのことからすると，「敏沙只浦」は仁位郡の水崎ではなく，与良郡つまり尾崎の水崎に比定するのが妥当である。

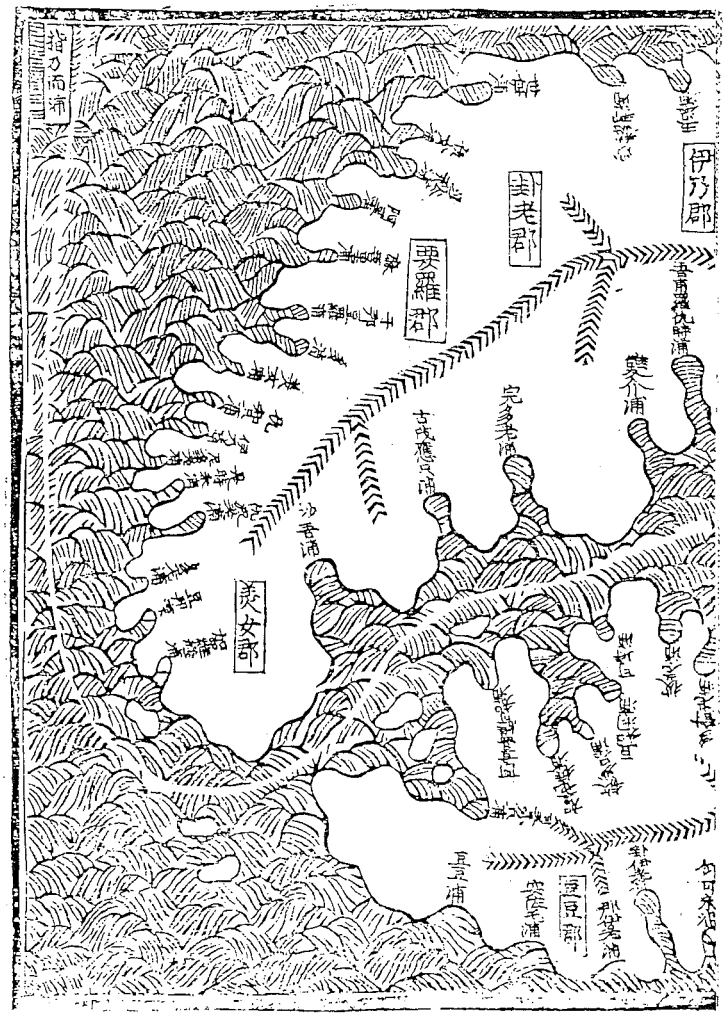


図１『海東諸国紀』日本国対馬島之図（部分）

次に戸数であるが，大連河内が100余戸，仮宿・水崎・土寄が各200余戸で，合計すると700余戸となる。『海東諸国紀』に記される対馬の集落の戸数で，最大のものは美女浦（峰郡三根）の650余戸であり，沙加浦（峰郡佐賀）の500余戸がこれに次ぐ。『海東諸国紀』の戸数と朝鮮使節の帰朝報告に記された戸数は一致しないことも多く，700余戸という数字は必ずしも正確とはいえない。しかし，この時代の尾崎地域に対馬でも最大規模の集落が存在した可能性もまた否定することはできない。後述するように，室町時代の尾崎地域は朝鮮と九州を結ぶ流通拠点の一つであったと考えられ，最大級の集落を形成する基盤は存在した。

次に人物について見ていこう。尾崎地域の朝鮮通交者については，土寄の平茂続と中尾吾郎の両名が記されている。記事によれば，平茂続は倭寇の頭である早田（この場合は早田六郎次郎）の子であり，かつて朝鮮に来朝して朝鮮政府に仕え，「中枢」という官職に任じられたが，『海東諸国紀』成立当時はすでに対馬に帰国していた。平茂続＝早田茂続は土寄早田氏の一族で，一時期朝鮮政府に仕えた向化倭（投化倭）であった。向化倭は，朝鮮初期の倭寇懐柔策の結果として出現したことが一般的に認識されている。しかし，室町時代後期にも，この早田茂続や博多の藤安吉・茂村兄弟のように若干ながらも登場することは注目される。これは当該期における早田一族と朝鮮との密接な関係を抜きにして考えることはできない。

二人目の中尾吾郎は早田茂続の子で，朝鮮から「護軍」という正四品の武官の官職を名目的に与えられた受職人である。吾郎は中尾弾正の養子となり，中尾姓となった。戊子年（1468）に受職した。早田氏と中尾氏はともに尾崎の土寄に住む領主であるが，室町初期から同族といってもよいほどの近しい関係にあった。例えば早田左衛門太郎は「羅可温」＝中尾と称されているし，その子の一人が「中

尾弾正」であり，左衛門太郎の子六郎次郎の子にも「梨花温」＝中尾がいる（後掲系図参照）。

於対馬島有免許事，任先判之旨，不可有相違之状如件，

応永三十一年

二月九日　　貞盛（花押）

仲尾五郎殿

（中尾文書）

この応永31年（1424）の宗貞盛書下は，仲尾（中尾）五郎に対して，対馬島における何かを免許したものである。この仲尾五郎は，年代的にいって『海東諸国紀』の中尾吾郎とは別人である可能性が高いが，おそらく系譜的にはつながるものと考えられる。

かつて対馬倭寇を代表する存在であった土寄早田氏は，15世紀中期には向化倭および受職人として朝鮮との関係を続けていたのであり，より強い通交権を持つと考えられる受図書人や歳遣船定約者にはなっていない点に注意すべきである。

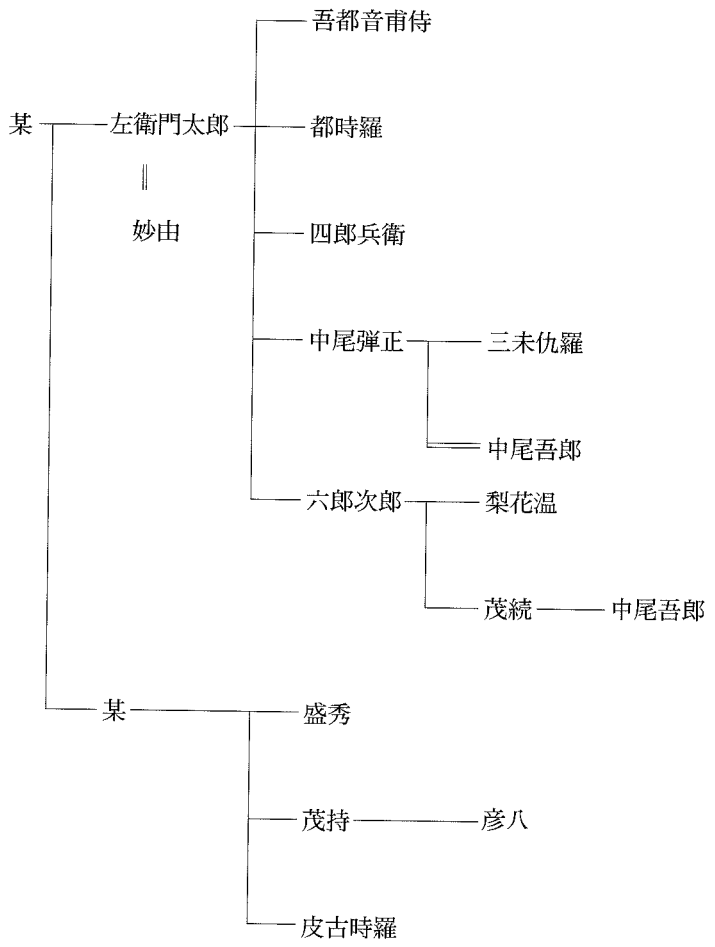
2．早田氏の動向

対馬の早田氏が前期倭寇を代表する存在であることは周知の事実である。早田氏が対馬倭寇の統率者であり，船越（美津島町小船越）と土寄に拠点を持っていたこと，朝鮮初期に朝鮮に一時期帰化して向化倭となったこと，早田左衛門太郎は宗貞茂没後には島主をしのぐ勢力を持っていたこと，応永の外寇後，朝鮮との外交交渉を行ったこと，左衛門太郎の子六郎次郎は，朝鮮・琉球間を往来する商人として活動したこと，尾崎早田家に朝鮮国王から与えられた告身（任命書）があることなどは早くから明らかにされている（田中1959，中村1965，田中1975）。

こうした早田氏について初めて専論を書いたのは田村洋幸氏であった（田村1967）。田村氏は，世宗期を中心に早田氏の朝鮮通交を検討し，系譜関係や朝鮮との通交の実態と特色を検討した。また世宗20年（1438）代以降の朝鮮による通交統制の強化と早田氏の明への侵攻が，早田氏の貿易者としての没落をもたらしたとする。その後，有光友学氏は，田村氏の復元した早田氏の系図を補訂し，かつ15世紀後半の朝鮮通交の衰微を検討した（有光1971）。いっぽう村井章介氏は，尾崎早田文書の中から天文19年（1550）７月の少二殿副官平時羅盛恒書契の写しを発見し，三浦の乱後の早田氏の朝鮮通交について検討を加えた（村井1995）。最近では韓文鍾氏が早田氏の朝鮮通交について包括的に検討している（韓2000）。

以上のような研究によって，土寄早田氏の朝鮮通交は，事実関係についてはほぼ明らかにされているといってよい。ここでは，これらの先行研究によって早田氏の朝鮮通交について概観しておきたい。まず早田氏の系譜関係であるが，田村・有光両氏の復元に，左衛門太郎の子吾都音甫侍を付加して図示すると次のようになる。

早田氏系図



左衛門太郎―六郎次郎の系統が土寄早田氏，盛秀・茂持の系統が船越早田氏である。この朝鮮史料から復元された系譜と，中世早田文書の人名をどのようにつなげていくかが課題として残されている。

左衛門太郎は朝鮮に帰化して受職人となり，「林温」とも称されたが，その後対馬に帰り，対馬の豪族として活動した。左衛門太郎は，世宗10年（1428）５月，朝鮮に対して，子を派遣して朝鮮の言語を学ばせたいと請い，許されているのは注目される（『世宗実録』10年５月戊午条）。その翌月に「今為学習而来，請給粮，就司訳院読書」と見える対馬島小童吾都音甫侍（同前10年６月甲申条）が，その子に該当しよう。左衛門太郎の時期が朝鮮通交の全盛期であり，活発な通交・外交を展開し，朝鮮人の送還，倭寇情報の通報，禁賊，日本国内事情の連絡なども行った（田村1967）。

左衛門太郎は世宗10年ごろ没し，その通交は子の六郎次郎（也伊知）が継承した。六郎次郎は受図書人となり，活発な朝鮮通交を行ったが，次第に宗氏におされてその貿易は衰退に向かう。六郎次郎で注目されるのは，琉球にも渡海し，朝鮮―対馬―琉球という貿易ルート上で活動したことである。まさに海商というべき広範な活動を行っている。しかし，朝鮮への倭寇活動は停止していたが，明への倭寇活動は依然として行っており（田村1967），平和な朝鮮通交者という姿は，実は一面的なものであった。

さらに世宗10年代以降，早田氏は衰退し，次第に宗氏の被官となっていくとされる。

河内守之事，不可有子細之状如件，

文安四

十一月十六日　　(宗)貞盛（花押）

早田河内守殿

（尾崎早田文書）

この文安4年（1447）の宗貞盛官途状は，土寄早田氏に河内守の官途を与えたものであるが，形式に若干問題がある。それは通常の官途状の充所には，官途を与える以前の通称が記されるのに対して，本文書では与えられた官途での名乗りが記されている。したがってこの文書の充所「早田河内守」のそれ以前の名乗りが不明なのである。ただし対馬宗氏の官途状には，この形式の文書があり，本文書が検討を要する文書というわけではない。この文書から，早田河内守が島主宗氏の被官化しつつあることが推定される。

この早田河内守は，「早田系図」（尾崎早田文書）では「盛昌」という実名の人物とされているが，この「早田河内守」（宗貞盛官途状）と「早田河内守盛昌」（「早田系図」）が，先の朝鮮史料から復元された早田氏系図のどの人物に該当するのか，あるいは該当しないのかについては不明とするしかない。朝鮮史料に頻出する左衛門太郎や六郎次郎は，尾崎早田文書や「早田系図」には明確な形では出てこないのである。時代的には，六郎次郎の子「梨花温」の時代に相当するが，この「梨花温」＝「中尾」と早田河内守の関係も不明である。したがってこの官途状からは，室町中期に早田河内守が宗氏から官途をもらい，宗氏被官化しつつあることは指摘できても，土寄の早田左衛門太郎家が宗氏被官化しているとまでは断定できないということになる。

室町中期の早田氏の活動で注目される史料がある。それは『世宗実録』7年（1425）10月甲戌条に見える「礼曹拠慶尚道監司関啓，対馬島興利倭船主所温田知，持已経行販路引，汎濫再来，請本道人路引，例於行販後随即収取，以防冒濫，従之」という記事である。この「所温田」が早田であることはいうまでもない（田村1967）。「対馬島興利倭船主」の早田氏は，一度朝鮮において「行販」＝商売に使用した「路引」＝渡航証明書を，不正に何度も使用しているというので，慶尚道監司から糾弾され，今後は一度使用した「路引」はすぐに没収するように制度が改められたのである。つまりこの早田氏は，いわゆる興利倭人として朝鮮で貿易を行っていたのである。この早田氏は，土寄もしくは船越の早田氏の一族と考えられる。

興利倭人（興利倭船）については，朝鮮に使者を派遣して貿易を行う使送倭人とは区別されていたが，朝鮮で貿易を行う日本人と漠然と考えられており，その実態は長く不明であった。近年，対馬の漁民が自ら生産した塩・魚をもって朝鮮の米穀と交易したのが興利倭船であり，三浦の乱までは朝鮮から公認されていたが，それ以後は禁止されたものの，興利倭船の活動はその後も続いていたことが明らかにされた（長1993）。早田左衛門太郎・六郎次郎父子は，朝鮮での興利活動に熱心であり，左衛門太郎の要求により，日本商船の到泊港が乃而浦・富山浦の二港に加えて塩浦が追加され，三浦が

成立した（同前）。土寄早田氏は，使送倭人としての活動ばかりでなく，興利倭人としての活動も活発に行っていたのである。とすれば室町時代における早田氏と朝鮮との関係を，受図書人や受職人の側面のみで理解するのは不十分であるということになる。

当国之公事免除之事，無相違致扶持候，并山手・船之売口買口・六地舟公事・同高麗船之公事已下事，讃州（宗貞茂）・同貞（宗）盛任御判旨，臨時公役等致扶持候所也，仍状如件，

長享弐

三月六日　　貞国

早田治部左衛門尉殿

（「御旧判控」与良郡尾崎村早田仁左衛門所持）

長享2年（1488）3月6日，宗貞国が早田治部左衛門尉に対して，対馬島の公事を免除したものである。あわせて山手・船之売口買口・六地舟公事・高麗船之公事などの諸公事も先判に任せて免除している。これらはいずれも島主宗氏が賦課していたものであったが，知行的な意味合いで，宗氏は早田氏に対するこれらの諸税を免除したのである。

ここで注目したいのは，「六地舟公事」と「高麗船之公事」の部分である。「六地舟」の「六地」とは九州本土のことを意味するので，「六地舟」とは，①九州から対馬に来た舟，②対馬から九州に赴く舟という両様の解釈が可能である。いっぽう「高麗船之公事」の「高麗船」とは，早田氏に即して考えると，対馬から高麗（朝鮮）に行く船という解釈が妥当である。「高麗船」をこのように解釈すると，「六地舟」も②の解釈が妥当であることになる。いずれも派遣の主体は早田氏という解釈である。このことから，早田氏が当時，対馬島土寄を拠点として，いっぽうでは朝鮮に使船や興利船を，いっぽうでは九州におそらくは商船を派遣していたことが明らかになる。朝鮮への使船・興利船派遣は朝鮮側史料からも確認できるが，この文書は，朝鮮史料に対応するものと位置づけることができる。

3．流通の拠点としての尾崎地域

前節で，室町時代の早田氏は，朝鮮のみではなく，九州本土とも交易活動を行っていたことを示した。尾崎地域においてこうした活動を行っていたのは，早田氏のみではなかった。

陸地・高麗のあきない（商）きてう（帰朝）の舟の御公事，舟のうり口かい口・人のうり口かい口・舟の山ての事，ふち（扶持）としてさし（擺）をく所也，此旨を可存知状如件，

寛正六年

九月十日　　成（宗）職

小島よりあい（寄合）中

（「御旧判控」与良郡尾崎村小島六兵衛分）

つしま（対馬）の国よら（与良）のこほり（郡）の内つち（土寄）より三ケ村よりかうらい（高麗）・六ち（地）へはたらき候するふね（船）の一俵物□・木手・山中下人立より之事，為給分宛行所也，任先例ちきやう（知行）いたされへき如之状件，

応仁元

九月廿九日

(宗)貞国（花押）

草鹿部平次郎殿

（日下部文書）

いずれも尾崎地域の中世文書である。前者は寛正６年（1465）に宗成職が小島寄合中に対して諸公事を知行として免除したもの。後者は応仁元年（1467）に宗貞国が草鹿部平次郎に対して諸公事を給分として与えたもので，草鹿部平次郎はその収取権を知行として与えられたのである。したがって同じような表現ながら，前者と後者では諸公事との関わり方が全く異なっている。

前者の史料では，小島寄合中が陸地（九州）と高麗（朝鮮）との間に商船を往来させていたことがわかる。後者の史料は，土寄三か村（土寄・水崎・仮宿か）から高麗・六地に渡海する船があったことを物語っている。いずれも土寄の早田氏の活動と同様の活動であったと考えられる。

おわりに

室町時代の尾崎地域には，小領主たちが経営した，朝鮮・九州と往来する商船が集中していたと考えられる。当該期の尾崎地域は，朝鮮―対馬―九州を結ぶ流通の拠点であった。これが『海東諸国紀』に記された戸数の多さの原因であると考えられる。つまり朝鮮初期の懐柔政策によって，尾崎地域の倭寇たちは，少なくとも朝鮮に対しては平和な使送倭人や興利倭人に変質していった。それは早田氏に典型的に見られるように，倭寇勢力の海商化をもたらしたが，その結果として，尾崎地域は，朝鮮―対馬―九州を結ぶ流通の拠点に変化したということができる。

［参考文献］

有光友学「中世後期における貿易商人の動向」（静岡大学人文学部『人文論叢』21，1971年）
長節子「興利倭船の研究」（『朝鮮学報』146，1993年）
田中健夫『中世海外交渉史の研究』東京大学出版会，1959年
田中健夫『中世対外関係史』東京大学出版会，1975年
田中健夫訳注『海東諸国紀』岩波文庫，1991年
田村洋幸「対鮮貿易における早田一族の特質」（同『中世日朝貿易の研究』三和書房，1967年）
対馬教育会編『対馬島誌』対馬教育会，1928年
中村栄孝『日鮮関係史の研究　上巻』吉川弘文館，1965年
韓文鍾「朝鮮前期対馬早田氏の対朝鮮通交」（『韓日関係史研究』12，2000年）
村井章介「三浦の乱時のソウル倭館」（田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館，1995年）

第Ⅴ章　ま　と　め

前回の調査で東南アジア産陶磁器の出土が注目された本遺跡は，今回の調査により生活に密着したより具体的な遺物を得ることができた。具体的には大形銭貨・金属製品・装飾品の出土等である。いずれのものも一括土壙などの出土でないことから，具体的な時期を示唆するものではないが，出土した陶磁器から考えれば15世紀前後を中心とし17世紀前半までの中で捉えることは可能と思われる。また，それぞれの遺物の特性から具体的にさらに時期が限定できるものもあり，今後の研究を待たねばならない点も多く抱え込んでしまったことも事実である。そこで大きくではあるが，本遺跡出土の陶磁器の概要と，無釉陶器について気づいた点を記述し，まとめとしたい。

青磁について

碗形態が主体であるが，他に盤・香炉・水注がある。これらについての共通した特徴として，釉薬を厚く施釉し，見込を露胎とするもの・見込に印花するもの・高台内露胎のもの・見込，高台内が蛇ノ目などがある。出土した龍泉窯系青磁のほとんどがこの特徴を備えている。見込に印花するものは，印花後に印花面を削って露胎とするなど，一見無意味な工程のものも観察される。見込，高台内露胎の碗については上田分類Ｅ・Ｄ類相当し，山本分類青磁碗Ⅳ類に相当するものである。どちらも15世紀前後に編年される一群で，山本編年では13世紀から後続する青磁として捉えられている。現在のところ，15世紀前後のまとまった資料がないことが細かな編年を確率する上でネックとなっている。また，上田編年では雷文帯青磁が先のＥ・Ｄ類と同じ時間軸上にのっている。このなかにあって編年上，雷文帯青磁の出土が大きな鍵を握ることになる。本遺跡では前回の調査を併せても雷文帯青磁の出土は今回出土の１点に止まっており，先の露胎・蛇ノ目を特徴とする青磁が圧倒的多数を占める。このことからも露胎・蛇ノ目剥ぎの碗と雷文帯青磁碗との間にいくらかの時間差があるものと考えられる。ただし，本遺跡出土の雷文帯青磁碗は，内外面に沈線による草花紋？を施すという大きな特徴があり，この手の雷文帯青磁については，雷文帯青磁碗のなかでも古手に編年することが出来る可能性を示唆しておきたい。

白　　磁

白磁は本文中でも触れたが，森田分類の白磁Ｂ群のなかでも推定金光寺跡出土の内面に型押するものと、Ｄ群の胴部屈曲タイプ，見込内底を削り出す深い碗が出土している。内面型押の白磁には端反りのものも出土しているが，このタイプについては今のところ類例を知らない。白磁Ｂ群については，森田は14世紀代のものとして編年し，白磁Ｄ群については14世紀後半から15世紀代に編年している。本遺跡では，白磁の中でも白磁Ｄ群が主体をなす。白磁皿の中でも，見込中央部と高台際から高台内を残して施釉する白磁皿の一群もある（第11図－25・26・38)。この時期の白磁皿として位置づけ可能か，今後類例を探す必要がある一群である。

朝鮮王朝陶磁器

森本・片山編年の第Ⅳ期，Ⅴ－①・②類を主体とし，Ⅴ期のⅥ－①～③類も出土している。また，

第Ⅵ期の資料も比較的多く出土しており，ほぼ14世紀後半～15世紀の前半のものと16世紀後半から17世紀前半の画期があるものと考えられる。青磁・白磁の年代とほぼ同じ様な傾向が伺える。器種的には多種多様で，碗・鉢・皿・瓶・梅瓶・広口壺・偏壺などが出土している。象嵌によって文様を構成し，黒・白の象嵌をする場合が多い。一方，森本・片山編年のⅥ期と思われるものは，碗形態を主体とし，その他皿・坏で構成され，各々磁器と陶器がある。雑釉陶器に船徳利と小振りの甕が出土している。

東南アジア産の陶磁器類を見る限りにおいて，青磁・内白外褐釉碗・白磁は14世紀後半から15世紀前半にあたるものと判断できるが，東南アジア産の陶磁器編年については筆者の力量の域を出ないことから今後判断を仰ぐ必要がある。

以上，陶磁器について概観した結果，14世紀後半～15世紀前半の時期と16世紀～17世紀初頭の２つの画期を想定しておかなければならない。特に14世紀後半～15世紀初頭と考えられる遺物については，放射性炭素年代の測定結果，Ａ区のⅣ層・Ⅵ層の炭化物の年代が，1420年を超えない値が示されていることは重要な意味をもつものと考えられる。つまり，本遺跡のⅣ～Ⅵ層は，遺物からみればいくらかの攪乱があることが考えられるものの，基本的に14～15世紀前半の包含層として捉えることは可能と考える。

本遺跡出土の朝鮮産無釉陶器の特徴

日本陶磁の流れを知る上で，朝鮮産無釉陶器の果たす役割は多大なものがあると考える。本遺跡出土の14世紀後半から15世紀前半と思われる無釉陶器の所見を提示することとし，今後の検討課題としたい。無釉陶器とはその名のとおり，表面に釉薬を一切使用しない陶器であり，主に甕・壺類が主となる。本遺跡出土の無釉陶器は口縁部が朝顔状に開くものが主体であるが，体部の調整・胎土により大きく３つに分けることができる。

1・内面の当て具痕が青海波で，最後に沈線を一定の間隔で横走させるタイプ。このタイプは胎土が青灰色を呈し，白い鉱物が多量に入る。器壁はやや薄く焼成はあまい。表面はナデにより打圧痕が消される。(第16図－105)

2・内面の当て具痕が放射状のもの。外面の叩き痕は格子目で，胴部には数条の突帯を貼り付ける。胎土は赤茶褐色の堅緻なものと，灰褐色のやや軟質のものがある（第16図－101～104)。

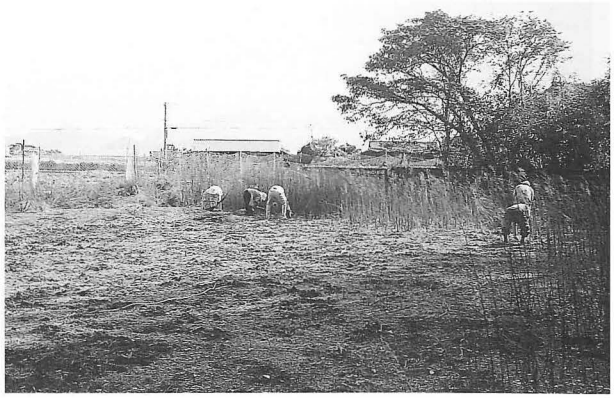
3・外面に突帯を張り付け，表面に格子目の叩き成形をおこない，その後にナデ成形をおこなう。内面は当て具痕が確認出来ないくらいにナデ整形をおこない，横方向に条線状の擦痕が走る。軟質で黄橙色のものもある。

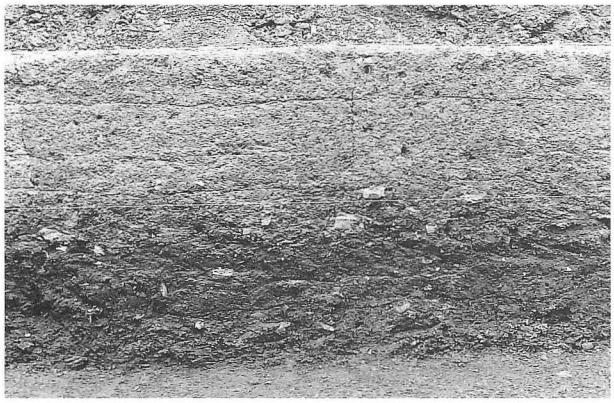
これ以外にも多種あり，現在掌握しているものはこの３種である。今後さらに細分し，いわゆる無釉陶器から雑釉陶器への流れを検討していきたい。

赤司善彦1991「朝鮮産無釉陶器の流入」－高麗期を中心として－『九州歴史資料館研究論集16』
森本朝子・片山まび2001「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案－生産地編年を視座として－」『博多研究会誌』第８号　博多研究会

図　　版

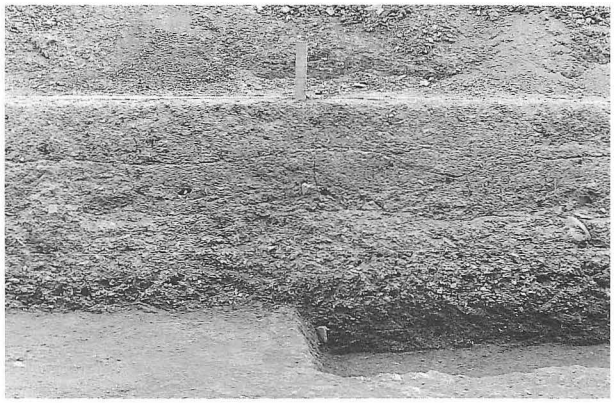
調査区から北側の谷側を望む



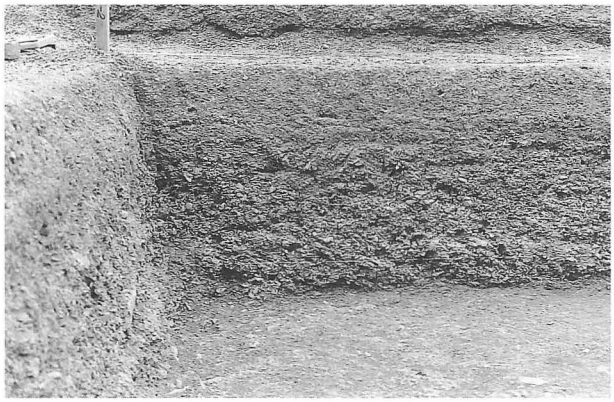


Ⅰ層
Ⅱ層
Ⅱa層
Ⅳ層
Ⅴ層
Ⅵ層
Ⅶ層

南側土層

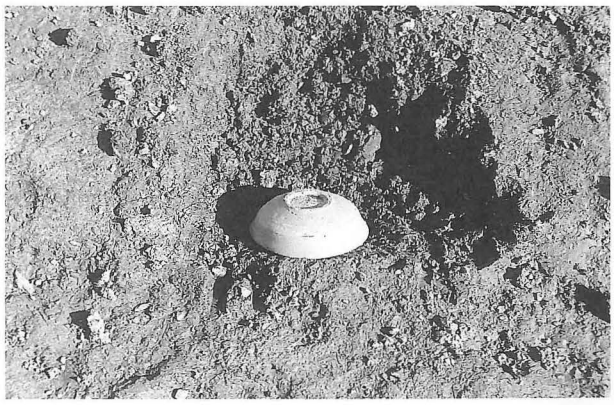


東側Ｂ・Ｄ区の境目の土層



Ⅰ層
Ⅱ層
Ⅲ層

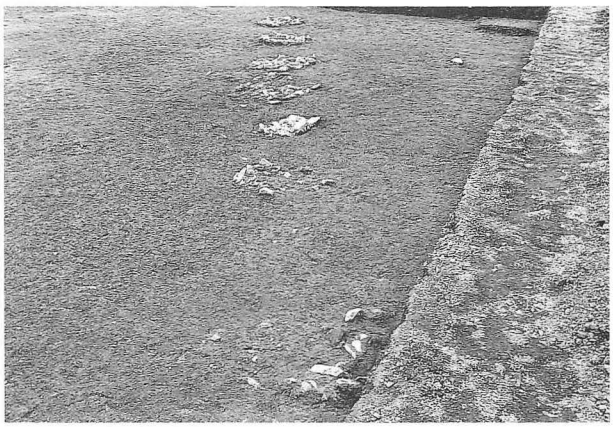
北東隅土層



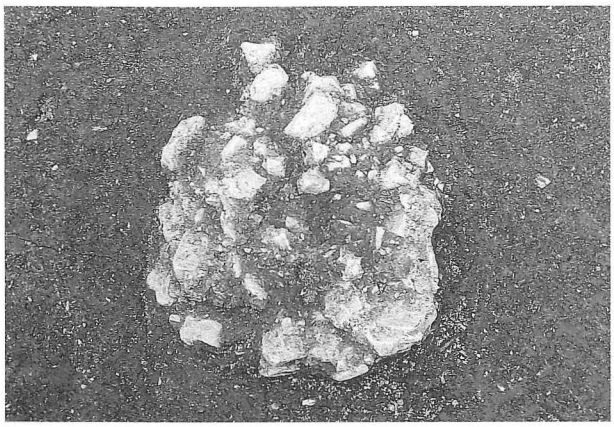
遺跡付近の中世墓

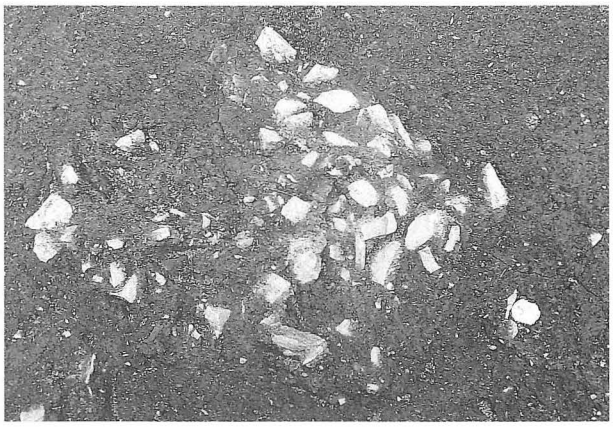
言い伝えによると，応永の外寇のときの戦死者を祭るものとされる。
最近まで年１回村人で祭りをおこなっていたという。

図１　遺跡近景・他

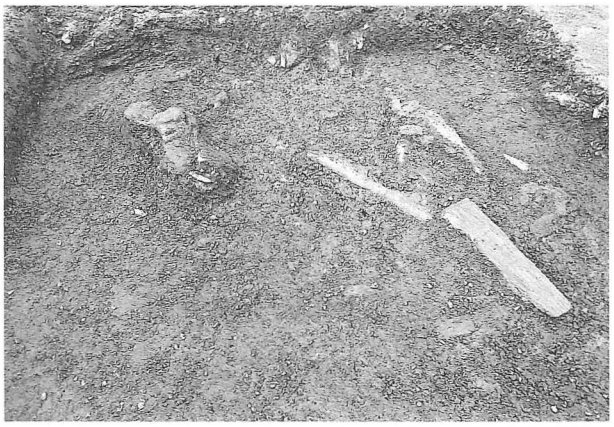


Ⅱａ層上面確認の大型建物遺構（南西側より）





大型建物遺構の礎石



近世の粘土充填ピットと大型海棲獣骨

D区３層上面確認ピット

C・D区３層上面確認ピット（西側より）

図２　遺　　物

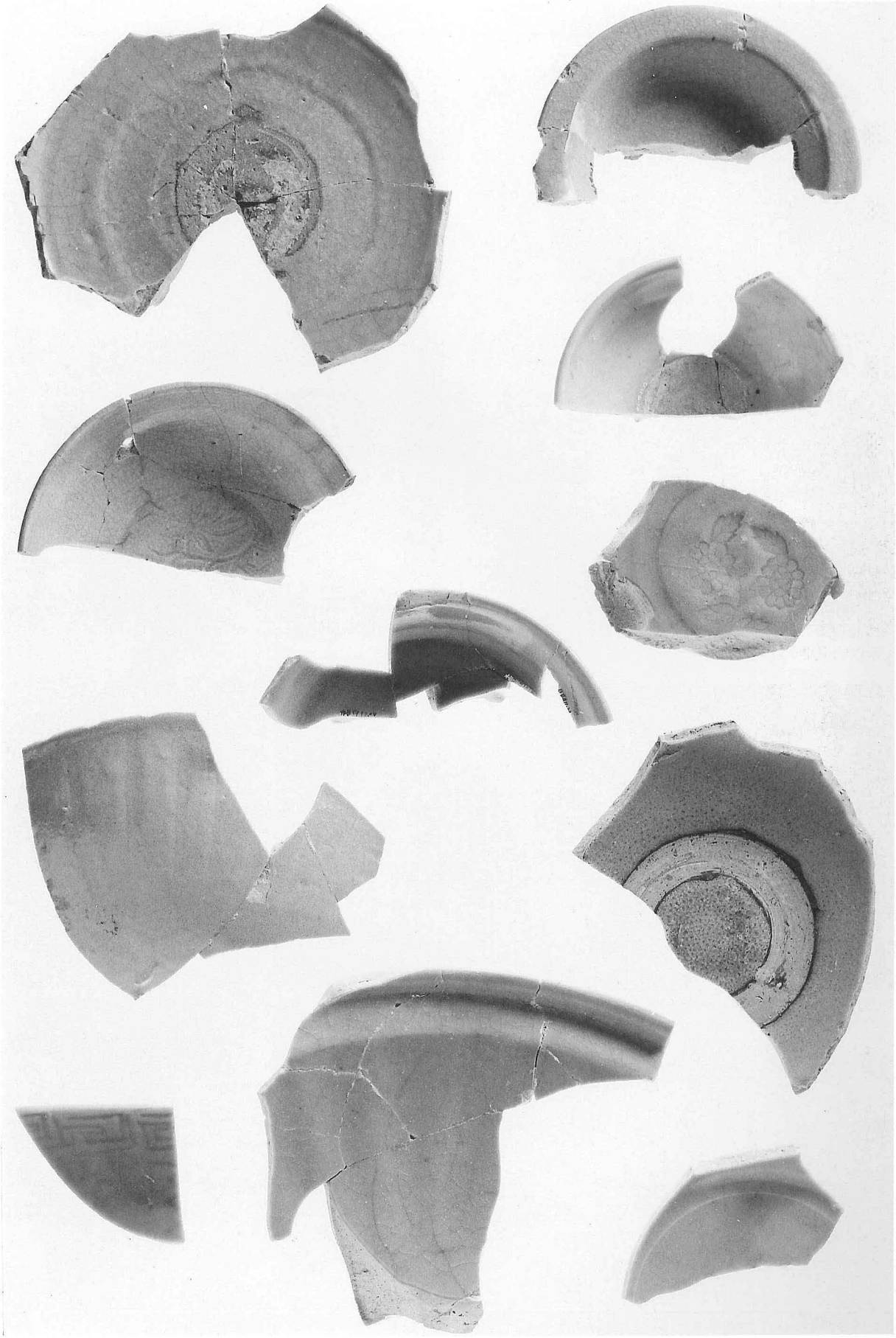


図3　青　　磁

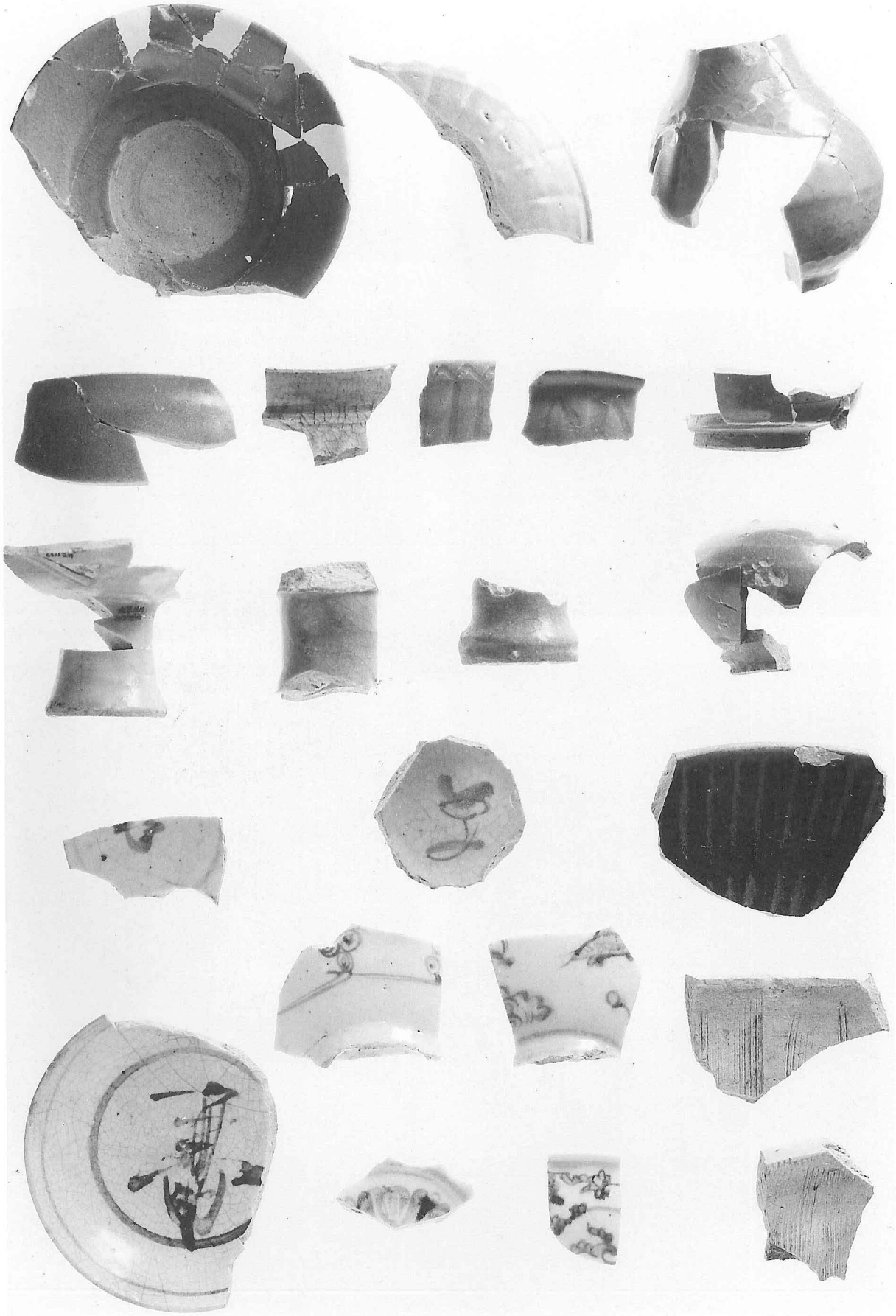


図4　青磁・明青花等

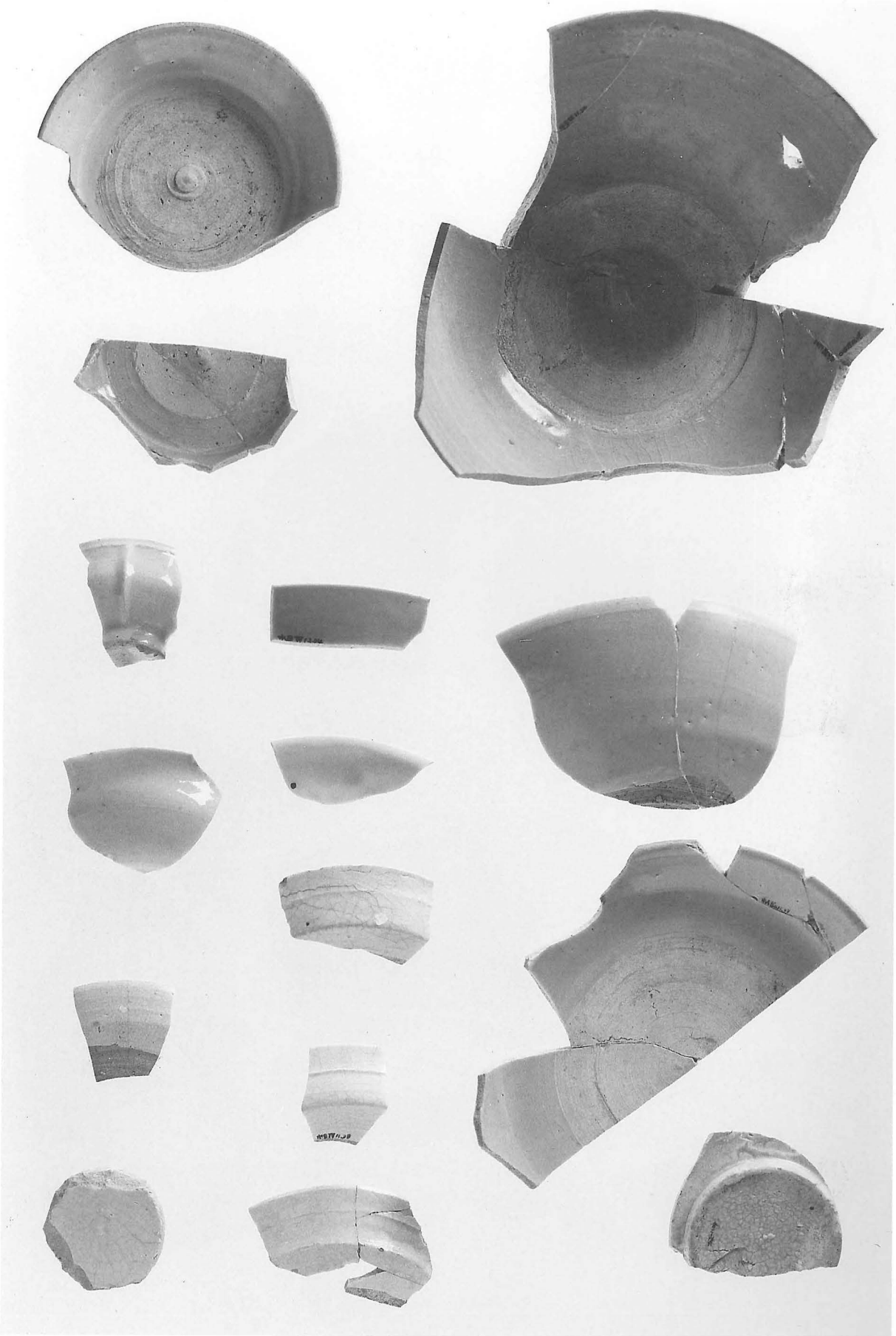


図5　白　　磁

図 6　朝鮮王朝陶磁

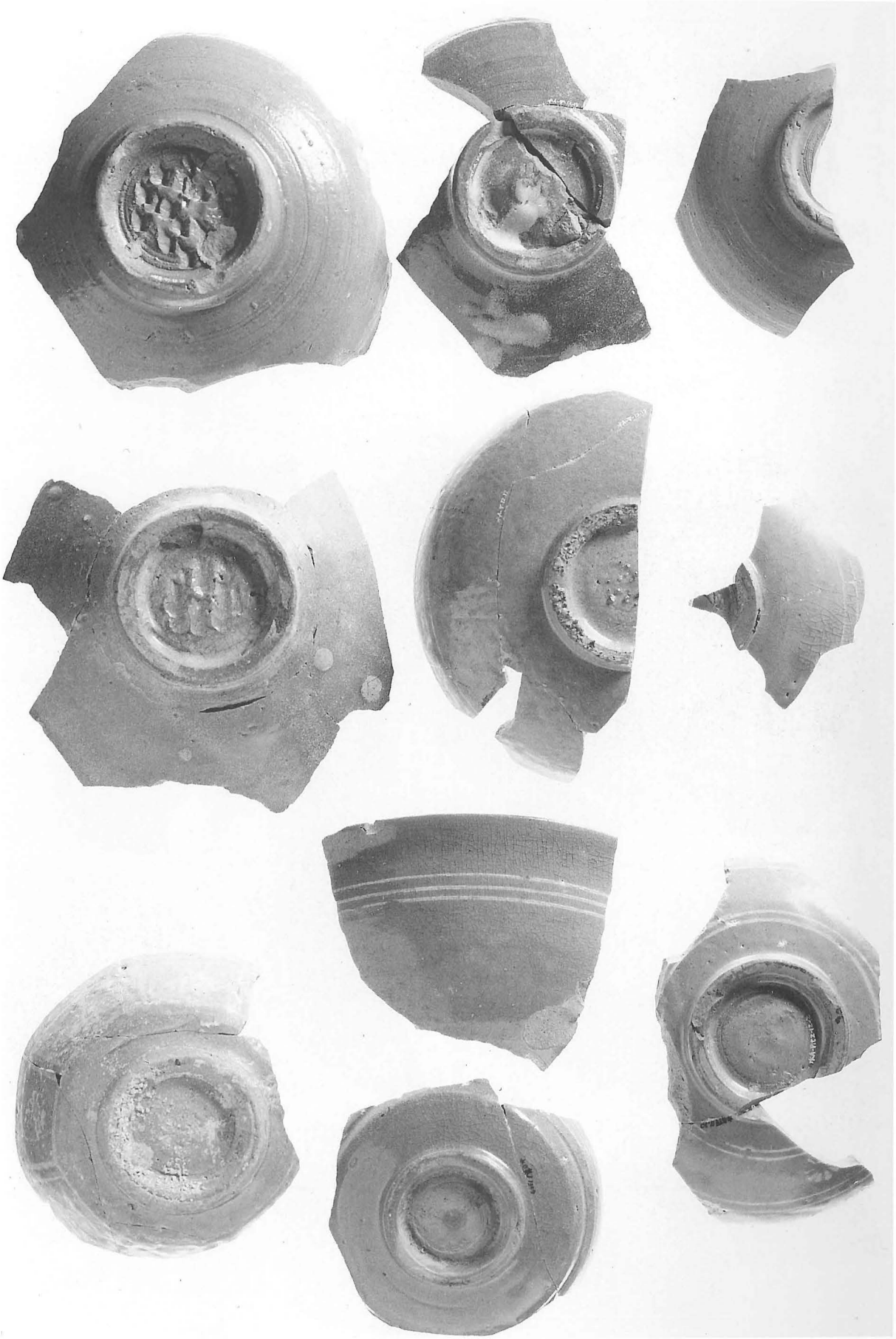


図７　朝鮮王朝陶磁

図 8　朝鮮王朝陶磁

図 9　朝鮮王朝陶磁

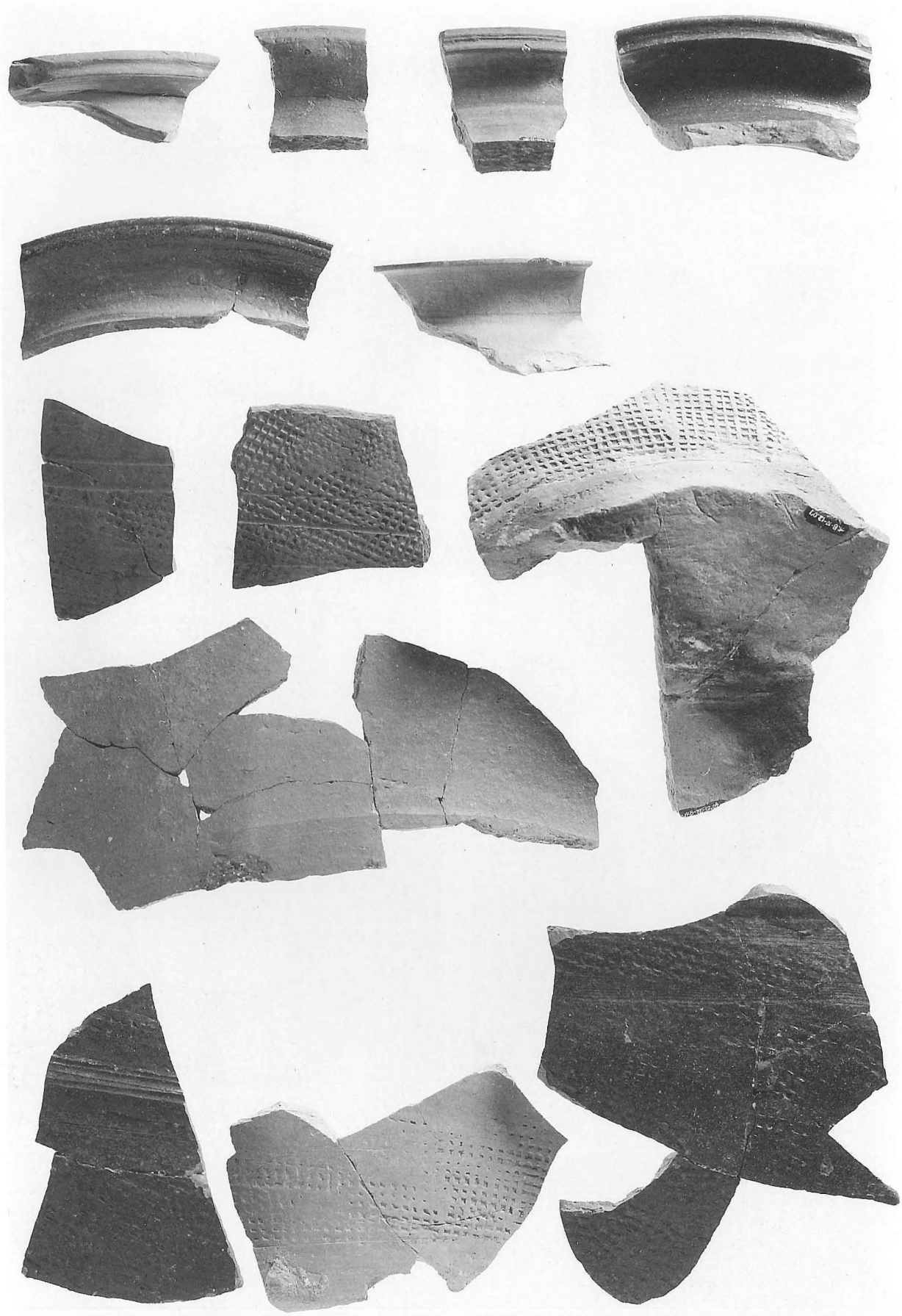


図10　朝鮮王朝陶磁

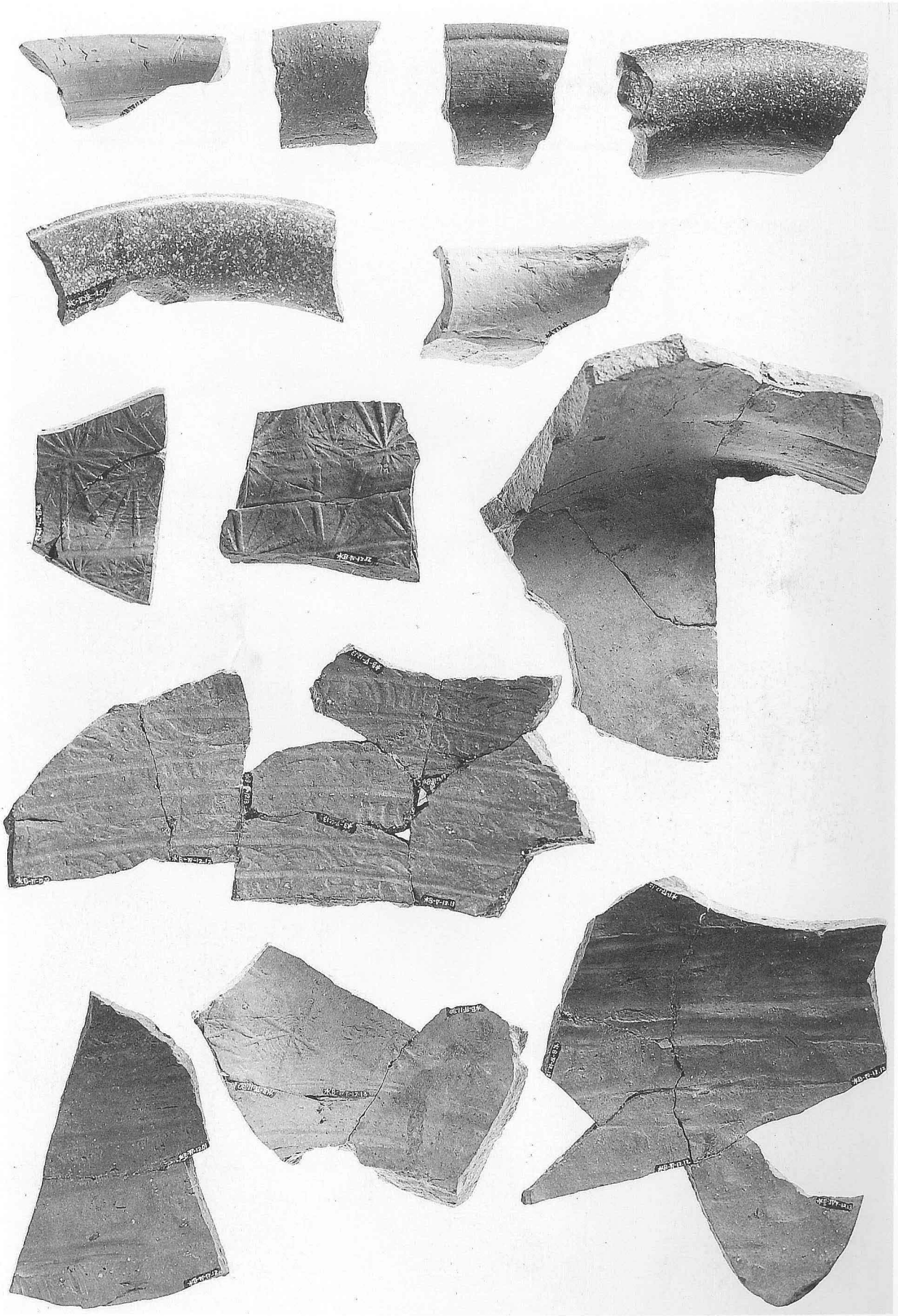


図11　朝鮮王朝陶器

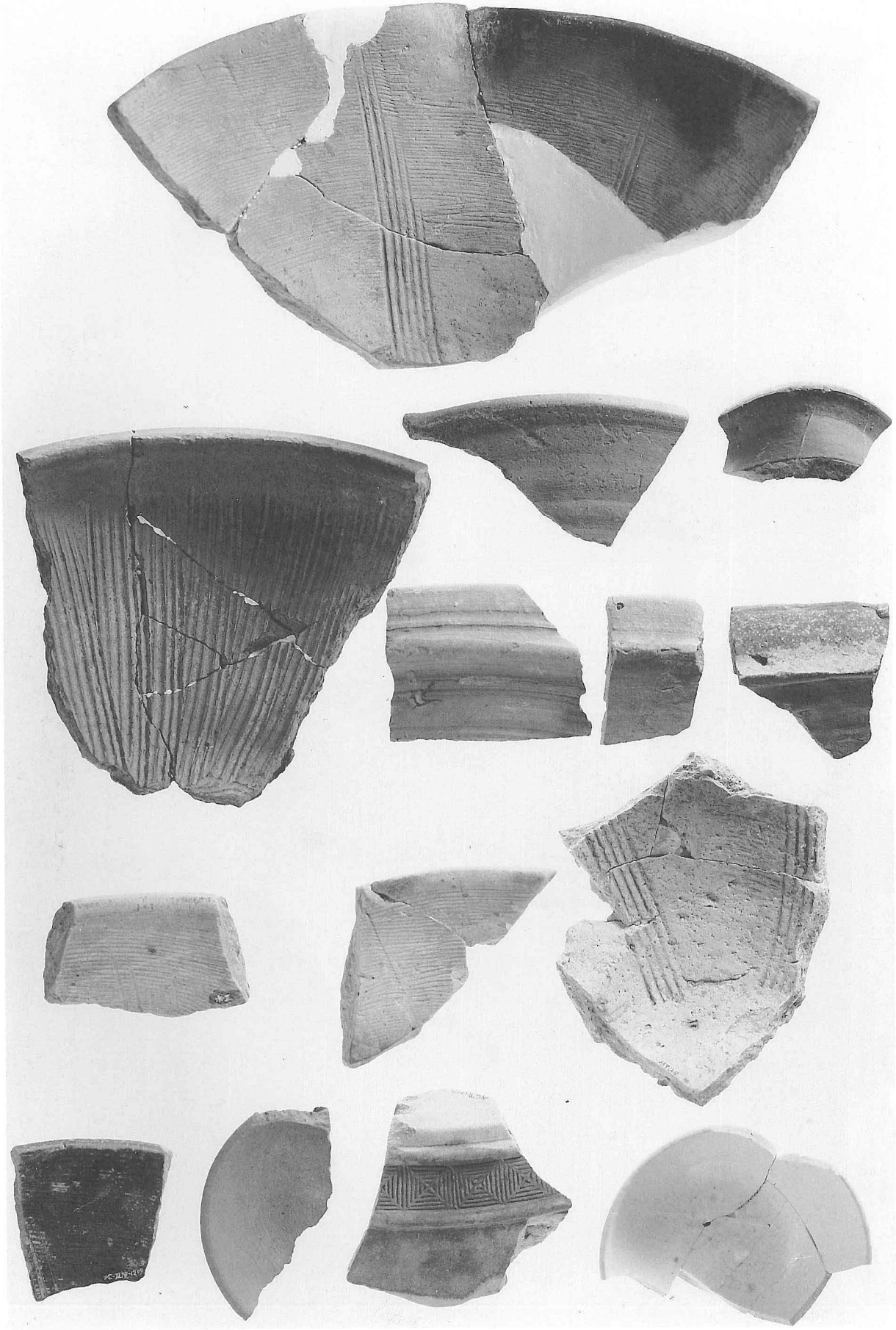


図12　国産の陶磁器

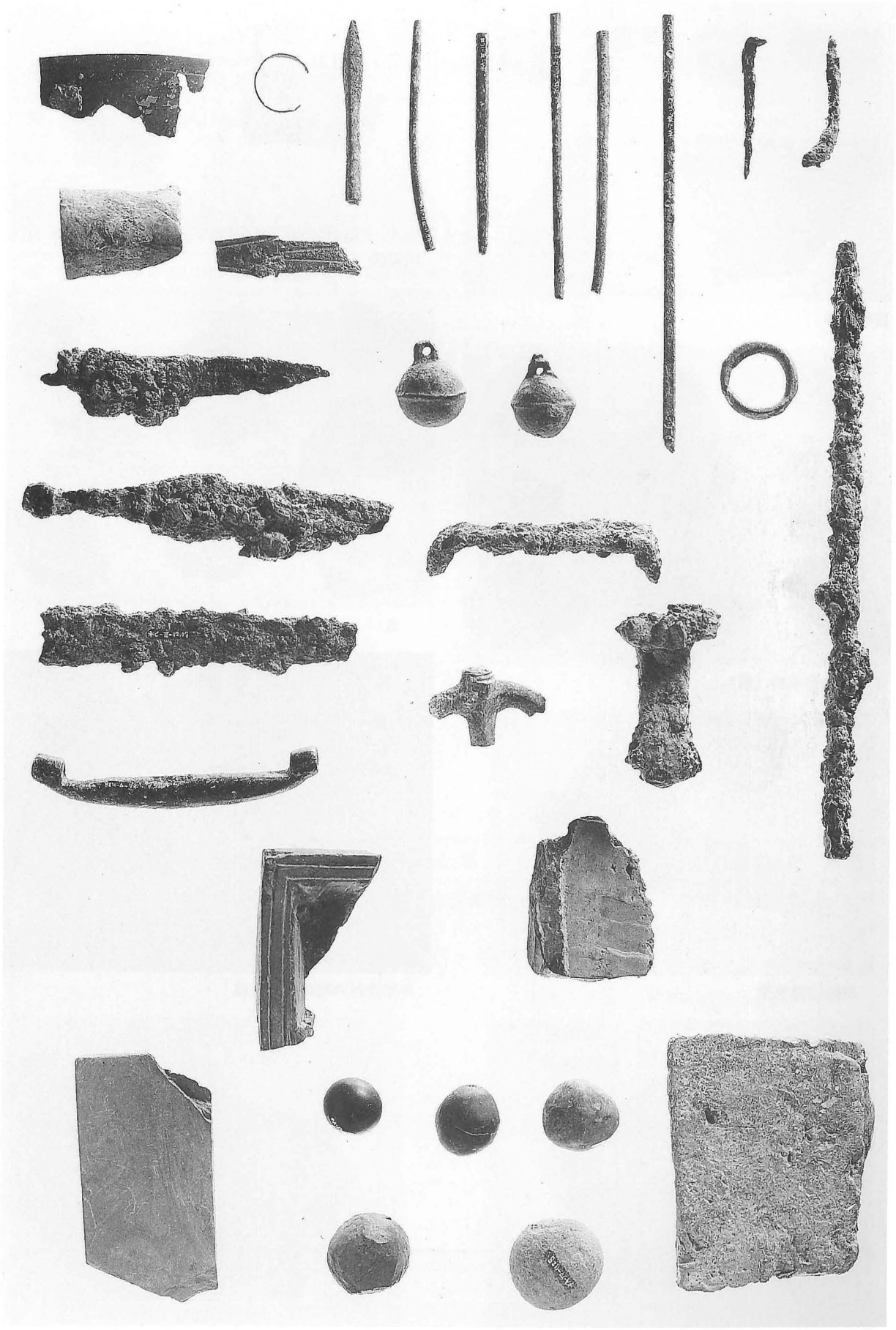
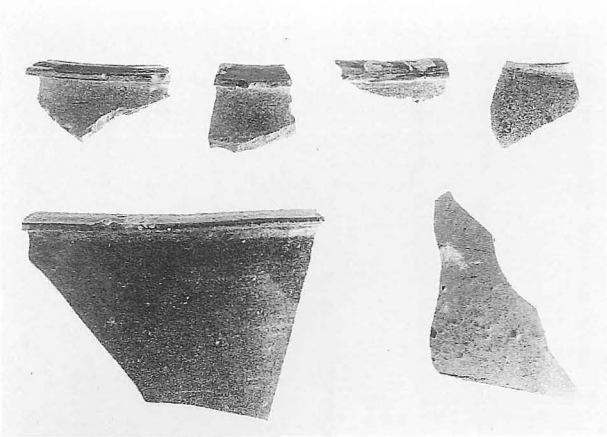
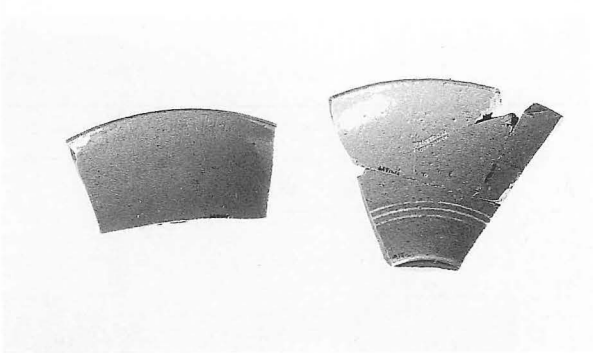


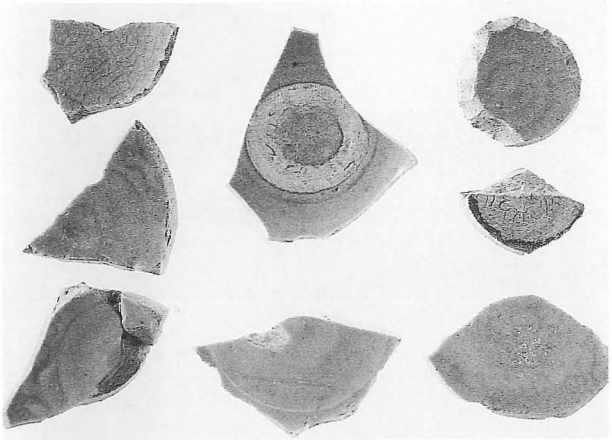
図13　金属・石製品



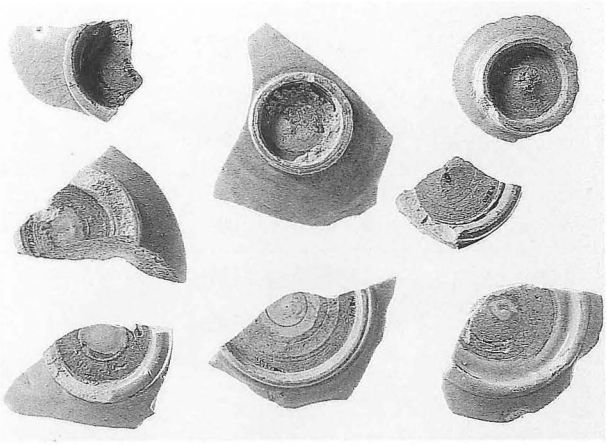
雑釉陶器



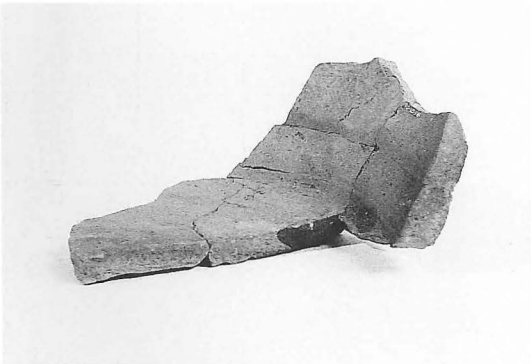
内弯碗



その他の青磁類（表）

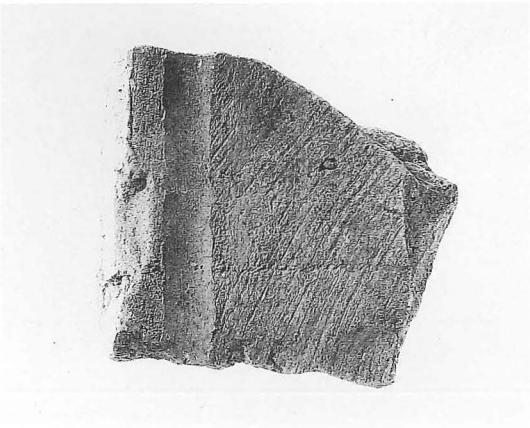


（裏）



無釉陶器底部

無釉陶器内面の当て具痕



瓦表

裏

図14　朝鮮王朝陶磁・龍泉窯系青磁・他

報告書抄録

フリガナ	ミズサキ（カリヤド）イセキ
書名	水崎（仮宿）遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	美津島町文化財保護協会調査報告書　第1集
編著者名	田中淳也　福田一志　川口洋平　佐伯弘次　櫻木晋一
編集機関 所在地 発行年月日	美津島町文化財保護協会 長崎県美津島町 西暦2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
水崎（仮宿） 遺跡	長崎県上県郡美 津島町大字尾崎 字仮宿	442	001	34° 18′ 46″	129° 13′ 47″	20001106 ～ 20001221	200m²	緊急雇用 対策事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水崎（仮宿） 遺跡	集落	中世	掘立柱建物	石帯 朝鮮王朝陶磁 中国産陶磁 ベトナム・タイ 産磁器 中国銭貨	龍泉窯系青磁・朝鮮王朝陶磁とともに東南アジア産磁器が多数出土。

美津島町文化財保護協会調査報告書　第１集

水崎（仮宿）遺跡

2001年３月31日

発　行　　美津島町文化財保護協会
長崎県美津島町

印　刷　　㈱　昭　和　堂　印　刷